

この試訳について

これは、19 世紀ロシアの女性数学者として知られる C.B.コヴァレフスカヤ（1850-1891）の中編小説「*Нигилистка*」の試訳である。

底本としたのは次の書籍である。

Ковалевская С. В. Воспоминания Повести. М. 1974. С.90-156.

ただし、この書籍の現物は入手できなかった。PDF 化された画像が下のサイトにあり、作業にあたってはそれを適宜参照した。[2024 年 1 月 8 日閲覧]

https://imwerden.de/pdf/kovalevskaya_vospominaniya_povesti_1974_text.pdf

なお、この画像は OCR によるテキスト化がされていて、テキストは下のサイトに置かれている。この試訳は基本的にこれに基づいている。[2024 年 1 月 8 日閲覧]

http://az.lib.ru/k/kowalewskaja_s_w/text_0030.shtml

ただし、OCR による誤変換が、訳者が気づいただけでも一、二箇所あったので、他にも同様の過誤が含まれる可能性は否定できない。

なお、訳出にあたっては下の英訳を参照したことを付言しておく。

Sofya Kovakevskaya (translated by Natasha Kolchevska with Mary Zirin), *Nihilist Girl*, (New York, The Modern Language Association of America, 2001)

この試訳の仮題『ニヒリストの少女』は、上記英訳書のタイトルに倣ったものである。本書の邦訳は現在までのところ見つけられずにいるが、H.マトヴェーエフ、草鹿外吉・藻利佳彦訳『科学のプリンセス』水曜社、1982 年、202 頁では本書の存在が『女性ニヒリスト』というタイトルで紹介されている。

仮訳の草稿を早稲田大学文学学術院坂庭淳史教授に目を通していただき、おびたしい数の誤訳その他の指摘を受けて必要な修正を行った。教授には心からの謝意を表す。ただし、この試訳になお不完全・不十分・不適切な箇所があった場合、それはひとえに訳者の責に属することは言うまでも無い。

石川顯法

I

ペテルブルクに落ち着いたのは、私が二十二歳の時だった。その三ヶ月ほど前に私は外国の大学での課程を終え、博士号を手にしてロシアに帰ってきたのだ。大学のある小さな町での五年間の孤独なほとんど引きこもったような生活の後、ペテルブルクの生活はすぐに私を虜にし、まるで私を酔わせるかのようだった。近頃ずっと私の内面全体を満たしていた解析関数や空間、四次元に関する比較検討をしばらくの間忘れ、今では私は心から新しい関心事に没頭し、手当たり次第に知り合いを作り、様々なサークルに入ろうと努め、ペテルブルク生活と呼ばれるこの複雑で、実際のところそれほど中身は無いのに、一見したところではかくも心をひきつける魅力的な混雑のすべての表れを貪欲な好奇心を持ってよく観察していた。今やあらゆるものが私の興味を引き、楽しませてくれていた。劇場もチャリティー・パーティーも、ありとあらゆる種類の抽象的なテーマについて延々と無意味な議論を繰り広げている文学サークルも私を楽しませてくれた。これらのサークルの普通の参加者にとってはそういった議論は既にうんざりするものであったが、私にとっては斬新な魅力に満ちていた。私はその議論にまったく夢中になって身を委ねた。それは私のような元々おしゃべりのロシアの人間にはそれができたし、ドイツで五年間暮らし、それぞれがむさぼるように取り組んでいる自分の狭い仕事に夢中になっていて、中味の無い無駄口をたたくのに貴重な時間を費やすことがどうしてできるのか理解できないといった二、三人の専門家達の排他的な社会ですごしていたからなおさらだった。私自身が他者との交流から抱いていた喜びは、まわりの人々にも及んでいた。私自身が熱中しながら、私は出入りしていたそのサークルに新たな活気と生気を持ち込んだ。学識ある女性という評判は私をある種の栄光で包み、知人たちは皆私に何かを期待し、二、三の雑誌は既に私について書きたてていた。有名な女性というこのさらにまったく新しい役まわりは私をいささか当惑させもしたが、それでもはじめのうちは私をとでも喜ばせた。まあひとことで言えば、私は最も穏やかな気分できて、いわば名声との「lune de miel (ハネムーン)」を体験していたのである。人生のこの時期になれば、おそらく「すべては最高の世界で最上の姿に作り上げられた」と喜んで叫んだことだろう。

今日、私はとりわけ穏やかな気分だった。昨日、ある新しい雑誌の編集部のパーティーに出席したのだが、その雑誌は創刊されたばかりで、私もそれに寄稿するよう提案されていた。出席者は皆この新しい事業に興奮し、編集部の土曜日ごとの集まりは尋常ならざる活気という点で抜きんでていた。私は真夜中の三時に帰宅し、今日は遅く起きて、モーニングティーを飲みながら新聞を何紙か長いこと興味深く目を通した。たまたま、彫り物のある本棚が売り出されているという広告を見て、私はそれを見に行ってきた。途中、鉄道馬車の中で私と同じくごく最近開設された女子高等教育課程の委員会のメンバーである知り合いの女性に会ってしばらく彼女と「仕事について」話をし、さらにもう二、三人の知り合いのところに立ち寄り、四時頃までには家に戻って、今では焚きつけられた暖炉の前の心地良い肘掛け椅子に座って装いを凝らした自分の書齋を満足げに見回していた。ドイツ人の女家主たちのもとで家具付きのいろいろな部屋での苦勞をしてきた五年間の後だけに、今では私は自分の居心地の良い部屋の新しい喜びに満足を感じていた。すると、玄関の間で呼び鈴が鳴った。

「誰だろう？」と、私は頭の中で様々な知人の名前を思い起こしながら考え、少し心配になって、私の身だしなみがきちんとしているかどうか確かめるために鏡に視線を向けた。

部屋に入ってきたのは質素なラシャの冬外套を着た背の高い若い女性だった。近視のせいで私はこの婦人を知っているのかどうかすぐには判断できなかった。その上、黒いスカーフが彼女の顔をほとんど完全に隠していたのでなおさらだった。小さく端正な、寒さのせいでほんのわずかに赤みがかった鼻だけが見えていた。私は、そのまなざしにちょっと戸惑いをうかべつつ、親切にその客人を迎えるべく立ち上がった。

「私は個人的に知りあいでもありませんのに、思い切ってあなたをわずらわせる決心をしたことをどうかお赦してください。」と入ってきた婦人は話し始めた。「私はヴェーラ・バランツォーヴァといいます。とは申しても、あなたはおそらく私の名前を覚えてはいらっしゃらないでしょうね。私たちの両親は領地がお隣りだったのですけれど。最近私はあなたについての新聞記事を読みました。あなたが長い間外国に留学されていたことは知っていますし、あなたについて優秀で真面目なただという噂がいたるところで流れています。それで、あなたでしたら私に何かアドバイスをしていただけるかもしれないと頭に浮かんだのです。」

彼女は急いで一気に、しかし極めて心地よい胸に響かせるような低い声でこれだけのことを言った。私は、当惑もしたし、この自分自身の知名度の証拠によってくすぐられもした。見ず知らずの人が私にアドバイスを求めたのは、これが初めてのことだった。

「ああ、とても嬉しいです！どうぞお座りになって。それに毛皮外套もお脱ぎください」私は愛想よく、と同時にとてもまごつきながらつぶやくように言った。

ヴェーラは頭から黒いスカーフを脱ぎ去った。その時、こんなにも美しい人がいるんだと、私はとても驚いた。

「私は世界でまったくひとりぼっちで、頼る人もいません。私の個人としての生活は終わってしまっているのです。私は自分のためには何も期待していないし、何も望んでいません。しかし、私の強烈な、私の燃えるような願い、それは『大義』のために役に立ちたいということです。おっしゃってください、教えてください、私は何をなすべきなのでしょうか？」とヴェーラは、突然、何の前置きもなく、自分の訪問の目的を語り出した。

これが別の女性であれば、この奇妙で思いがけない始まりは、不快に驚かせたかもしれないし、何か効果をおねらったかのように思われたかもしれない。しかし、ヴェーラはほんとうに飾り気なく話し、彼女の声はとても誠実で、興奮気味で、懇願するような調子だったので、私はあきれてしまうなんて思いもしなかった。

この背が高く、スタイルの良い、そしてくもった血色の良くない顔と物思いに沈んだ青い目をした少女は、突然、私にとってたいへん近く、好感の持てる存在になった。ただ一つ私にとって強い心配だったのは、私が彼女の信頼に応えられないのではないか、彼女の訴えに対してしかるべく答える能力が無いのではないか、彼女に役立つアドバイスをできないのではないかということだった。そして、最近の三、四ヶ月の自分自身の生活が突然、空虚で取るに足らないものに思われ、私を満たしていたすべての関心事がその意味と意義を失い、予期せぬ良心の呵責が私を刺した。「私は彼女に何を話せばいいのだろうか？ どうやって彼女を助ければいいのだろうか？」

何から始めたらいいのかわからないまま、私はヴェーラにひとまず腰掛けるように促し、お茶を出すよう

にメイドに指図した。ロシアではサモワール無しには打ち解けての会話は一つとして成立しないから。私達の出会いの最初の一時間からヴェーラが私をひどく驚かせたこと、それは彼女が自分の内面の関心事以外にはまったく無頓着だったことである。彼女はある種の千里眼の人達に似ていた。彼らの視力は彼らだけに見えることがらの存在に影響されて、そのほかの印象を感じ取る能力が無いのである。私は彼女に、ペテルブルクに来て長いのか、ホテルには慣れたかと尋ねた。しかし彼女はこの月並みな質問すべてに、気もそぞろに、不満げに答えた。人生の些細なことは、見たところ、彼女の心を少しもとらえていなかった。彼女はこれまでに一度もペテルブルクに住んだことはなかったが、首都の生活は彼女を驚かせもしなかったし興味も持たせなかった。彼女は、人生の使命、目的を見つけ出すという一つの考えに完全にとらわれていた。私がこれまでに知っていた人達とはかくも似ていないこの若い娘さんに私は強く惹かれた。そこで私は、彼女の信頼に応えようと、その心の奥底にある思いに迫ろうとした。彼女の問いに対して、私は彼女のこともっとよく知るまでは彼女にアドバイスを与えられないと答えた。私は、ヴェーラにできるだけ頻繁に私を訪ね、自分の過去をすべて話してくれるように頼んだ。ヴェーラ自身どうやって話そうかということだけを考えていたようで、私のすべての質問に対してかなり率直に答えてくれた。私がヴェーラの心に入り込み、ひとりの女性が他の女性の心を読める限りで、彼女の心をはっきりと読み取れるのに何週間もかかることはなかった。

II

バラントォーフ伯爵家は、名門とまでは言えないにしても、よく知られた家系である。確かに公式の家系図はほぼリューリック朝の時代に至るまで描いているが、この文書の信憑性には疑問が残る。完全に明らかなのは、イワシカ・バラントォーフとかいう人物が、女帝エカテリーナII世陛下のもとで中隊の兵卒として仕えていたということだけだ。彼は紅顔でとてつもない大男だった。そして母なる女帝を前にして、忠実な勤務によりすぐに伍長に任じられ、五百人の農奴付きの領地と千ルーブルを与えられた。農奴は安いものだったが、お金は当時としては高額だった。このときからバラントォーフ家の繁栄が始まった。一家はアレクサンドルI世から伯爵の称号を与えられ、その宮廷では美しい伯爵夫人バラントォーフヴァがしばらくの間大変重要な役割を演じた。しかし、この一門の記録によれば、この百年のうちにただ単に成功ばかりではなく、急変にも遭遇した。

バラントォーフ家の人々は皆情欲の熱烈さと自由奔放さの点で際立っていて、この特性は一度ならず彼らを不幸に導いた。この時期に、豊かな領地を一つならず、また収益の大きい郷も一つならずトランプですってしまったり、あるいは馬や美女に使い果たされたりしたこともあった。その後、バラントォーフ家の運命には一時的な衰退があったものの、ありがたいことに、この小さな暗雲はすぐに皇帝のお慈悲という太陽によって晴れることになった。バラントォーフ家の人達は誰であれ、いつでも抜け目なくツァーリと祖国に力を貸した。それで、失われた財産の代わりに新しい豊かな領地が現れたので、いろいろ大変ではあったが一族は成長し繁栄し続けることができた。しかし、領地があつという間に使い果たされたり、逆に一門がすばやく成金になったりしたとしても、そんなこととは別に必ず世代から世代へ、つまり父から息子へ、母から娘へと必ず受け継がれる貴重な遺産があった。それは、並外れた、いわば先祖譲りの美貌であった。バラン

ツォーフ家の人々はみな美しかった。醜い人とか顔をそむけたくなるような人達だけでなく、単に器量がよくないという女性も彼らの中にはあり得なかった。まるで美に対する自然な渴望を我が身に感じているかのように、あるいはダーウィンの説を本能によって予見しているかのように、 balan ツォーフ家の伯爵たちはみな美しい女性と結婚し、その娘たちはみな美男の夫を見つけた。そうして、今やこの一族のタイプは確立し、ロシアの貴族階級の間でとてもよく知られている。もしあなたがまったく balan ツォーフ家の顔をした男性なり女性なり誰かのことを聞かされて、あなたの想像の中にはっきりとしたイメージ、つまり高くすらりとした背丈、頬にわずかに透き通るような赤みのある細長い顔、こめかみに青みがかかった静脈の細かな模様がある低くて広い額、カラスの翼のような黒い髪、黒いまつげの付いた青い目というイメージが即座にあなたの頭に浮かばなかったら、あなたは貴族階級には属してなくて、ロシアの of the upper ten thousands (上層一万人の) 事情について何もご存じではないということになるだろう。

この balan ツォーフ一族のタイプというのは非常にゆるぎなく、生命力に富んだものだったので、古き良き農奴制の時代には、そのタイプのなかみとして伯爵領の農民や召使いのところに忍び込んで行く才能さえ認められたほどである。それは驚くべきことだった！領主自身や若旦那が自分の領地に泊まりに来ると、必ずと言っていいほどその後でこちらの百姓家かそうでなければあちらの百姓家で、しかもそれらの家のどこにも若くて美しい百姓娘がいるのだが、そこで赤ん坊が産声をあげるのだ。それはまるで領主の家の子どもと同じように細い上品な顔立ちをしたよく似た小さな balan ツォーフだった。

ミハイル・イワノヴィチ・ balan ツォーフ伯爵は、一族の立派な子孫であった。彼自身美男子で、幸運にもニコライ帝の治世の初期、ペテルブルク近衛連隊の全盛期に生まれた。幾年間か胸甲騎兵連隊に所属し、多くの女性の心を悲しませ、正直に言えば仲間うちで「雷男」という自尊心をくすぐる異名を勝ち取った後、彼はまだ若かった時に遠縁のマリヤ・ドミトリエヴナ・クドリャフツェヴァに惚れ込んで夢中になった。その彼女もまた、まるで偉大な彫刻家の作品のような端正な顔に balan ツォーフ一族の明らかな刻印が認められた。彼女と相愛の間柄になって彼は教会で彼女との結婚式を挙げ、勤務は続けた。おそらく彼は高い階級に就くまで勤務を続けるはずだっただろう。しかし、アレクサンドルII世の治世の初めの時期に彼の身にちょっとした不愉快な出来事が起きた。その理由はやはり激しい balan ツォーフ家の血と balan ツォーフ一族の人々に特有の破滅をもたらすような美しさにあった。自身の美しい妻と他の近衛士官との間を嫉妬した彼は、その士官に決闘を申し込んで一発で殺害した。この話はどうかこうにか揉み消されたが、若い伯爵にとってこの後も自分の連隊に残るのはやはり気まづかった。彼は辞表を出すことを余儀なくされ、ちょうど時期を合わせるかのように他界した父から相続したばかりの領地へと去った。

それは 1857 年のことだった。ペテルブルクでは、農奴解放が間近に迫っているというはっきりしない噂もあったが、 balan ツォーフ伯爵の領地であるボルキには、まだその噂は届いていなかった。そこではまだすべてが古き良き秩序の中で進行していたのである。当時ミハイル・イワノヴィチ伯爵の財産がどれほどのものであったかは誰も正確には知らず、そもそも彼自身が誰よりも知らなかった。領地はかつての規模からはほど遠いものの、大きなものであった。亡くなったお父様（どうか彼に良い思い出がありますように）もまた楽しみ事の中で人生を謳歌することを愛していて、それでまだ彼の時代に森の大部分は伐採され、幾ダシャチーナもの牧草地が売りに出された。ミハイル・イワノヴィチはほぼ十五年間もの胸甲騎兵としての勤

務の後、言うまでもなく借金を抱えた状態でペテルブルクを去った。彼は自分の代になって、昔の罪を償うためにかなりの区画の土地を売ることから始め、その上残りの領地に新たな抵当権を設定した。しかし、これまでのところ、これらすべてがうまくいっており、伯爵にとって心配になることはなかった。執事はやり手で、大騒ぎすることもなく、余計な話もせず、すべてをきちんと手配する能力があった。旦那が金を必要とすると、それはいつも手許に現れた。

村に引っ越してきた当時、三人の大きくなった娘がいたにもかかわらず、ミハイル・イワノヴィチ伯爵とマリヤ・ドミトリエヴナ伯爵夫人は相変わらずとても若かったし、自分たちをたいへん若い人間だと考えていた。どんな心配事も管掌すべき職責もなく、満ち足りた喜びの中で生きる彼らの権利を否定する人など誰もいなかった。

村の生活は、以前と同じように明るく自由気ままに行われていた。家内のすべては今でも亡くなった旦那の時代のように金に糸目をつけないしきたりになっていて、厩舎には馬車用の馬が 30 頭もいたし、英国式庭園、温室やハウスもあり、おおぜいの何もすることのない怠惰な召使いたちもいた。若い領主夫妻が持ち込んだ唯一の変化といえば、村ではそれまでには夢にも思わなかったような多くのさまざまな都会的で凝った気まぐれが古い旦那衆の計画に加わったことである。主だった部屋では家具はすべて絹の生地で張り替えられた。以前は床や窓はむき出しだったが、今ではいたるところに絨毯が敷かれカーテンが掛けられている。召使いたちは以前だったら地主のお下がりの汚いフロックコートを身につけていたけれど、今ではお仕着せの制服が彼らのために縫われている。厨房は英国クラブで学んだコックの指示に委ねられ、他方女中部屋では朝から晩まで裁縫、刺繍、レース編みに従事しているこの家で育った女中たちの一群に自由民出身のおしゃれ好きの侍女が加わった。

若い領主夫妻による実例は近隣の人たちにも有益な影響を与えた。県知事が新しく来た人達のために開いた午餐会のスピーチで「このかたがたは県に新しい生活をもたらされた」と述べたのも訳あってのことだ。実際、彼らの到着とともに催しと宴と楽しみごとの時代が始まった。誰もが首都からやってきた人達の前で面目を失うことを望まなかった。地主たちや女地主たちは自身からいかにも田舎じみた怠惰を払い落とした。以前の純朴な娯楽、手のかかる名の日の午餐、カードやダンスと言ったものは、今やもっと洗練された、いわば知的な楽しみを取ってかわられた。バラントゾーフ伯爵夫妻がこの領地に移った最初の年に、彼らの県都ではアマチュア演劇、活人画¹のコンサート、予約制の仮面舞踏会が行われた。

ミハイル・イワノヴィチもマリヤ・ドミトリエヴナも二人が県に呼び起こした印象、言ってみれば啓蒙者としての役割を果たしたことに有頂天になった。伯爵はある公式の午餐会でのスピーチでも英国で *gentry* (貴族) が果たしている役割について述べた上で、ロシアの地主達も英国式の *landlord* (土地所有者) になることが望ましいと話したことがある。

伯爵夫人はまた地方の気風の改善にも力を注いだ。彼女はペテルブルクから高価な化粧台を取り寄せる義務があると考えたほどだ。伯爵の家は常に客人達のために開かれていた。午餐は遅く、都会風で、家の者たちは皆イギリス人では習慣になっているように午餐の前に着替えることが義務になっていた。前菜のときに

¹ 台詞も動きも無い舞台場面

は、単なるウオトカではなく、種々の香料を加えたイングリッシュ・ビターと呼ばれるウオトカが客達にふるまわれた。

バラントォーフ伯爵の家は、厚さ二アルシンほどの石壁でできた重量感のある古くからの建物で、外観は巨大な四角い箱を思わせ、そこには何のためかところどころに幻想的な灯りやバルコニーが取り付けられていた。その家は全体としては、おそらくまだ建築のどの教科書にも載っていなかったとは言え、もし名づけるとしたら農奴の様式とでもいべきある種のスタイルであった。何でもふんだんにあって、いたるところで素材も浪費されたが、すべてがなんだか粗雑で荒削りであった。労賃はタダで、誰もが自家にあるもので済まさなければならなかったそういう時代に建てられた家であることが、すべてのことから明らかだった。煉瓦は自前の工房で焼かれ、寄木細工は自分たちの農奴の手によって自分たちの木材から作られ、設計図を作った建築家でさえそれも農奴であった。

バラントォーフ伯爵の家の内部の部屋の配置も当時の大部分の地主達の家とはやはり違いは無く、上階に主人夫妻が住み、下には子どもたちがいて、地下の階は台所用と召使い達に割り当てられていた。

伯爵夫人が地下階まで降りるのは、復活大祭にすべての召使いと大祭の挨拶のキスを交わすために行くときだけだった。しかし子どもたちの部屋へは普通の日でも時間があるとき、つまりお客がいないときかあるいは自分自身が客に行こうとしていないときにやってきて覗き込むことはあった。と言っても、それは頻繁にあったわけではない。

バラントォーフ伯爵家の子ども部屋では二人の女性家庭教師の保護監督下で三人の令嬢が育っていた。家庭教師の一人マドモアゼル・ジュリーは、背が高くとても活動的な年齢不詳の話し好きなブルネットだった。もう一人のマダム・ナイトは、大きな白髪のかき毛に縁取られた厳しく堂々とした顔の立派な未亡人であった。この二人の家庭教師のほかに、子どもたちのそばにはもう幾人かの別の人達、年とった子守り兼小間使いのアニーシャ、使い走りの女の子などがいた。

要するにすべてがきちんとした地主の家にあるべきものそのままだった。三人の令嬢は皆年齢の割に背が高く、三人とも際だった濃い髪をしていて、それは毎朝お下げに編まれ、午餐までには肩にかかるようにほどけていた。そして、三人とも時が来ればきっと美人になると思われた。

年長の二人、レーナとリーザは例えて言えば子ども部屋から出る敷居の上に立っていて、近いうちには客間へと飛び立たなければならなかった。一人は十四歳、もう一人は十三歳だった。二人は既に上の階から彼女達のところに聞こえてくる一つ一つの声に熱烈な好奇心を持って耳を傾けていたし、また二人ともいまだに短いワンピースで連れ歩かれることに強く不平を漏らしていた。

三人目の令嬢ヴェーラは、丸くて頬の赤い顔と情熱的で物思いに沈むようなまなざしを持ったまだ八歳くらいの小さな女の子だった。そのまなざしとは自分だけの一種独特なあどけない生活をしている子どもの目にはほとんどいつもあるものだ。今のところ彼女は何に対しても不平を言ったことがなかった。人生がしかるべく過ぎていっているすべての子どもたちと同様に、彼女の内でも保守的な本能は強く発達していた。つまり、彼女は周囲のすべてのものへ、大切にされているペットのような無意識の動物的な愛着を持っていたということだ。そして、自分に近い人達の長所を疑うことなどこれまでに一度だって頭に浮かんだことは無かった。彼女の母親は最高の母親であり、彼女の子ども部屋は最高の子ども部屋であった。

そして実際に家の中ではすべてのことがうまくいっていた。誰もが自分の身のほどをわきまえていて、みんなにとって平穏で静かな生活状態だった。しっかりした基盤があり、各人が何か自分自身の個人的なことの解決策を模索しているにせよ、個々人にはできないことをやってみることは許されていない、そういう社会では常にそうであるように。

いつもバランツォーフ家の下の階では上の階でと同じように愛について考え、ささやき合われ、夢見られることが多かった。

そして実際、愛の喜びと悲しみのほかにバランツォーフ家の三人の令嬢たちの前に広がる亜麻布のようにまっすぐで平坦な道を何が遮ることができただろうか。その他のすべての点では彼女たちの人生は決められ、予見されていた。パパとママの間ではミチノの領地をレーナに、ステピノをリーザに、ボルキを末っ子のヴェーラに、それぞれ持参金として渡すことがすっかり決められていた。

伯爵も伯爵夫人も、やがて三年か四年後くらいにきっとある軽騎兵か竜騎兵がやってきてレーナを連れて行き、その後しばらくすると別の軽騎兵が現れてリーザを連れ去るとわかっていた。そして、そのあとでヴェーラの番がやってくるのだ。

いずれ子どもたちはボルキではなく別の家に住み、アニーシャではなく別の小間使いが仕えるはずだった。しかし、このささやかな変化にしたところで、母親が祖母の運命を繰り返したように、三人それぞれが母の運命を繰り返すだけだ。これはすべてとても単純かつとても確実で、明日も明後日も午餐があるのが自明であるように、何も考えなくても自明のことだった。

しかしこれらすべての確実で疑う余地の無かったはずの見込みは、ある思いがけない出来事によって不意に遮られることになった。それは何かと言うと、実のところ、その出来事は、すでに二十年ぐらい前から語られていたことで、ロシアはその準備をしていたのだから、まったく予想外だったというわけではないのだが、あらゆる大事件と同様に、いざ起こるとすべての人々にとって不意に襲ってきて誰もが準備不足のうちに直面したように見えるという特質を持っていた。

ヴェーラがこの来るべき出来事の最初の影に気付いたのは次のような状況の時だった。1860年の暮れに家族で午餐をとったが、そこにはいつもの**伯母**や祖母、親しい隣人たちのほかにもう一人めったに見られない立派な客人が居合わせていた。それはペテルブルクから来た伯父で、ある省の高官だった。彼は今朝早く着いたばかりだったが、午餐の時にはほとんど一人で話し新聞からは知り得ないような政府の上層部の様々なニュースを語った。

ところが、午餐の間のまさに話がいちばん白熱してきた時に、伯爵夫人は彼の話のをさえぎった。

彼女は料理を配ってまわる召使いたちにそっと首を縦に振りながら「**Stépan! prenez garde** (ステパン！気をつけて)」と言うのだった。そこにいた召使いたちは普段通りのまったく気のない顔つきを保っていたけれど。

デザートの後でみんなは客間に移った。伯爵は隣り合うすべての部屋との間の扉が閉まっていることを自分で確かめた。

「**Vous pouvez parler, Stépan!** (話していいですよ、ステパン！)」と、彼はいかめしく言った。

ヴェーラは、既に仲良しになることができていた新しい伯父さんの膝の上に座っていた。おそらく彼女は

まだ何もわからないだろうと思われて、彼女にみんなの注意は向けられなかった。

「C'est fait! L'empereur a souscrit le projet qui lui a ete presente par la comission (もう終わりなんだ！皇帝は委員会から提出された草案に署名されたんだよ)」と伯父さんは厳かに言った。

ちょうどその時コーヒーを注ぎ分けていたママの両手は力なく下がり、スプーンがソーサーに当たってカタカタと音を立て始め、高価なテーブルクロスの上に数滴のコーヒーがこぼれた。

彼女は肘掛け椅子に倒れ込み、両手で顔を覆いながら「Mon Dieu, mon Dieu (おお神様、神様)」と言った。

その場にいたみんなが伯父の言葉に啞然として座り込んでしまった。

「ほんとうにもう確かに決まってしまったのかね？」と、静かな、でも無理矢理落ち着かせたような声でパパは尋ねた。

「まったく揺らぎません！二月の初めに詔書は全教区の教会に送られ、十九日には国民に通告されます」と、伯父さんはコーヒーをかき混ぜながら答える。

「つまり、今や神様のお慈悲にすぎないんだ」とパパはため息まじりに言う。

苦しい沈黙を共有すること数分。

「皆さん、これはいったい何ということでしょう？私が思うにこれは強奪です。確かにそうだ。」とパパの伯父であるセミュオン・イワノヴィチ老人の声が突然響く。

彼は興奮して自分の席から急に立ち上がり、こぶしでテーブルを叩く。彼の白髪が熱くなってほてった怒りの顔のまわりで靡いている。

「大きな声出さないで、伯父さん、お願いだから！ Les domestiques peuvent entendre (召使いたちが聞きつけるかもしれないわ)」とママはおどおどしながら頼む込む。

「ああそうそう、これはどういうことになるのか、私に教えて。つまり、今や私たちの言うことを聞いてもらえなくなる、そういうことかしら？」と老伯母アリーナ・イワノヴナが途方に暮れ、腹立たしげな様子で会話に割って入ってくる。

「ささいなことでうるさく質問しないで、姉さん。」と父親は気短かげに手で彼女を押しつけ、「すべてのことについて十分にわかるようにステパンに詳しく尋ねてみよう。」と言った。

男たちはステパン・ミハイロヴィチを囲むように小さなグループになって集まり、彼は何やら熱く語り始める。ご婦人たちは皆意気阻喪し続けている。

「Comment est-ce que, l'empereur, qui a l'air si bon, peut nous faire tant de peine (あのよう立派だと思っていた陛下が、どうして私どもをこれほどまでに悲しませることをなさるの)」と彼女達の一人が驚きの声をあげる。

コーヒーを片付けるために男の人が入ってくると、みんな即座に沈黙する。

「お嬢様、あなたは今日の午餐の後、客間にいらっしゃいましたよね。男のかたたちが何について話していたのか耳になさいませんでした？」と、アニーシャは遅い夜に年少のお嬢様を寝かしつけながら尋ねる。

客間で語られていたことからヴェーラは家族全員に何だか不幸が迫っていることを理解していた。誰ひとり彼女に口外しないように命じようとは思わなかったが、しかし純血種の獣には既にカーストの血が力強く流れていたため、彼女は堂々と答える。

「私は何も聞いてないわ、アニーシャ」と。

詔書に陛下が署名されただけでなくそれが全教区に送付されたのは、今や誰にでも知られていることなのに、領主たちは、召使いたちがひょっとしてそれを耳にしないかと、まさに今日、この瞬間まで恐れ続けている。

召使いたちの側は召使いたちの側で何かを知っているとはおくびにも出さず、控室や食料庫でのあらゆる会話は、旦那衆の誰かが近づくと、ちょうど客間に誰かが現れたときと同じようにすばやく止んでしまう。

しかし、この恐るべき、この長い間待たれていた、この何かの結果を孕んでいる二月十九日がとうとうやって来た。バランツォーフ一家はみな教会に行く。聖体礼儀の後で司祭が詔書を読み上げることになっている。

朝の九時までには家中の皆が既に準備と着替えを済ませている。今日はすべてが熱に浮かされたようになり、同時にどうやら例えて言うところ葬式に行くときによくあるように厳粛になる。誰もがよけいなひとことを口にするのを恐れている。

子どもたちでさえ今日の重要さと厳粛さを本能的に感じ取っていて、静かにおとなしく振る舞い、何についてもあえて詳しく尋ねたりはしない。

正面車寄せには二台の四輪幌馬車がとまっている。馬車は完璧に掃除されたばかりで、馬には最上の馬具が付けられ、御者は新しいカフタンを着ている。パパも勲章を身につけた礼服で盛装している。ママはビロードの高価な婦人用マントを着ているし、子どもたちは人形のように着飾っている。

前にいる馬車には主人一家が、詳しく言うと伯爵と伯爵夫人は前のシートに、三人の少女は後ろのシートに座る。もう一台の馬車には、家庭教師二人、家政婦、そして執事が席を占める。残りの召使い達は徒歩で教会に出かける。小さな子どもたちと毫碌したマトヴェイ老人を別にすれば家には誰も残っていない。

教会までは三露里。道中ママはたっぷり香水をかけたハンカチを度々取って目に当てている。パパは厳めしく黙っている。

教会入口前の階段に面した広場一帯は人々で真っ黒になっている。近辺の村々から二～三千人もの百姓や百姓女が集まっていた。遠くから見ると、それは途切れなく続く灰色の裾長上衣の一つの固まりのようにも見え、その中のそこかしこに女達が頭にかぶっている鮮やかなスカーフが赤く見えている。

「Ce spectacle me fait mal! Je pense involontairement à 89 (この光景にはがっかりしますわ！私は思わず1789年のこと²を思い出してしまいますもの)」と伯爵夫人はヒステリックにつぶやく。

「De grâce, taisez-vous, ma chère (ねえ、お願いだから黙ってくれないか)」と伯爵がいらいらした小声で答える。

祭日にはいつもそうであるように、今日も教会の番人は鐘楼の上で領主の馬車が現れるのを待ち、それが曲がり角に現れるやいなや鐘が鳴り始める。

教会は人々でいっぱいになっていて、林檎が手から離れてもどこへも落ちていけないと思われるほどだ。しかし、古くから根を張った習慣に従い、この途切れなく続く群衆全員も領主の前では恭しく道を譲り、右

² 1789年のフランス革命

側の聖歌隊席のいつもの場所へと進ませる。

「穏やかに主に祈りましょう」と祭服に身を包んだ司祭が至聖所から歩み出しながら大声で告げる。

「そして、あなたの聖霊に」と聖歌隊の合唱は応える。

この濃密な、灰色の、暗い人だかりの全体が、今ではあたかも一人の人間のよう、集中して一心不乱に祈っている。男も女も頻繁に十字を切り、深々とお辞儀をしている。深い皺に覆われた浅黒く厳しい顔は、祈りと期待の緊張によって痙攣でも起こしているかのように歪んでいる。

嘆息の聖堂、悲哀の聖堂、

我が国の惨めな聖堂、

これ以上重いため息は聞いたことがない

ローマのサン・ピエトロ大聖堂でもコロッセオでも。³

しかし、今日、この聖堂で聞こえるのは、ため息でもうめき声でもない。今日この聖堂で、いやひとりこの聖堂だけでなくロシアの地にある幾十万の教会の一つ一つで無窮の信仰と情熱的な希望に満ちあふれた、おそらく有史以来一億の民全体が一度に上げたことが一度も無いような熱烈な祈りが天に向かって上げられている。

「主よ、我らの主よ。私たちが憐れんでくださいますか。私たちの悲しみは大きく、長く続いています。これからは良くなるのでしょうか？」

ツァーリの詔書は何を言っているのだろうか？今までのところは旦那衆でさえその内容を噂で知っているだけなのだ。なぜなら、詔書は封印された正式の印刷物の形で各地の司祭たちに送られていて、聖体礼儀が終わったあとになって初めて開封されるからだ。

庶民が異様なほど集まって混雑を極めたのと小さくて圧迫されそうな感じの教会の中で灯された多くの蝋燭によって、扉や窓を開けているにもかかわらず、耐え難いほど息苦しさになっている。汗ばんだ服や泥だらけのブーツのきつい臭いが、蝋燭の燃える臭いと香が放つ芳香と混ざり合う。手さげ香炉の煙が青い塊となって上へ上へと上がる。空気が足りず、胸は重苦しく病的に高鳴る。苦しい息づかいから来るこの肉体的な苦痛は、待つことの緊張と相まって、耐え難い苦悩となり、得体の知れない恐怖心を引き起こしている。

「もうすぐなの、もうすぐなの？」と、伯爵夫人は痙攣したように夫の手を握りしめながら、ヒステリックに囁く。

司祭が十字架を持ち出す。すべての参列者が十字架に口づけできるのにたっぷり半時間が過ぎる。ついに口づけの儀式は終わった。司祭はごく短時間至聖所に姿を消し、その後説教台に再び姿を現す。彼の手には紋章入りの紙の巻物があり、そこから大きな正式の印判がぶらさがっている。

まるで群衆全体が一度に一つの胸でため息をついたかのように、深く長いため息が教会に響き渡る。しかし、その時、予期せぬ混乱が起こった。教会に入り損ねた人々の大半は聖体儀礼が行われている間、入口前の階段でおとなしくしていたが、もう我慢できなくなった。開け放された扉へ向かって、群衆は前へと一斉

³ Н.А.ネクラソフ«Тишина»の引用だが、著者が一部改変している。

にかつ不意に押し寄せ、何か思いもよらぬことが起こる。先頭に立つ人々が烏合の衆となって説教台の段に群がり進む。叫び声、罵声、うめき声、子どもたちの金切り声。

「Mon Dieu! mon Dieu! prenez pitié de nous! (神よ！私の神よ！私たちにお慈悲を！)」伯爵夫人は聖歌隊席によって守られているのでその身にどんな危険も無いが、ほとんど泣きそうになっている。彼女の子どもたちも恐怖から我を忘れていた。

数分後には教会に秩序が戻った。再び、無言の、張りつめた、敬虔な静寂。誰もが息を殺して貪るように聞こうとするが、時折、息切れに苦しむ老人の胸から聞き取りにくい押し殺したようなゼーゼー一音の音が漏れ、あるいは乳飲み子が泣きだすが、母親が驚いて大急ぎでその子を揺らしながら寝かしつけようとする、赤ん坊はすぐに声を出すのをやめる。

司祭は彼が福音書を読む時と同じように、言葉を伸ばしながらゆっくりと歌うように読む。

詔書は、官庁風の文語で書かれていた。百姓たちは息を呑んで耳を傾けるが、どんなに頭を集中させても、「なるのか、ならぬのか」という彼らの疑問を解決するはずのこの文書からは個々の言葉しか理解できなかった。全体の意味は彼らにとって不明瞭なままである。詔書の読み上げが終りに近づくにつれて、彼らの顔に表れていた強烈な緊張状態は少しずつ消え、ぼんやりとした不安な戸惑いの表情に取って代わられる。

司祭は読み上げを終えた。百姓たちは皆自分たちがまちがいなく自由の身なのかそうでないのか、そして肝心なこと、つまり彼らにとって身を焦がすような切実な問題である今や土地は誰のものなのかがいまだにわからない。押し黙ったままうなだれて群衆は散り始めていく。

旦那の四輪馬車の人々の小さな群れの中をゆっくりと移動する。百姓たちはその前で脇に移動して帽子を脱ぐが、しかしかつてのように深々とお辞儀はせず、奇妙で不気味な沈黙を保っている。

突然「伯爵様！私たちはあなた様のもの、あなた様は私たちのもの！」という慎みの無い酔っぱらいの声が全体の静寂の中で響き、破けた毛皮外套を着て帽子のない寒々とした百姓が聖体礼儀が進む間に既にできあがってしまっただけで四輪馬車に駆け寄り、走りながら唇で旦那の手に触れようとした。

「つきまとうな！」と言って、不機嫌そうで陰気な顔をした丈の高い若者が憎々しげにその男を押しつけた。

その日の夕方、伯爵夫人の小さな客間にバラツォーフ家の家族全員が集まっている。家族のほかにマドモアゼル・ジュリーがいるし、さらにアリーナ・イワノヴナ伯母とセミヨン・イワノヴィチ伯父も来ている。普段は夕方にはみんな別々の部屋にいるのだが、でも今日は共通の不幸の予感がみなと親密に集まって一緒に耐えざるをえなくさせている。ママは偏頭痛でソファベッドに横になっている。マドモアゼル・ジュリーはひんやりする湿布をママのこめかみにあてている。パパは手を後ろに回して、陰鬱な物思いに沈んだふうで部屋をゆっくりと歩き回っている。伯父さんは隅に身を寄せてなんだか深く考えこむように鼻息をたてている。伯母さんはトランプで一人占いをしていて、時折り大きなため息をついている。

戸外では夕方までには恐ろしい吹雪になっていて、煙突ではまるで生きている何かが騒ぎ回り、もの悲しげに声をのびしてひゅーひゅーと唸っているようだった。

突然、突風が起こって鎧戸が鋭い音をたて、屋根の鉄板がガタガタと鳴る。伯爵夫人はその都度身震いしてソファベッドの上にさっと飛び上がる。部屋の中はますます暗くなっていく。テーブルの上の釣り下げ

ランプはどんなに手を入れてみてもぼんやりと煤を出して燃え、油を注ぎ足したほうがよいのは明らかだ。しかし、みんなそのことに気づかないふりをしている。召使いたちは今日皆どこかに出払っていたし、誰も召使いを呼ぶために立ち上がろうとはしない。

「このあいだ、レスコフの旦那のところの百姓達が家を焼き払ったんだよ！」と 伯母さんが言う。

「そして、まだまだ焼かれるぞ！」と、歳取った伯父さんの恐怖を与える不吉な予言が部屋の隅から聞こえてくる。

「そう、面倒なことをしでかしてくれる！」と、彼は数分後ふさぎこんだ予言者めいた声で続けた。「それをどう収めるか見てみよう。」そして彼はマドモアゼル・ジュリーを手で指し示して「89年にあちらではどんな様子だったのかを彼女から私達に話してもらおう。」と言った。

「Mon Dieu! mon Dieu! que l'avenir est terrible (神様、私の神様、なんて恐ろしい未来なんでしょう)」とママは神経質に小声で言う。

「たわごとをべらべら喋るのはもう沢山だ！ロシアの百姓はジャコバン党员じゃない。」ってパパは穏やかに皆を励ますように話す、しかしこの口調は見せかけだけのもので、彼自身が全然冷静ではないことは明らかだ。

「そんな、違うわ、ミハイル！この国の百姓は野獣よ！この国の百姓はフランス人よりも悪いのよ」と言っ、ママは興奮してソファベッドの上に立ち上がり、肘をついている。「百姓たちが私達のことを大嫌いなのはあなただっでご存じですのに」。

隣の部屋で扉が軋む音をたてると、みんなはたじろいで恐る恐る周囲を見回す。ママは思わず「あっ！」と怯えた声を出す。

それは、お茶の用意ができたお知らせにきたステパンだった。

ヴェーラはもう寢床に入る時間だ。子ども部屋には誰もいない。彼女は廊下への扉を開けはなす。使用人達が夕食をとっている下の召使い部屋からは不明瞭な声の響き、皿にぶつかるナイフの音、大笑いする声が聞こえてくる。

ヴェーラは召使い部屋に入ることを固く禁じられているが、しかし今日は彼女のことは忘れ去られている。彼女は怖くもあり、またそこでされているのが何かをちょっと見てみたくもあった。ちょっとの間彼女はためらいがちに佇んでいたが、でも彼女は物怖じするような手合いではない。好奇心のほうが勝って、下の地階へ駆け出す。

そこでは盛大な祝宴が行われている。朝には召使いたちの気分は落ち着いていて、いくらか打ちひしがれてさえいた。まだ信じるのが怖くさえあったのだが、夕方になるとみんなの声域は高くなっていった。夕食の時にはどこからかウォトカがあらわれて、みんなほろ酔い加減になり、自制心はこれっぽっちも残っていなかった。皆の顔は輝き、目は潤み、髪は乱れていた。

シチーと黒パンの匂いに混じって、ウォトカの重い酒気やマホルカ煙草の鼻をついて目を蝕むような煙、アコーディオンの調子の合わない響き、互いにかき消しあう酔っ払った声といったものが召使い部屋の入り口にいるヴェーラを包んだ。お嬢様が現れるとすべてが突然静まり返り、緊張した。だが、それはほんの短い時間のことで、すぐに騒ぎは立ち直った。

「お嬢さん！お嬢さん！こっちへおいで！怖がらないで！」という酔っ払った御者の声が聞こえた。「上の階にいる旦那衆は泣いているのではないかい？ あの人達がもう俺たちを苦しめることはできないと悔しがっているのか。」

「嘘よ！嘘よ！誰もあなたたちを苦しめたりはしませんでした。パパもママも良い人よ！」

こうした言葉がヴェーラの叫び声となってほとぼり出る。孤立無援の怒りで彼女は床を足で踏みつける。 balanツォーフ家の血が覚醒したのだ。これらの恥知らずな農奴どもを叩いてやりたいのだ。激しい怒りといまいましさが彼女の中で恐怖を完全にかき消した。

「苦しめなかったですって！もちろん、そんなことはないわ！亡くなったあなたのお祖父さんはご自身が生きていた時代に召使いを不具にしたことはなかったとでも言うの？なぜお祖父さんは指物師のアンドリュージュカを順番ではなかったのに兵隊に出したわけ？ どうしてお祖父さんは百姓娘アリーニャを家畜小屋に送ったの？」というようにいくつもの声が、さまざまな方向から一斉に響く。

アコーディオンが鳴りやんだ。召使いみんなが群れをなして集まり、古き良き時代のこともヴェーラがまったく思いもよらなかったようないたましい言語道断のことも話された。

「でも、それはお祖父ちゃんのことでしょう。パパとママは優しいよ！」。ヴェーラは、今度は叫ばずに、涙を流しながら、恥ずかしいような声で静かに話す。

ごく短い静寂。

「たしかに、若い旦那衆はかなり良くなって親切ですよ」と幾人かの者が不承不承同意する。

「そりゃ今は農らの旦那もおとなしくなりましたが、独身でいらした時分には農らの娘っこをひどく侮辱なさったもんじゃ」と、ほろ酔い加減の鍵番の老人は憎々しげに指摘する。

「おまえたち不信心者よ！罪深い者達め！この子を不憫に思わないのか！」子守りの怒りに満ちた憤慨の音が突然響く。

彼女は、既にしばらく前からヴェーラがいないのに気がついて、彼女を探して家中を走り回っていたが、召使い部屋までヴェーラを探すのは思いつかなかった。

その夜、ヴェーラは長い間眠れなかった。新たな、恐ろしい、屈辱的な考えが彼女の頭の中で燃えさかる。彼女自身、なぜこんなにも悔やまれ、これほどまでに苦しく、こうもひどく恥ずかしいと感じているのか、ちゃんと説明できない。彼女はただベッドに横たわり、泣いて、泣いている。他方、地階からは相変わらず足踏みの音、アコーディオンの調子の合わない響き、踊りの歌の酔ったような支離滅裂な金切り声が聞こえていた。

III

農奴解放後、家の中のすべてのことが一挙に変わった。領地からの所得が激減したため、家計の立て直しが必要になった。執事は善良な人から突然人でなしになり、旦那に対してしばしば暴言を吐くし、何事にも難癖をつけ、お金を決まった期限までに持ってくることはなかった。彼を辞めさせて新しいのを採用する必要があったのだが、それが事態を一層悪化させた。ほとんど毎日まるで地面から発生するかのよう、古い

手形や債務が現れた。それらは伯爵が忘れてしまっているほど昔に署名したものだ。新しい手形を見るたびに伯爵は我を忘れてそれは偽造だと論じ立てたが、それでも支払わなければならなかった。やがて、ミチノやステピノ、それに水に浸った草地や森も売らなければならないことが明らかになり、残ったのはただ一つ、取るに足りないわずかな土地を持つボルキだけだった。いちばん災難だったことは、今は土地の買い手が少ないので、すべてが半値で売られるということであった。

大部分の召使いは解雇されなければならないことになった。家に残った女中たちは、子どもの頃から怠惰や無為に慣れていたので、今や朝から晩まで余計な仕事をさせられたと不平を漏らした。旦那が怒り「機嫌が悪い」のはごく普通の状況になってしまった。旦那達もまた互いに絶えずいがみあっていた。しかし、当節のいがみ合いは、秋の冷たい長雨がうれしい春の土砂降りとは違うように、以前のとは違っていた。今では伯爵と伯爵夫人との言い争いは、嫉妬ではなくお金が原因であって、お金以外の何のせいでもなかった。伯爵夫人が家政のためのお金を求めなければならなくなるたびに、伯爵は彼女に、その浪費、いい加減さ、規律の欠如に対する非難を浴びせた。自身やあるいは娘たちの新しいドレスの注文は、一度たりとも家庭内でのひと悶着無しに済むことはなかった。他方では、伯爵が町や隣人の誰かのところへ行くことをほのめかすと、伯爵夫人はすぐに神経が高ぶったが、今ではきれいな隣人のことを用心するのではなく、夫がトランプに財産を使い果たしたり他の何かでお金を浪費したりするのを恐れていた。

日々、事態は悪化の一途をたどっていた。ある思いつきはほかのことのかわりに諦めなければならなかったが、お金はそれでも足りず、帳尻は決して合わなかった。すべての現実離れした人々と同様に、伯爵夫妻も見当違いの儉約にとりかかった。家庭生活に必要な不可欠なものを切り詰め、砂糖のひとかけらや油まみれのロウソクの燃えさしもけちけちした。しかし、それでも家と領地に掛かる巨大な出費はそのまま残った。管理人、執事、家政婦、料理人、御者などは皆、昔ながらのやり方で旦那の金で懐を肥やした。ただ、違うのは、以前には皆ほどほどに、言ってみればまあまあ受け入れられる程度に盗んでいたが、今では不断の争い、罪ある者から正しい者に対してなされたと見える叱責、職を免ずるといふ絶え間ない脅しが召使い達を冷酷にし、それぞれが少しでも多く手に横領しようと急いだので、領主の財産は熱狂と敵意をもって乱費された。

今や家の中のあらゆるものが、居心地の悪い吝嗇の痕跡を残しているのだ。日々の破壊的なもめごとや不快感の重圧のもとで、伯爵も伯爵夫人もなんだか突然にだらしなくなってしまった。あとになってヴェーラが自分の母親を思い出す時にはいつも、互いに違う二人の、それもお互い似ても似つかない女性が思い浮かんだ。一人は若く、美しく、楽天的な、彼女が幼い頃の母であり、もう一人は気まぐれで、口やかましく、ぞんざいで、自分の人生も他人の人生も不快にする近頃の母である。

すべての隣人たちのところでも事態は同じ仕方で進行した。地主たちは足下の土地を失い、自分たちに何が起こっているのか何もわからないまま、当惑し、なすすべを知らずに立ちすくんでいた。喜びや楽しみは何も思い出せなかった。地主が二、三人一緒に集まると、座って愚痴をこぼし、百姓や政府への不平を打ち明けあったものだ。その中で一番若くて元気な者達は絶望して農場に見切りをつけ、勤め口を求めてペテルブルクへ出て行った。地主屋敷に残ったのは老人だけになってしまった。

レーナ・バラントゾーヴァとリーザ・バラントゾーヴァはすっかり大人の令嬢になっていた。しかし、二

人とも田舎の生活に疲れ切って、運命にひどく不平を言っていた。確かに、運命は二人に悪い嫌がらせをした。二人の輝かしい希望のすべてはどうなってしまったのか。二人の幼少期も、また二人の養育も、言ってみれば、長いドレスを着せて社交界に送り出す幸せな日のための準備でしかなかったのだ。そしてその日が来てみれば、退屈以外の何ももたらさなかった。

ヴェーラもまた特に楽しくはない生活状態だった。バランツォーフ家の最初の倹約策は子どもたちに付いていたスタッフ全員を解雇することだった。マダム・ナイトは何かもっともらしい口実で免職され、マドモアゼル・ジュリーはさびしくなって自分から出て行った。ヴェーラの両親は、彼女一人のために特別な住み込みの家庭教師を雇うにはお金が足りないと判断した。その頃、県都に最初的女子中学校が開設されたが、そこには町人の娘や小役人とか商人の娘などがますます多く入学していたので、バランツォーフ伯爵夫人は当初からこの施設に嫌悪感を持ち始めていた。そこで、ヴェーラをスモーリヌイ女学院に預けようということになった。このことの話し合いにはほとんど一年を要したが、結局伯爵夫人はペテルブルクの旧友に手紙を書き、入学の条件を詳細に調べてくれるよう頼んだ。ところが、突然、ヴェーラはスモーリヌイに受け入れられる年齢を既に過ぎているという予想外のいまましい返事を受け取るようになった。

伯爵は、今度はレーナとリーザに妹の教育に携わるよう命じた。

しかし、この解決策は若い令嬢たちにはまったく気に入らないものだった。

「私達って家庭教師になる訓練をされていたかしら？」と二人は不平を言い、それでもしぶしぶ仕事にとりかかった。

二人の言葉によれば、ヴェーラは愚かで、怠け者で、物わかりが悪かった。涙無しで済む授業は一つとしてなかった。先生達も生徒もあらゆる言い逃れを見つけて授業を早めに切り上げようとした。両親の側はと言えば、末娘の教育に関するこの不幸な問題をおそらくすぐに忘れてしまったので、授業はやがて完全に中断され、十四歳の時にはヴェーラはまったくほったらかされていることがわかった。

夏はそれでもどうにかこうにか過ぎていった。彼女は一日中荒れた公園で過ごしたり、まわりの野原や森を走り回ったりしていた。農民の子どもたちは彼女を避けていたし、それに本当のことを言うと、彼女も少なからず彼らを恐れていた。彼女がたまたま村の中を通り過ぎるとき、みんなが自分をあざ笑い、軽蔑しているように、彼女にはいつも思われたのだ。彼女は百姓たちになんだか本能的に敵意を抱きはじめていた。

冬は夏よりも一層悪い生活状態だった。彼女はまる幾日も人のいない大きな部屋の隅から隅までぶらついたが、どこにも自分のすることを見つけられずにいた。退屈しのぎに本棚をひっかきまわし始めたけれど、そこにあるのはフランス語の長編小説ばかりで、一方ヴェーラはと言えば五年もの間とてもよどみなく話したフランス語をほとんど完全に忘れてしまっていた。

最悪だったのは、家の中の誰もがいつも機嫌が悪かったことだ。ヴェーラがどこへ行ってもみんなが互いに言い争いをしていて、ヴェーラは誰からもひどい目に遭う。姉たちの部屋を覗いてみても、なんだか些細なことや二つに分けることのできない布切れのことで罵りあっていた。もし、案に相違して二人が互いに仲良くしていたとすれば、それはおそらく二人とも自分の両親についてこう愚痴をこぼしている時だ。「あの人間自身は若い頃にこんな生活をしてはいなかったはずよ。あの人間達が財産全部を使い果たしたから、私たちは今田舎で退屈しているんだわ」。

ヴェーラが母親のところへやってくると、そこで召使いや家政婦と言いかう場面を見てしまう。彼女は召使い部屋に駆け込むが、そこはもっとひどい状態だ。

要するに、相互に苦しめ合い、お互いに悩まし合うだけのために、みなこの世に生きているのだと思われるほどだった。だが、この家の中に、誰一人苦しめず、誰をも悩ませず、何一つ不平を言ったりしない人がたった一人だけいて、それは歳を取った子守りだった。この人の心の中にはたった一つの心配事だけがあった。それは、彼女の部屋の隅にあるアイコンの前の灯明が消えないかということであった。油を買うための数コペイカが手に入れば、彼女は幸せで満足なのだ。ほとんど目が見えず、勤行を熱心に勤める老婆は家付きとして残してもらえたが、しかしあたかも誰もが彼女について忘れてしまったようで、時にはまるまる幾日も誰も間仕切りの向こうの彼女を覗きこまないほどだ。ただ、召使いが思い出して彼女のところに何か食べる物を持って来るか、あるいは昔からのお気に入りだったヴェーラが夕方に彼女のところにちょっと寄るのを別にすればだが。子守りのごく小さな部屋に入るたびに、いつもお香と灯明用のオリーブ油と樟腦の混ざった何だか独特の匂いがして、素晴らしい安らぎの感覚がヴェーラをとりこにするのである。

「退屈なの、おばあちゃん」と、彼女は低い椅子にうつむき、木のテーブルに頭をもたせかけながら言う。

「可愛いお子よ。退屈だなんて。神様にお祈りしなさい」と子守りはヴェーラが五歳の頃によくこの子をなだめたのとまさにその同じ声で落ち着いて優しく答える。

ヴェーラは実際に子守りの助言に従って祈り始める。彼女は熱く情熱的に、一種の熱狂をもって祈る。宗教とその儀式や外面に対する彼女の熱中は、ほったらかしにされた子どものからっぽで退屈な生活をだんだんに満たし始めるのである。

今年ヴェーラはクリスマスを前にしての三週間最も厳しい精進を守り、クリスマスイブその日には星の出るたそがれ時まで何も食べなかった。そのせいもあってか、例年のように夕暮れ時に司祭たちがやってきて食堂の隅に設けられた仮祭壇を前にして徹夜のお勤めを始めると、手足に心地よい気だるさを感じ、まるで自分にはもう肉体がなく、今にも地上を離れてしまうかのようなようだった。

手提げ香炉の青い煙は部屋中を濃い霧のように覆い、その中で蠟燭の炎が揺らめく。お香の甘く突き刺さるような香りが軽いめまいを引き起こす。

「穏やかな世界に、聖なる栄光を」と聖歌隊員が歌い、ヴェーラには彼らの声がどこか遠くから届いているように思われる。

「主よ、ただあなたにお仕えすること以外、私にはこの世で必要なものは何もありません、何も！」と、彼女は感動しながら思う。

彼女の胸の内は不思議な明るい喜びに満ちあふれ、歓喜のむせび泣きが胸からほとぼしり出てくる。

まさにその日にヴェーラの身の上には奇跡が起こった。少なくともヴェーラ自身は自分の身に起こったことを奇跡だと認めた。

老いた子守りは読み書きができなかったが、それにもかかわらず宗教的な内容の本を数冊大切に持っていて、時々その中のどれかを声を出して読み聞かせてくれるようにと幼いお嬢さんをお願いしていた。これらの本の中に『四十人の殉教者と三十人の女殉教者の生涯』という本があった。ヴェーラはこれを一度読み始めたらとても夢中になり、子守りのおばあさんにねだって手に入れ、何時間も読みふけた。

「どうして私はあの時代に生まれなかったんだろう？」と彼女はしばしば悔しく思ったものだった。

しかし、自分の人生すべてを神に捧げることを誓ったまさにそのクリスマスイブに、彼女の身に次のようなことが起こった。夜、かつて姉達から授業を受けた部屋に一人座っていた彼女は、いつだったか姉達のために注文して取り寄せた『子どもの読みもの』の古い号を突然見つけた。退屈まぎれに彼女はそのページをめくり始め、そして最初に見つけたのは、中国に渡った三人のイギリス人宣教師が激怒した異教徒によって火あぶりにされたという胸を打つ話だった。しかも、それはわずか五、六年前のことである。中国には今でも異教徒がいるのだ！あそこでは今でも殉教することができるのだ。

「主よ！あなたご自身が私に思いつかせてくださいました！あなたご自身が私に道を示し、私に献身的行為を望んでいらっしゃるのです！」

興奮と歓喜でヴェーラは跪いた。この古い雑誌が、まるで徹夜禱での熱烈な祈りに応えるかのように、まさに今日彼女の注意をひいたという事実に、彼女は神の摂理のまぎれもない証拠を見たのである。

その日から、彼女の運命は彼女自身の目で決定された。彼女の夢はすべてははっきりした姿と明確な方向性を持つようになった。今や彼女は中国に関するあらゆることに強く関心を持ち、夕食の席での会話が偶然にもこの国のことに触れるとすぐに顔に赤みが目立ちめめる。ヴェーラが唯一恐れているのは、彼女がしっかり成長するよりも前に中国がキリスト教に改宗してしまうことである。

IV

バラントォーフ一家の館は丘の高い所にあり、北側はなだらかな下り坂になっていて、言うまでもなく農奴の手によって掘られた大きな池に向かっている。ここにはいくつかに分けられたヴェルサイユ風の庭園があつて、碎石を並べたまっすぐな道、花瓶型やハート型の花壇、ジャスミンやライラックや菩提樹で覆われた多くの四阿などが整備されていた。かつては館のこの側は刈り込まれた自然を愛でる人達の視線をすっかり虜にしたものだったが、今では、以前のお付きの助手全員を従えていた庭師に代わって、庭付きとしては独学の百姓一人と少年二人しかいないという哀れで惨めな状態を見せていた。池の底には藻がはびこり、数えきれぬ世代の蚊どもの温床となり、四阿はぐらついていた。道には草が生えている。地主の持つ凝った庭が手入れされなくなることほど悲しいことはない。

しかしその代わり、あまり手が加えられず、自然が勝手に主人顔をして振る舞うままに任された反対側は、今ではとても素敵になっていた。館にじかに隣り合つて檜の木立があり、その向こうにある丘は急な崖によって小川へと続く下り坂になっていた。小川は増水期には音を立てて泡立ったが、干ばつの時には砂の窪地となり、その真ん中を水の細流が流れ出た。崖全体には灌木が密に繁茂して、春には崖はチェリョームハの白い香りのよい花でミルクを浴びせられたように立ち、キガシラコウライウグイス、ヨーロッパコマドリ、メボソムシクイ、その他様々な小鳥たちの歌が一面に鳴り響いていた。時にはここにサヨナキドリも飛んで来た。秋になるとここにはたくさんのクルミや野生のキイチゴがあつた。冬には雪に覆われて、一面傾斜のある白い塊となり、そこから黒い細枝があちこちにはみ出していた。

この崖でバラントォーフ家の領地のこちら側は終っていた。小川の向こう岸は既に別の地主、ステパン・ミハイロビッチ・ヴァシーリツェフの土地であつた。しかし、この人は自分の屋敷にずっと住んでいなかった。

たので、今まで伯爵家に迷惑をかけたことはなかった。彼の家は木造平屋建てで、いつも扉は塞がれ、鎧戸は釘付けにされて立っていて、荒廃した庭は緑の、日陰の荒地に変わっていた。そこは古い菩提樹に覆われて、ゴボウが信じがたいほどの大きさに成長し、キンボウゲのフサフサした花が、野生化したフウリンソウやナデシコやオダマキの小さな花と並んで、至るところで白い姿を見せていた。

ヴァシーリツェフについては大変深い学識のある人物だという噂が流れていた。冬はペテルブルクに住んで、そこで工業大学の教授職を務め、夏は休暇を利用して海外に出かけることが通常で、父親から相続した自身の小さな財産についてはおそらくすっかり忘れていたようだった。しかし、その記憶に残すべき冬に、突然ヴァシーリツェフの館のポーチの前に小鈴のついた駅通櫓が止まった。櫓には二人の憲兵が乗っており、その二人にはさまれてまさに屋敷の持ち主その人が座っていた。

ことは非常に単純だった。ヴァシーリツェフは既に以前から自由主義者として聞こえていて、ペテルブルクの多くの有力者の間では評判が悪かった。この冬、工業大学の教授や学生たちが何かの記念日に宴会を催した。施設の重要なパトロンである大公がこれに出席するはずであったが、その大公殿下はヴァシーリツェフと会うのは望ましくないとそれとなくほのめかした。もちろんこれはヴァシーリツェフに伝えられたが、そういう場合、他のすべての教授と同じように自分もホスト側の一人と考えている宴会への参加を禁ずる公式の命令書を送るべきだと答えた。もちろん、公式の禁止令は来なかったもので、当日、彼は他の教授達と一緒に静かに大学の式典用ホールの自席についた。

その出来事から二日後、秘密警察の長官が公式にやって来て、彼に、辞表を提出して父祖伝来の領地に住むために出発するようにと親切にも申し出た。そしてそこから外部へ出る権利は無いことも付け加えた。大事な道中の安全を確保するために彼には憲兵の制服を着た二人の守護天使が付けられた。

このような経緯でステパン・ミハイロビッチ・ヴァシーリツェフは父の領地へ住まわされた。

この出来事がすべての近隣住民にどんなセンセーションを呼び起こしたかは想像に難くない。最近やって新参者について、そして彼の予期しない出現の理由について、最もばかげていてかつ大げさな噂がすぐに広まった。多くの人々が彼について危険な非合法活動家ではないかと疑った。この疑いは彼を謎の、と同時に恐怖心を起こされる、それでいて人をひきつける後光で包んだ。と言うのは、ロシアでは保守的思考様式をする人々でも、彼らが直接秘密警察に属しているものでなければ、すべての政治犯に対して常に無意識で本能的な敬意を払うものだからである。

バランツォーフ家の人々はヴァシーリツェフの最も近い隣人であった。そのため、レーナとリーザという年長の令嬢二人が天から遣わされた興味深い隣人に対する当然の権利のような感覚を持ったとしても驚くべきことではなかった。彼は独身で、四十歳を過ぎているので正直に言えばもう若者とは言えないし、美青年として知られているわけでもなかったが、現在のように求婚者の少ない中では良い結婚相手だとも思えた。

ヴァシーリツェフは、二人の乙女の会話や計画の中で自分がどのような役割を果たしていたかをもし聞かされたら、おそらくたいへん驚いたことだろう。なんだか不思議なめぐりあわせで、次の夏の間中、彼はレーナとリーザに会わないように家を出ることができなかったし、さらに不思議なことに、二人はいつだって風変わりな服装をして、異様な絵のようなポーズをしていた。ある時はリスのように木によじ登り、密生した葉の陰からいたずらっぽく彼を見る快活なレーナに不意に出会い、またある時には物憂げなオフィーリア

を見つける。それは両手に勿忘草の花輪を持って夢見るように池にかがむリーザなのだ。そして、そんな風に不意に見つけた時には令嬢たちが驚いてしとやかな叫び声をあげるのを聞くはずだった。

しかし、この出遭いはすべて空振りに終わった。ヴァシーリツェフは、切り株か何かのように素っ気なくお辞儀をするし、以前もそうだった。どんな会話も続かなかった。それゆえ、令嬢たちが最終的に彼女達の隣人のようなこんな無作法で粗野な熊は前例がないという結論に達したとしても驚くことではない。

しかしレーナやリーザとヴァシーリツェフが知り合いになることがうまくいかなかったとしても、ヴェーラとの交際はとても簡単に始まった。たしかにそこには詩的なイメージは全然無かったことは認める必要があるけれども。

夏は終わりに近づき、早くて暗い夕方を伴った雨の多いぬかるんだ秋が始まった。単調な村での生活の退屈さ、それは強制された不慣れなものだったが、その退屈さはヴァシーリツェフを今もって彼の家の門から追い出し、長い散歩に気分転換を求めさせた。しかし、ロシアの田舎で一度も暮らしたことのない人たちが皆そうであるように、彼もしばしば途中でトラブルにぶつかり、後にはそう思えたのだが、大きな危険に行き当たった。

それまでヴァシーリツェフが出入りしていた教授仲間のあいだでは彼のことを臆病だと疑う者はいなかった。それどころか、彼の友人たちは彼のその場にそぐわない強情さによって自分たちも責任を問われることにならないかと常に震えおののいていた。彼の教授としての出世がかくも予期せぬ終わり方をするようになった時、彼の友人達の中で最も勇敢な人でさえ悲しげに同意した。

「それは避けられないことだった。ヴァシーリツェフのような熱烈な頭を持っていてロシアで生き抜くことができるのか！」と。

ステパン・ミハイロビッチ自身はたいへん大胆な人物であることを内心認めていた。胸の内にしまっている夢、それは親しい友にさえ言わないような夢だったが、その夢の中で、彼はさまざまな非日常的な状況に身を置いている自分を想像するのが好きで、自分の書斎の奥から出て行ってバリケードの防御に参加したことも一度ならずであった。

とは言え、誰もが認める彼自身の勇気にもかかわらず、ヴァシーリツェフは、去年の春に通りすがりの乞食をずたずたに引き裂いたという噂のある村の犬たちや、牧童を既に二度も角の上に持ち上げたという村の牛に対して大きな敬意を抱いていて、そいつらと直接の知り合いになることをあらゆる手を尽くして避けていたことも認める必要がある。

ある日、彼はたまたま家からかなり離れたところを歩いていた。街道から外れて脇にはいった。彼は習慣で後ろ手を組み、うなだれて、物思いにふけり、周りを見ずに歩いていた。ふと気がつく、周りはぬかるんだ草原で、狭い小径を一步踏み外すと足が踝までカーシャのような泥に深く入り込んでしまうというとてもやっかいな状況だということがわかった。彼の前には幅の広い小川があり、背後からは村の家畜の群れの足音と鳴き声が聞こえてくる。

「おい、羊飼いで！君の家畜を押さえてくれ」とヴァシーリツェフは叫ぼうと一旦は思った。

しかし、羊飼いは十五歳くらいの男の子で、虚弱で愚鈍だった。つまり彼は他のどんなことにも役立たないから羊飼いにさせられたのだ。その子は何かわけのわからぬ返事をつぶやいて、馬鹿みたいに笑うだけで

あった。

ヴァシーリツェフはどうすればいいか決めかねて立ち尽くしていた。

「小川を飛び越えなさいな。だってそこは深くはないわよ」と、若い、ほとんど子どものような声が突然響いた。その声には笑いの調子が現れていた。

ヴァシーリツェフがその親切なアドバイスのあった方向を見ると、自分から二十歩ほど離れた小川の対岸の塚の上に令嬢ともごく普通の村娘ともつかぬ誰かがいるのに気づいた。彼女は年の頃十五歳くらいで、色あせたリボン巻いた麦わら帽子をかぶり、胸のところがいささか窮屈そうな、裾と袖の短い質素な更紗の服を着ていた。

ヴェーラもまた退屈によってここに駆り立てられたのだが、この滑稽で痩せた人物がそんなつまらないことの前で困惑しているのを、退屈紛れにもうだいぶ前からずっと眺めていたのだった。

「勇気を出して飛び越えなさいな！」と彼女はもう一度叫んだが、ヴァシーリツェフはまだためらっていた。

そこでヴェーラは丘を駆け下り、ぬかるみだらけの草原でとても古い短靴で大胆に泥をはねあげ、どこからか木の板を持って来ると満身の力をこめてそれを小川に架け渡したが、その際自分の白いストッキングと相手の灰色のズボンに泥土をどっさりかけてしまった。

もちろん、無事だったことに気がつくやヴァシーリツェフはすぐに自分の臆病さを恥じた。急いでバツが悪そうに自身の救い主に礼を言い、彼は彼女の前に立ちつくして戸惑いながらも無理に笑顔を作った。このような自分に不利な印象を残したままここを急いで立ち去ることを彼はしたくなかった。しかし、無遠慮な十代の若者特有の好奇のまなざしで自分をじっと見ていたこの小さな野人とどのようにして会話を始めればいいのか、彼はまったくわからなかった。

「何という本をお持ちなんですか？ちょっと見てもいいですか？」と、彼はやっと機転をきかせた。

ヴェーラは大切な伝記を小脇に抱えていた。ヴァシーリツェフはそれをあてずっぽうに開き、次のところを読んだ。「ディオクレティアヌス帝は誠実な殉教者イシドールに腹を立て、警備隊に彼をカピトリノの丘に連れて行くように命じた...」

「何て馬鹿げたことを！」とヴァシーリツェフが思わず口にした。

balanツォーフの家系の碧眼が憤怒の形相できらめいた。素早く自分の本をひったくってヴェーラは背を向け、振り返ることなく家に向かって歩き始めた。

その夜、ヴァシーリツェフは自分の意思に反して今朝の滑稽なエピソードが何度も頭に浮かび、それを思い出しては笑いと軽いいまいましさを覚えていた。

翌日、彼は自分でもよくわからないまま昨日の恥辱の場所に再び足を運んだ。驚いたことに彼はそこにヴェーラを見つけた。彼女はまるでヴァシーリツェフを待っていたかのように、物思いに沈んだ顔をして小川のほとりに佇んでいた。

「こんにちは！」と友人として彼女に手を差し出しながら彼は言った。

「ほんとうにあれは全部偽りなんですか？」と彼女は自分の大きな眼を彼のほうに上げながら返事の代わりに言ったが、そのまなざしは今や不安そうな、ほとんど懇願するような感じだった。

昨日、お気に入りの本についての酷評を聞いて彼女はまず怒りを覚えたが、しかしすぐにその怒りはもっと重い別の感情に代わった。

「みんなはお隣りの人は賢くて学識があると言っているわ。あの人はすべてを知っているに違いない。それじゃ、殉教者についての話が本当はおとぎ話だとしたら？」

この疑問点はとても重大で、どんなことがあってもそれを明らかにしなければならなかった。

「本のことでしょう？」とヴァシーリツェフは笑って言った。「お嬢さん、考えてもみてください。皇帝ディオクレティアヌスはビザンティンに君臨していて、一方カピトリノの丘はローマにあるんですよ。誠実な殉教者イシドールをどうやってそこに連れて行けと警備隊に命じることができたのでしょうか？」

「ああ、そういうことですか！じゃ、それだけが真実ではないということですか？」

『だけ』ってどういうことですか？それで十分だと思いますけど。」

「じゃ、殉職者がいたというのは真実ですか？」

「もちろん、いました。」

「彼らを斬り殺し、焼き殺し、獣で殺すこともしたのですか？」

「そのすべてがされました。」

「ありがたいことだわ！」とヴェーラから思わず安堵のため息が漏れた。

「どうしてありがたいことなんですか？彼らが苦しめられたというのに。」

この風変わりな少女をヴァシーリツェフはすっかり面白く思い始めていた。

「ああ、そうじゃなくて、もちろんそうじゃなくて！」ヴェーラはまごついて、そわそわし始めた。「私が言いたいのは、いつの時代であったにせよ、こんなに良い人たち、聖人達、殉教者達がいたことをありがたいと思っているということです。」

「殉教者は今だっていますよ」とヴァシーリツェフは真面目に言った。

ヴェーラは驚いたまなざしで長いこと彼を見つめた。

「そうだ、中国にいるんでしょ！」彼女はやっと悟った。ヴァシーリツェフがまた笑い出した。

「どうしてそんなに遠くを探すのですか！もっと近くにいますよ！」

ヴェーラは相変わらず彼を見続けたが、その顔にはますます大きな当惑があらわれていた。

「私達のロシアにだって、投獄されたり、シベリアに流されたり、時には絞首刑になる人さえいるということをほんとうに一度も耳にされたことはないのですか？いったいどうしてあなたは殉教者がいるかどうかをお聞きになるのですか？」

「でも、私たちの国では流刑に処せられているのは悪人と罪人だけじゃありませんか……！」

この言葉がヴェーラの口から思わずひとりでに出た。彼女がそれを言い終わる間もなく鮮やかな赤い色合いがヴェーラの顔を覆った。「このお隣さんは追放された人だったんだ！」というのを彼女は思い出した。

「ほかの^{とが}科で流刑にされることだって起こるんです」と、ヴァシーリツェフが小声で言った。

二人はしばらく無言で隣あって歩き続けた。ヴェーラはうつむき、ネッカチーフの先を神経質に指でいじっていた。彼女の頭の中に、奇妙な、どうやらまったく馬鹿げたとさえ言えそうな考えが大群となって発生していた。しかし、この疑問は彼女にとってとても重要で、とても切実なものであり、礼儀を考慮したとし

でも思いとどまるわけにいかなかった。

「あなたはいったい何のせいで追放されたんですか？」と彼女はヴァシーリツェフを見ることなく、突然とても早口で言った。

その人はにやりと笑った。

「そんなに知りたいですか？」と、彼はまるで軽くからかうように聞いてきた。

ヴェーラはそれに応えて首を縦に振るだけだったが、しかし彼女の顔が彼女の代わりに語っていた。

「今の時代の殉教者についてもやはり知りたいの？」と言われ、ヴェーラの目はさらに輝きを増した。

「お話ししましょうか？ でも、あらかじめ断っておきますが、ほかのこともたくさんお話ししなければならないことになりますよ。」

ヴェーラの顔が輝く。

「ディオクレティアヌス帝についてもカピトリノの丘のこともおそらくお話ししなければならないことになるでしょう。聞いてくださいますか？」

「聞きます、聞きます！」

V

翌日、ヴァシーリツェフはバランツォーフ伯爵家を訪問した。両家のお付き合いはすぐに始まり、しばらくしてヴァシーリツェフがヴェーラに無料の授業を提供したいと望むと、その提案は感謝をもって受け入れられた。特に伯爵は、自身の呑気な態度とは裏腹に、バランツォーフ家の末娘が村のどの娘とも同じように何の知識もなく育ってきていると思うと時折りある種の良心の呵責を感じるがあったからだ。

ヴェーラの姉たちはこの時から彼女がお隣りの人を虜にするのに成功したことをもはや疑わなかった。姉たちは冗談まじりにヴェーラの勝利を祝福した。彼女に「言い寄る人」を少しからかうことはやがて姉たちの間で習慣となった。

はじめのうちはこのような会話や軽いからかいにヴェーラはいらだったりまごついたりしていた。でも、少しずつ、そこにそれなりの素敵さを見出すようになった。何と言われようと、誰かが自分に恋をしていると言われるのはいつでも嬉しいものだ。自分自身の目から見てさえ、求愛者が現れて以来ヴェーラはますます立派になった。

「ねえ、今日、彼はあなたとどうだったの？まだ告白してくれなかったの？どうか隠し立てしないで！全部話して」と、ヴァシーリツェフの授業が終わるたびに姉たちは彼女にうるさくつきまとった。

そしてヴェーラは、ほとんど自分の意志に反してこの物語を語り始め、同じく自分の意志に反して少し付け加えた。その結果どうなったかは神のみぞ知るだ。姉二人はヴァシーリツェフが話した一つ一つの言葉を説明し解釈するのがとても上手で、言われたときとまったく同じとは思えなかった。

ヴェーラが自分でも気づかないうちに、隣人はすこしずつ彼女の思考を支配下に置き、彼のイメージは変わっていった。「ひよろ長く風采の上がらずもはや若いとは言えない灰黄色の顔をした旦那で、あんな近視の目では眼鏡をかけても何も見えないだろうに！」例の溝で出会った直後の彼女は隣人をそう評しただろう。でも彼が公認の求愛者となった今では、彼を英雄に仕立て上げたい一心で彼女は日々彼の新たな美点を発見

していった。ある日彼女は彼の笑顔が心地よいことを見だし、翌日には彼が笑うと目の周りにおかしなかわいい小皺ができることに気づき、彼女は突然この小皺がものすごく好きになった。

彼女は今や不断に現れる何か本能的に待ち望む状態の中で生きていた。彼女は心臓の激しい鼓動を感じながら毎回の授業に臨む準備をし、授業そのもの間も心が波打つように興奮しながら、終始繰り返される「今日じゃないのかしら？」というおののきに怯えながら座っていた。

部屋にはヴェーラとヴァシーリツェフだけがいる。授業は終わったが、先生はまだ帰ろうとはしない。彼は本を脇に置き、肘掛け椅子に座って手で頭を支え、物思いに沈んでいる。これは彼にはよくあることだ。ヴェーラはその隣でじっと動かずに座っていた。彼女はなぜか突然ぎこちなくなり、ちょっと動くのも怖くなった。彼女はヴァシーリツェフの小さくて浅黒い痩せた手のほうに目を凝らし、手首から始まる太い静脈がいくらかの黒い毛を脇にどこせながら、急に細くなり中指に向かって曲がりくねっているのを特に何か考えるでもなくじっと見つめている。

すでに暗くなり始めている。すべての物が少しずつかすんでいき輪郭が目立たなくなる。ヴァシーリツェフの手がまるで霧で覆われるのかようにかすんでいくにつれて、ヴェーラは無意識のうちにそれを見ようと目を凝らす。何か奇妙な茫然自失状態が彼女を襲い、一分ごとにかすかに身動きするのさえますます難しくなり、心臓は強烈な最大限の鼓動によって震え、耳にはどこか遠くでまるで水が流れているような音が響いた。

ヴァシーリツェフが突然まどろみから我に返った。

「ヴェーロチカ、いとしい.....」と、まるで前から考えていたことを続けるかのように彼はやさしく話し始め、彼女の手へ愛情を込めて手を添えた。

「これだ！」とヴェーラの頭に稲妻が走った。「今、言ってくるんだ！」

しかし彼女の神経はあまりにも張り詰めていた。胸は突然締め付けられ、喉の奥に何かがかみ上げてきた。ヴァシーリツェフがあとひとことでも言えば、彼女は息が詰まるだろう。

「どうか！どうか！おっしゃらないで！おっしゃなくてもわかっていますわ！」と、彼女の口から押し殺したような叫び声がほとぼしり出た。

彼女は急に跳び上がって部屋の反対側の隅に突進した。

びっくりしたヴァシーリツェフは、ちょっとの間途方にくれて彼女を黙って見つめていた。

「ヴェーロチカ、どうしたんだい？」と、ようやく静かに恐る恐る尋ねてきた。

彼の声の響きがヴェーラをすぐに我に返らせ、彼女には自分がとんでもない愚かなことをしたのだということが突然わかった。

彼女は今ここでどうすればいいのだろう。彼にどう説明すればいいのか？

「私は考えたんですの...、私にはそう思えたんですけど...」と彼女は喘ぎながらとりとめなくつぶやいた。

ヴァシーリツェフは彼女から目を離さず、びっくりした戸惑いの表情は少しずつ不快で悔しげな疑いの表情に変わっていった。

「ヴェーラ、あなたにどう思えたのかを私に話してほしいし、それを求めるよ！」

彼は彼女の前に立ち、彼女の手を強く握る。彼の声はいかめしく、かん高く響く。空色の近視の眼が二本

のネジのように彼女の顔に突き刺さる。このじっと見つめ、しつこく尋ねるような視線の影響で、ヴェーラはあらゆる意志の力、あらゆる自制心を失っていくのを感じる。自白すればひどいことになるわかっていても、もし事が生死にかかわることであれば、彼女はそれでもやはり答えないわけにはいかないし真実を語らないわけにはいかない。

「私は考えていたのです... あなたが私に恋をしていらっしゃるのだと！」とうとう、かろうじて聞こえる途切れ途切れの囁き声が聞こえた。

ヴァシーリツェフは突如として彼女の手を放した。

「ああ、ヴェーラ、あなたはほかの娘たちと少しも変わらない気取ったおぼこ娘なんだ！」と彼は咎め立てるように言って部屋から出て行った。

ヴェーラは一人残され、いたましく、打ちのめされていた。

「主よ、なんとという恥ずかしいことを！こんな恥辱の後でどうやって生きていけばいいのでしょうか！」これが、翌朝に彼女の頭に浮かんだ最初の思いである。それまで、不安に満ちて熱病にかかったような忘我の時間が幾時間も続いた

まだ早い時間だった。姉達のベッドからは坦々としたリズムカルで眠そうな息づかいが聞こえてくる。二人とも昨日は何も気づかなかつたし、何も怪しんでいないけど、あの人達が知った時には何と言い出すか！まるまる一ヶ月の間面白くて魅力的な小説のヒロインだったのに、突然ただの愚かで傲慢な少女だとうことが明らかになるなんて！「ああ、なんと恥ずかしい！なんと恥ずかしい！」

ヴェーラは毛布の下に頭を隠し、嗚咽を押し殺すために枕を歯で噛みながら、痙攣するようにさめざめと泣く。

レーナがベッドの上で寝返りを打った。姉達が目を覚まし始める。

「あの二人が何も気づかずにさえいてくれたら！」というこの思いが不意にヴェーラの涙を止めた。彼女はあたかも何事もなかったかのように起き上がり、服を着て、一日中歩きまわり、会話し、笑いさえる。何事も起きなかったかのように。それで時には実際にちょっとした間だけ昨日のことを忘れることに成功するが、でも、彼女の心には相変わらず鈍くしつこいまったく新しい痛みがある。

定められた授業の日が再びやってきた。

「今から何かが起こるわ！」ヴェーラはそう考え、ヴァシーリツェフに会うことを考えるとまったくぞっとする。

三時頃、隣の屋敷の男の子が旦那からの手紙を携えて駆けつける。それには、彼は体調が悪いので授業に來れないのを許してほしいとあった。

「ありがたいこと！」と、ほっと胸をなでおろしてヴェーラは思った。

ヴァシーリツェフと出会う前のような、ヴェーラのひまで無為の生活が再び始まる。またしても彼女は自身どうしたらいいのか、何に取りかかったらいいのかわからずに、終日隅から隅へとぶらぶらと歩き回っている。彼女がどんなに隠しても、それでもやはり姉たちは何かを疑い始めて、侮辱的なしつこい質問でつきまとってきた。ヴェーラは今やあらゆる手を尽くして姉たちとかかわり合うのを避けている。

かくして一週間が過ぎ、次の一週間が始まった。ヴァシーリツェフは相変わらず姿を現さない。「もう二

度と来ないだろう」とヴェーラはなんだか悪意のあるやるせなさを感じながら思った。しかしある日のこと、彼女は誰もいない教室に一人座り、もう十回ほど読んだ本をぼんやりと格別興味もなくページを繰っていると、突然廊下で聞き覚えのある足音が聞こえてきた。

全部の血液が彼女の心臓に流れ込んで、一瞬心臓が鼓動するのをやめたかと思ったほどだった。その瞬間、急いで立ち上がって逃げ出そうと思ったが、しかし彼女がそれをできる前にヴァシーリツェフは既に部屋の中に入っていた。

彼の様子はと言うと、あたかも特別なことは何も起きなかったかのように、またこのつらい十日間もまったくなかったかのように、いつもの通り落ち着いていて温厚そうだった。それじゃ、ヴェーラは？彼女はこの一週間彼のことを大嫌いだったけれど、しかし今、心を魅了する狂おしい喜びがこみ上げてきて、突然彼女のすべてを虜にした。もちろん、彼女は恥ずかしく、それも痛いほど恥ずかしかったが、それでもやはり喜びの感情のほうがそれを上回っていた。

「我が友ヴェーラ、このままではいけない！」彼は淡々とした優しい声でまるで子どもに話しかけるように話す。「私たちの間には小さな誤解が生じた。とても不快で腹立たしい誤解だ。でも、今、一度だけ十分に話し合おうじゃないか。そうしたら、このあいだのことはすっかり忘れてこれまで通りの友達になろう。だって私は既に四十三歳だ。ヴェーロチカ、私はあなたの歳の三倍近い年寄りなんだ。あなたは私の娘であってもいいくらいの歳だ、妻ではなくて。あなたに恋をするのは、私の側からすると、単に愚かしいだけでなく卑劣なことでもあるのだ。そう、私は一度もあなたに夢中にならなかったことを神様に感謝する。そのかわり今私はあなたを深く心から好きになったので、あなたにはすばらしい人間になってほしいと強く望んでいるのだ。だって男が半時間も一緒にいて言い寄り始めずにいることはできないと思込んでいるのは気取ったおぼこ娘だけだよ。だけどあなたはそんなんじゃないでしょう？違う？」

ヴェーラはうつむいて黙って立っている。長い睫毛に大粒の涙が震えているが、この瞬間ヴァシーリツェフを大嫌いだとはまったく考えていない。

「聞いてください、我が友よ。あなたの手をください」とステパン・ミハイロビッチは続け、「私がどれほどあなたの友情を大切に思っているかを証すために、私はもう幾年も誰にも話さなかったことを話します。人生で一度だけ私はある娘さんを本当に愛したことがあります。彼女よりも素敵で優しい女性に私は一度も出会ったことはありません。しかし彼女の運命はとてもひどいものでした。それはカラコーゾフの暗殺未遂事件の直後でした。なにしろ当時は誰もが逮捕され、連行され、不用意な言葉一つで監獄に入れられるのに十分でした。それで彼女も投獄されたのです。監獄は満員で、彼女は六カ月間、水浸しにされた湿気が多く暗い地下の獄中で過ごさなければなりませんでした。でも、彼女は気立てがデリケートで、とても弱々しかったのです。そしてとうとう彼女の事件が審理される番になって、彼女に不利などな証拠もないことが明らかになりました。だから彼女を釈放せざるを得なくなりました。しかし、その恐ろしい地下室で彼女は世の中にそれより悪いものは無いと思われるほどの危険な病気にかかっていたのです。彼女は顔の骨のカリエスでした。「監獄のカリエス」と呼ばれていた病です。それから丸三年で彼女はゆっくりと死んでいきました。私は、言うまでもなく、彼女から片時も一歩も離れませんでした。毎日私は恐ろしく厳しい病気が生きている彼女を醜くし、食い尽くしていくのを見ていなければなりませんでした。彼女の苦痛はあまりに大き

く、彼女をこの世で一番愛していた私でさえ死をこの状態からの解放と呼ぶを得ないほどでした。ヴェーロチカ、人生においてそのようなめに遭った時、人は愛を冗談のように軽く見ることはできないということはおわかりですね。そう、ほんとうのことを言えば、このようなことが起こりうる国では個人的な愛や幸福について考える権利もほとんどないので...。

心の動揺からヴァシーリツェフの声は途切れた。ヴェーラは悲しげに何も言わず泣いた。

しばらくしてからヴァシーリツェフはヴェーラに自分のかつての許嫁の恐ろしい病にかかる前のポートレートを見せてくれた。美しく知的な浅黒い顔立ちで、黒い夢見がちな目をしていて、ヴェーラには人生でこれより素晴らしい顔は一度も見たことがないと思われ、そのポートレートに唇で触れた。殉教者の顔にでも触れるように。そして目に涙を浮かべながら殉教者の宝冠を得ようとする以前の誓いを繰り返した。でもそのために中国に行くことは無いのだ。今や彼女はこの宝冠をロシアで多くの人々の運命が作り出すことを知っている。

その日からヴェーラとヴァシーリツェフの間にもはや誤解はなくなり、二人の友情は永遠に揺るぎないものとなった。

VI

四月の終わりがそこまで来ている。今年の春は突然一気にやってきた。川の氷が融け、雪が消えた後もなお長いこと寒さが居座り、すべてのものがゆっくりと活気なく、まるで不承不承のように伸びていった。一步前進二歩後退といった感じだ。それぞれの草たちと言ったら、あたかも冬眠を払いのけて柔らかい寒がりの葉の先端を地面の下から突き出すように頼み込み、説得する必要があるみたいだ。本物の春の熱狂はまだ誰にも感じられない。

ある夜更けに突然静かな暖かい雨が降り、その瞬間から何か魔法が動き出した。まるで発酵したかのように何かが香りのよい春雨の小さな雫と一緒に地面に落ち始めた。すべてのものがうごめき始め、すべてのものが突然生への欲望に燃えだした。まるで期日に遅れることを恐れているかのように、他のものを押しやり圧迫しながら。そしてあらゆるものが自分と自分の生存の権利を守ることを決意した。

翌朝、ボルキの住人達は目が覚めると息を呑んだ。一晩で何が起こったのだろう。庭も、畑も、森も。昨日の夕方にはすべてが真っ黒で葉も無くむき出しだったのに、今では淡い緑の色合いに覆われている。そして、空気も昨日とは違う。匂いも同じではないし呼吸も違う。

この瞬間は、慌ただしく、やむことのない春の熱狂の真っ最中だ。白樺の木はすでにレースのような上品で透き通る葉をまとっている。大きく膨らんだポプラの蕾は、粘り気のある樹脂の多い鱗片を地面に落とし、刺激性で酔いのくるような香気を空気中に満たしている。ハンノキやハシバミの尾状花序から出る黄色くて香りのよい花粉は、チェリョームハヤセイヨウミザクラの白い花びらと一緒にいたる所にひろがっている。トウヒはロウソクのようにまっすぐ突き出ている巨大な明るい色の新芽を上に向かって出して、去年の古い針葉樹の中で妙にひときわ目立っている。樅の木だけがまるで春を意識していないかのように葉を付けずに不機嫌そうに立っている。

毎日南から新しい訪問者が飛んでくる。既に一週間前に空には黒い三角形をした鶴の群れが初めてはつき

り見えてきた。キツツキは古いブナの木空洞をたたき始めている。ツバメはバルコニーの屋根の下で古い巣を探しながらせかせかと飛び回っていて、冬の間には彼らのかつての所有物をまんまと手に入れたスズメどもと戦っている。

土の中から温かい蒸気が立ちのぼる。どうやら、いや確かに感じられる、地下でなんだか不思議な神秘的な作業が行われているのが。カビや雑草、昆虫などの新しい生命の萌芽を踏まずに一步を踏み出すことはできない。池の中では生き生きとした愛の告白が行われている。どの溝にも最も多様で最も風変わりな存在の形をしている何十億という個体がいち、それはうようよ動き周り、すべて忙しく働き、自己の重要性を意識している。

バラントーフ邸のかつて教室だった部屋には、すらりとして背が高く、痩せた端正な横顔と黒い睫毛に縁取られた、物思いに沈んだ碧眼を持つ十八歳くらいの若い娘が書き物机に身をかがめて座っている。机の上、彼女のの前には開かれた本、ドブロリュエボフの小冊子があるが、彼女は読んでいるものになかなか集中できていないのが見て取れる。彼女は絶え間なく頭を上げて椅子の背もたれに身体を反らし、手は無意識のうちに象牙のペーパーナイフをいじり始め、その目には誰かが来ないかと耳を澄ますかのような、誰かを待ち構える張り詰めた表情が現れている。

この若い美女の中にかつての浅黒く痩せた十代半ば頃のヴェーラを見出すのは難しかった。ヴァシーリツェフとの忘れられない話し合いの後三年が経っていた。この年月は、一見、何の事件も大きな変動もなく静かに過ぎていったように見えるが、しかしヴェーラにとっては豊かな精神的内実を持つ日々であった。ヴァシーリツェフとの友情はますます強まり堅くなったが、そのかわり家族とはなんだか完全に離れてしまった。姉たちは、隣人の名を言って彼女をからかうのに飽きてしまって、彼女を見放した。ヴァシーリツェフとの親しさは彼女が少女の頃から始まっていたので、両親は、ヴェーラが大人の令嬢になった今、それを邪魔する必要はないと、習いとなった呑気さで考えていた。

ところが最近、近隣の地主から見てヴァシーリツェフの評判が非常に悪くなった。彼にはいくつかの非常に重要な過失があったと見做された。第一に、彼は小作人に彼らがそれまで年貢を払って耕作していた土地をすべて無償で与えたことで、自分の懐に目立った損害をもたらしただけでなく、郡全体に有害な手本を示したことになった。第二に、彼は他人のことに口を出し、他人の小作人に余計なアドバイスをし、他の地主がかつての小作人との間で土地を分割する際に巧みに考え出された抜け目ないあの手この手を一つならず台無しにしたと疑われ始めていた。

そもそもヴァシーリツェフが違法な何かで非難されることはなかったが、それにもかかわらず、彼がその地位から言ってあるべき振る舞いをせず、政治的な問題で自分の領地に追放された人間は特別に慎重であることを余儀なくさせられる筈なのを、見たところ、すっかり忘れていたようだと誰もが認める場所であった。幾人かの友人は、県知事が彼に対して恨みを抱いていることをほのめかそうと試みたが、彼はそのことにいささかも注意を払わなかった。

地主たちがヴァシーリツェフに腹を立てていたにもかかわらず、農民たちは彼に夢中で、彼の到着を非常に喜んだ。しかし、当初は彼を避け、彼らへの無償での土地の引き渡しにすら疑い深い態度をとっていたと

いうのも事実だった。

その後彼らは、この人は頭が悪いに違いないと判断した。しかし、だんだん彼らは、この人の振る舞いは愚かさでは説明できないと確信するようになった。何か問題があってあの人に相談するとその都度必ずと言っていいほど彼が助けてくれるか、あるいはわかりやすい合理的なアドバイスをもらえることに彼らは気づいた。それからというもの、彼は百姓たちから撃退されることはなくなった。何かもつれた家庭の問題を解きほぐしたり、裁判所へ出す訴状を書いたりすることが必要な場合、彼らは大挙して彼のもとに駆けつけるのであった。

ヴェーラとヴァシーリツェフは余暇には本を読んだり話をしたりしている。二人の会話は果てしなく続き、個人的なことには関係しない抽象的なテーマがますます増えていく。三年前と同じように、今も二人はよく現代の「殉教者」について語り合う。ヴェーラは以前と同じように、いや以前より百倍も強く、彼らの足跡をたどる決意に満たされている。

しかし、殉教者の宝冠のことはいつか遠い未来の話であって、今は、彼女の人生はうっとりするほど素晴らしく、日増しにますます満たされ、ますます良いものになっていっているのだ。

ただ、最近、いささか退屈で気が滅入る日々を過ごしていたことを別にすればだ。ヴァシーリツェフは農民の用件でどこかへ出かけて二週間ほど家にいなかった。夜、友と話す希望もないのに時間だけが過ぎていくのは怖いことだ。なぜか何もやる気が起きないし、どんなこともうまくいかない。

でも、ありがたいことに、もうそんな日々は終わった！今日の午後、隣の屋敷の男の子が走ってきて、旦那様は帰ってきていて今夜お茶をご一緒するつもりでいると言った。

「半時間かそこいらしたらあの人はこちらに来るんだ！」

抑えきれないほどの激しい喜びが押し寄せてきてヴェーラを包んだので、彼女はじっとしていられなくなり、本を脇に放りだして窓際に行った。斜めに差し込む夕日の光で彼女は燃えるような赤い顔になり、目を素早く細めた。

「外はなんて素敵なんだろう！こんなにも魅惑的でこんなにも素晴らしい春はこれまでに一度も無かったように思えるわ。そして、すべてのものが成長していくなんて！まったく奇跡のようだよ、ほんとうに！今朝早くには緑の無いまったく荒涼としていた丘が、今じゃスタキスやマツユキソウを手のひらいっぱい摘み取れるほどになっているんだもの。まるで満を持して地面から這い出てきたみたい。とても良い目をしたある若者のお話があって、彼は草が成長していく様子がわかったんだって。そう、春だもの、それはもっともなことよ。じっと見つめることさえできれば私にだってできたと思えるわ。あれは何？森でカッコウが啼きはじめてのよ。今年初めての…。神様、なんという魅力でしょう！あまりの素晴らしさに、胸が締め付けられさえして、泣き出したくなるほどだよ！」

とうとうヴァシーリツェフが入って来ると、ヴェーラが彼を熱烈に出迎えにとんで行ったので、彼はいつもの冷静さを失ってしまった。

彼は彼女の両手を取り、愛情をこめ、うっとりとして彼女を見つめる。

「いったいどうしたの、ヴェーラ？僕は最初に見た時には、ほんとにあなただってわからなかったよ！二

週間前ほんの女の子だった君を置いて出かけたのに、今目の前にいるのは...

彼はおしまいまで言い終わらなかったが、しかし彼のまなざしが言いかけてやめたことをすべて物語っている。

ヴェーラの頬は鮮やかな薔薇色に覆われ、彼女は思わず目を伏せる。彼と一緒にいると彼女はとても心地よく満ち足りた気持ちになれる。この二週間はたしかに彼女の中に何か変化を呼び起こした。彼と一緒にいて手がこれほど冷たくなったことは以前には一度も無かったし、頬がこんなに火照ったこともなかった。自分のときめきを隠すように、彼女は機械的にテーブルの上の本を次々に取り始めた。

「いや、ヴェーラ、今日は勉強しないでおこ。こうやってしばらく座っていよう。」

彼は開け放たれた窓の近くの椅子に座り、煙草を吸い始める。ヴェーラは彼の隣に座る。彼女の心臓は震える小鳥のように激しく、荒々しく脈打つ。

外は既に暗くなった。頭の真上の高いところの空は暗い青色だが、西に向かうにつれて徐々にその色は褪せ、水平線は明るい琥珀色の帯で縁取られている。池のカエルたちが仲良く一斉に合唱を始める。部屋の隅や天井ではいちばんはじめの蚊たちの騒がしい羽音が一つに合わさって長く続く途切れ途切れのうなりになっている。コガネムシがうるさく低いぶんという音で空気中を満たしながら窓の近くを重そうに飛んでいく。

台所と庭を隔てている茂みの中で何か明るいものが見え隠れした。スカーフを頭に巻いた女性の姿がためらいながら一瞬動かなくなり、眼光鋭くあたりを見回して、誰かが彼女のことを目で追っていないか確認して、その後小さな林の方向へととても急いで小刻みに歩き出した。一分も経ったらそこから愛想のいい男性のささやき声と静かで幸せな笑い声が聞こえてきた。遠く農家の側から村の牧童頭の吹くさびしげな葦笛の響きが広がってきた。

「百姓たちとのその仕事について話してくださいな。私は今日食事中に怖くて嫌なことをたくさん聞いたんですもの。」と、ヴェーラは突然話し始めたが、明らかに無理をして話しているようで、その声はぎこちなく聞こえる。

ヴァシーリツェフは急に起こされたようにびくっとする。

「うん、私が農民達に非難されていることはわかっているよ。」と彼は手で額をなでながら話す。でも、私はあの悲惨な農民たちの利益になるように世論を動かすのに成功すると信じているんだ。僕はあなたにこのことは何でも詳しく話すよ、ヴェーラ、でも、あとでね。今は無理だ...」。

ふたたび、しばしの静寂。ただ、蚊の飛ぶ音と牧童の吹き始めた葦笛の音がするだけ。

「ヴェーラ、三年前に交わしたある会話を覚えている？あの時私はこんなことは絶対に起きないと確信していた...。でもそうこうしているうちに...。ヴェーラ、言ってくれ、私はまったく老人に見える？」

この最後の言葉はかろうじて聞き取れる、震えるような囁き声で出てくる。ヴェーラは返事をしようと思うが、その声は急に途切れてしまう。

どのようにしてヴァシーリツェフの手が彼女の腕に触れることになったのか、それは神のみぞ知るところである。二人ともその感触に息を呑み、言葉も出ず、どちらも動くのが怖くなる。

「ステパン・ミハイロビッチ！ヴェーラ！ふたりともここ？」とリーザのよく通る声が廊下に響いた。

ヴァシーリツェフは急いで跳びのく。

「また明日！ ヴェーラ」と言って、彼は低い窓をまたいで庭へ行き、暗闇の中に消えていく。

心をゆさぶる、香り高い、神秘的な魅力と情熱的な静けさに満ちた春の夜が空に流れる。村の灯りは消え、すべての音は少しずつ静まっていく。牧童の葦笛はもうとつくに鳴りを潜めた。カエルたちははおとなしくなり、蚊さえも静かになった。時折、茂みで奇妙ながさごそする音がしたり、池で何かが水を跳ね上げたり、あるいは一陣の風が遠い村から、この美しい情熱的な夜に孤独に苦しんでいる、鎖につながれた雄犬の悲しげな長い吠え声を運んでくる。

ヴェーラは眠れない。姉たちと別れて今では自分ひとりで使っている広くて涼しい寝室でも今夜は蒸し暑く感じる。ベッドから起き上がって窓を開け、冷たいガラスに熱い頬をあてる。しかしそれでも彼女はさっぱりとはしない。顔は相変わらず火照り、同じように心臓はけだるく甘美に痛み、やはり同じような漠然とした至福に満ちた不安が彼女の全身全霊を包む。

あたりは皆なんと静まりかえっていることか。小さな林は今巨大で深く感じられる。木々はまるで寄り集まるかのように、何かについて申し合わせているかのように、何か奇妙で重要な秘密を隠しているかのように、黒々と高く立っている。夜の静寂の中、突然静かなうつりかわる音がする。それは街道を行く三頭立ての駅馬車の音だ。空気はとても澄んで透き通っていて、小鈴の音がおよそ五露里先から既に聞こえている。一分ほどそれは止む。馬車は丘の向こうに廻ったに違いない。でも、すぐにそれはまたはっきりと聞こえるようになり、どんどん近づいてくる。トロイカは全速力で急行しているのは明らかで、今や鞭の音、御者の声、馬の足音も聞こえる。しかし、また再び音は遠ざかる。妙だ！音は間もなく止んだみたいだ。馬車はどこか近くで止まったのだろう。

まったく驚くべきことだ！真夜中に駅馬車の小鈴の響きなんて、人をどんなに不安にさせることか！だって誰も何も待ってなんかいないはずだし。もっと正確に言うと、これって仲裁官かあるいは郷警察署長が何か作物の被害調査か何かで村に突然現れたとか、そういうことだ。しかし、それにしても街道でこの甲高いよく響く鈴の音を聞いたら、心臓は鼓動を早めるというものだ。そして、突然、どこか遠くの知らない土地へ旅立ちたくなる。

「神様、人生ってなんて素晴らしいんでしょう！」

ヴェーラは思わず無意識のうちに神に祈るような仕草で手を合わせる。ヴァシーリツェフは自分のことを唯物論者と呼び、ヴェーラもまたあらゆる新しい理論に通じていて、もはや神など全く信じていないと真剣に考えている。しかし、それにもかかわらず、この瞬間、彼女の魂は、自分に幸せを与えてくれたどなたかに対する熱烈な果てしのない感謝で満たされる。昔の子どもの頃からの消せない習慣で、その存在を認めていないはずの神に熱い祈りとともに話しかける。

「主よ！この世に多くの悲しみ、多くの不公平、多くの困窮があることは知っています！私は人々に仕えたい。彼らのために人生を捧げる覚悟はあります！主よ、でもそれは後の、後のことです。でも今は、私はとても、とても幸せになりたいのです！」

ほんの一瞬ヴェーラは気がかりな夢を忘れることに成功する。

「また明日！」という彼の言葉が、突然、彼女の意識の中で明るい光明として通り過ぎ、気だるく甘美な不安と情熱的な至福の興奮とが彼女のために再び始まる。

既に東の空が赤らみ始めていた。夜明け前に啼く二番鶏は歌うような声を出し、雀たちは窓の下で賑やかに、そして不安げにさえずり始めた。でも彼女はまだ眠られずに、顔は火照って手は冷たいままベッドで寝返りをうっていた。夜が明けてから、彼女はようやく鉛のような熟睡に陥った。

しかしそのかわり彼女は長いこと眠っていた。昨日起こった何か驚くほどの幸せの漠然とした意識が彼女を再び虜にしたのは、遅く、もう正午に近い時間だった。大きな思いがけない喜びのあった翌日の目覚めて、なんと素晴らしいことだろう！

ヴェーラは自分のベッドに横になってうっとりしている。

「それにしても、私って何だろう？そして、私達の子どもたちは！」⁴という考えが彼女の脳裏をよぎった。

彼女は飛び起きて早くも着替えようとしたが、しかし時計を見てもうとても遅い時間だとわかり、どのみち課業を休んだのだから急ぐ必要はないと考えた。そう判断すると彼女は再びベッドで横になり、目を閉じて、自分の近い未来の幸福に静かに微笑んだ。

小間使いが、お嬢様が眠っていらっしやらないのかどうかとよーく見ながら、慎重に足を運んで部屋に入った。

「大切なアニーシャ、どうしてもっと早く私を起こしてくれなかったの？」と、ヴェーラは陽気に好意を持って彼女を迎えた。

「私はもう五度ほど参りました、お嬢様。でも、とても心地よさそうにお休みになっておいでたので、安眠を妨げてはお気の毒だと思ひまして。」

「どうして今日の彼女の顔はこんなに変なの？」とヴェーラは思った。

「あのお嬢様、私たちに災難が起きたのですよ！」と、アニーシャは使用人が重要な知らせを伝えるときにそれがどんなものであれ発する、特別の不安に駆られた、しかしそれでもやはり十分な声で話した。

「いったい、どうしたの？」とヴェーラはベッドから跳び上がって短い叫び声を上げる。

どういう問題なのか彼女はまだ知らないが、彼女の心は既に災厄に気づいている。

「お隣へ夜中に警察が突然現れたんですよ」とアニーシャは伝える。

VII

未明にヴァシーリツェフ邸のポーチ前に憲兵隊大佐と二人のより階級の低い守護天使を乗せた駆通四輪荷馬車がまた停まったという恐ろしいニュースは、バランツォーフの家中に雷鳴のように急速に広まった。大佐はヴァシーリツェフに、政府のスタンプと公式の封印が添えられた紙を見せた。その紙には、貴族ステパン・ミハイロビッチ・ヴァシーリツェフは、地域の秩序にとってはなほ危険な人物であると書かれてい

⁴ 英語版の訳者注では「おそらく作者は、1870年代の実際の若い急進派と同様にヴェーラが村の子どもたちを教えていると言いたかったのだろう (Something is missing here: most likely, the author intended to tell us that, like any proper young radical of the 1870s, Vera is giving lessons to the village children.)」とある。

た。そこで県知事は上層部から与えられた権限に基づいて現在の居住地をやや遠いけれどすばらしい町であるヴァトカ⁵に変えるよう彼に命じている。

彼には自身の身辺整理をする時間として三昼夜が許されている。しかしこの期間が満了したら指定地まで護送するよう指示されていた。

このニュースがバランツォーフ家全体に与えた印象は想像に難くない。誰よりも怯えていたのは伯爵自身であった。彼は、ロシアでは珍しいとは言えない、身内の場では口先だけで反抗し、リベラルぶって政府についてちょっと無駄話するのが好きだという特質を持っていたが、視野に憲兵の制服の青い襟が見え隠れするや否や、すぐに身を縮めて最も従順で最も忠実な皇帝の下僕と化した。

今回の場合、彼がもともと持っていた小心さは良心の呵責によってさらに増大した。自分の娘と自由主義者との間のこのような親交をどうして許すことができたのか？彼の目はどこにあったのか？ヴァシーリツェフは、まだ昨日までは尊敬すべき裕福な地主で、素晴らしい結婚相手であったが、今日になって突然一挙に無宿者に、そして交際するにはかなりの危険を伴う男に変わってしまった。彼とヴェーラの結婚式について言えば今ではもちろん話にもならず、娘は名誉を傷つけられ、恥をかかされたまま終生残されることになったのである。

人生におけるあらゆる困難な状況の中で常にそうであったように、伯爵は今回も他人を非難することで自分の感じている責任を紛らわそうと焦っていた。

「ほら、お母さん、あんたは自分の心配ごとばかりにかかりきりになっていて、娘の監督をできていなかったじゃないか！」と彼は妻を責めた。

伯爵夫人自身この出来事によって自分達の家族にどんな屈辱が降りかかるのかをはっきりと認識していて、町での最初の会合で県の婦人たちから浴びせられるだろう悪気の無い質問や同情の甘さを既に味わっていた。

ロシアでは憲兵の青い制服を見ただけで呼び起こすあの独特の説明のできない恐怖が家中を、召使い達までも支配した。誰もが避けがたい災厄を予期した。

「警察よ、警察が私達の所へ来るわ！」フェーニャという女の子が街道を走る駅通馬車の小さな鐘の音を一度聞いて、それを知らせようと叫びながら駆け込んできた。

この恐ろしい知らせに皆は恐怖で気が狂いそうになった。伯爵夫人は寝室に駆け込んで、最も安全な隠れ家であるかのようにベッドに横になった。伯爵はヴェーラの部屋にとび込み、手あたり次第に本や書類をひつつかんで、不幸なことに燃えていたペチカの中へ手ずから投げ入れた。使用人たちは皆どこか方々へ行ってしまった。

しかし、その騒ぎは杞憂だった。それは単に税務署員が通り抜けて行ったというだけのことだったが、それでも誰もが体験した動揺から落ち着くことが長い間できなかった。

ヴェーラはどうだったかと言うと、彼女に襲いかかった打撃があまりに思いがけず、圧倒的だったので、彼女は茫然自失となり、自分の不幸の深さをすぐには理解することができなかった。

⁵ 現在のキーロフ（キーロフ州の州都）。1835年5月～1838年1月の間 A.И.ゲルツェンの流刑先であったことで知られる。

ヴァシーリツェフが完全に、永遠に彼女のもとから連れ去られてしまうというこの考えは想像を絶するほど恐ろしいもので、どうやっても彼女の頭の中に受け入れられるものではなかった。彼がいなくなったその後何が起こるのか、彼女は考える気にもなれなかった。この「その後」は、彼女には真っ黒な底なしの深淵のように思え、めまいを感じずに覗き込むことはできなかった。今の彼女のいちばんの不安、最も執拗で最もつらい恐怖は、彼が自分に別れを告げずに去ってしまわないかということだった。たとえ一時間でも、いや一分でももう一度彼に会えたら、その後に何が起ころうとも！時々彼女には、彼と会うべきだ、そうすればもう一度すべてがうまくいき、どうなってもすべて収まっていくという考えさえ浮かんだ。

彼女のすべての望み、すべての考え、すべての志向が、今や彼に会うという一点に集中した。しかし、会うのを実現するのは容易なことではなかった。ヴァシーリツェフはもちろんあれ以来憲兵の最も厳重な監視下で彼自身の家に囚われ人として留め置かれていた。

ヴェーラに対しても同様に厳重な監視があった。彼女が何か自暴自棄のとっぴな行動をとる決心をすることを家族の誰もが疑い、それゆえ彼女は自宅軟禁の状態に置かれた。昼間は母親と姉たちが彼女を一步たりとも自分たちのところから出ていかせなかったし、夜はアニーシャが彼女から目を離さないことを任された。

あれから既に二日が過ぎたが、ヴェーラはどんなに知恵を働かせてもまだ家からひそかに抜け出すことができずにいた。ヴァシーリツェフからの連絡も無かった。それは、召使いたちが隣の屋敷の犬でさえこちらの敷地に入れないことをとても厳しく命じられていたからだ。

残された時間は一晩だけだった。明日、東の空がやっと白みかけた頃に彼は連れ去られ、その時にすべてが終わるのだ。そう思うとヴェーラは気が狂いそうになった。

「アニーシャ、どうか、お願いよ！彼のところに行かせて！一時間、たった一時間だけでいいから！誰にも知られないように」と、彼女は自分の小間使いにぴったり近づいて懇願し始めた。

「何をおっしゃいます？お嬢様、そんなことお考えになってはいけません！」とアニーシャははじめのうちは驚いて、恐怖から手を振りはじめさえしたくらいだった。

「アニーシャ！あなたの若かった頃のことを思い出して！以前の農奴制の時代の生活がどんなにつらかったか、あなたはご自分で何度も私に話してくれましたでしょう。ねえ、ぜひ考えて。ステパン・ミハイロビッチはあなたたちお百姓に寄り添って心を痛めているのです。」

「ああ、お嬢様、ご病気なんです。お話をなさらないでください。お隣が親切な旦那様だということは私自身が存じあげています。私たち召使い達はあの人のことをお気の毒に思っています。涙が出るほどです。信じてください。そして、お嬢様、あなたのことも私どもはお気の毒に思います。私どもはきっとお似合いのご夫婦になれると思っておりましたのに！お二人を見て心がなごんだことは一度ならずでしたもの。どうしたらいいのでしょうか？神様の思し召しですもの！お嬢様、何をなさいますの！いとしい人、これは驚いた！私の足元で、卑しい農奴である召使いの足元で、あなた様が平身低頭して頼み事をなさるなんて。」

ヴェーラは絶望してアニーシャの前に跪き、彼女の手にキスをしていた。

「アニーシャ、もし私を行かせてくれないなら、私の血があなたを覆うことを知っておいて。もし彼が出立する前に彼に会えなかったら私は自殺するって誓ってもいいわ。」

アニーシャの心は石でできてはいなかった。アニーシャは何度もため息をつき、何度も嘆きながら、最後

にはもう少し遅い時間になって家の皆が寝静まったからお嬢様を裏口から出してあげると約束した。

アニーシャの服を着て、着古した黒いショールを頭からひっかけ、ヴェーラがこっそり家を出た時、外は既に真夜中だった。ここ数日はまた寒くなり、昼間は陽射しが温かくても夕方にはちょっとした寒ささえ始まり、街道の水たまりには外皮のような薄い氷で覆われてヴェーラの足元でカサカサッと割れた。彼女の手足を軽い寒気が駆け抜けた。両方の屋敷を隔てる小川が荒れ狂い始めて氾濫したため、崖を越える普通の順路をたどることはできず、二露里ほど遠回りをしなければならなかった。ヴェーラにとって野原に夜一人でいるという機会はこれまで一度も無かった。よく知っている道も彼女には昼間とはまったく違うものに見えた。すべてのものが突然変ってしまい、見分けがつかなくなっていた。

ヴェーラは脇目も振らずに前を向いて歩いていた。恐怖も昂揚も感じず、目の前に差し迫ったヴァシーリツェフの出立についての悲しみさえもおさまっていた。全然不快ではない軽いめまいが彼女の思考を曇らせていた。足が急に軽くなり、体の感覚がまったく無かった。まるで夢の中にいるような気分であらう歩いていて、ヴァシーリツェフの屋敷の門の手前でようやく我に返った。

あたりは既に真っ暗で、みんなもう眠っているようだった。たった一つの窓で、下ろされたブラインドの下から一条の光が漏れていた。

ヴェーラは、はじめは静かにためらいがちに門をノックした。誰も応えなかったので、彼女はさらにいっそう強くノックし始めた。すると、門の下から二匹の犬が飛び出してきて、悪意に満ちた耳をつんざくような吠え声を上げた。ついに足音が聞こえた。素足に靴を履き、制服を投げやりに肩に羽織ったまだ眼の覚めきれぬ憲兵がカンテラを持って門を開けに来た。

「何の用だ？夜中にこんなところをうろろしているのは誰だ？」と彼は腹立たしそうにぶつぶつ言った。「えっ、こりやどっかの尻軽女だよ。」

いまいましさは驚きが変わった。

「旦那様にお会いしたいのです」とヴェーラは辛うじて聞き取れる声で言った。彼女は全身で震えていたが、気後れはそれほど感じていなかった。

憲兵はカンテラを少し持ち上げてその光がヴェーラの顔に直接当たるようにし、彼女を急がず無遠慮にじっと見詰め始めた。

「どうやら小間使いのようだ！」と彼は頭の中で決めつけた。

彼の顔から戸惑いが消えていった。

「お聞きよ、別嬪さん。どうやらお前さんは真夜中でも旦那のところに来る道をよく知っているようですねえ！」と彼はその上に薄笑いまで浮かべて言った。「しかし今日は、いいか、旦那のところまで行き着くのは少々難しいんだよ」と彼は突然口調を変えてまたきつく言った。

「私を行かせてください。どうか後生ですから行かせてください」とヴェーラは懇願し始めた。

憲兵の言葉から彼女が理解したのは、ヴァシーリツェフのところには行かせてもらえないことと友に会えないままここを立ち去らなければならないことだけだった。彼女の声は心から懇願しているように聞こえ、しかも絶望的でもあったので、もともと女に弱い憲兵は自分の意思を通すことができなかった。

「まあ、まあ！泣くなよ！」と彼は彼女をやさしくなだめた。「どうすれぱうまくお前さんの役に立てるかよく考えてみよう……。それでもやはり大佐には報告せにゃならんよ」と、彼はしばらく考えてから付け加えた。

彼はヴェーラを門の中に入れて中庭伝いに彼女を連れて行き、玄関の中でしばらく待つように言いつけ、自分は仕切りの向こうで既にお休みになっていたのに騒ぎで目を覚ました大佐のところへ行った。

ここへ来るときの道中で感じたのと同じような奇妙な茫然自失状態、何事にも全く無関心な状態が、再びヴェーラを支配した。ヴァシーリツェフの情婦が彼に別れを告げに来たと憲兵が上司に報告するのを、彼女は少しも恥ずかしがることなく聞いた。大佐が彼女について無遠慮な冗談を口にするのも、それは可愛い娘なのかと尋ねたのも聞こえた。それらはみな彼女の耳に伝わっていたけれど、そんなことは全く彼女に関係ないことのように、彼女の中にどんな小さな印象も呼び起こさなかった。

「ええい、畜生！その女を行かせろ！やつに最後の気晴らしをさせてやれ」と、大佐はついに決断した。

憲兵が奥の部屋に通じる扉を開けると、ヴェーラは矢のようにそこに飛び込んだ。

「見てみろ、まるで燃えているようだ！でも、よく聞けよ！なんて名前か知らんけど、可愛い人よ、今度お前さんの恋人がいなくなっても俺たちのことを忘れないでくれよ」と、彼女の後を追うように憲兵は大声で言った。

しかし、ヴェーラには何も聞こえなかった。彼女は、そのすき間からかすかな光が射していた閉ざされた扉と彼女とを隔てていた二つか三つの部屋を一気に駆け抜けた。

ヴァシーリツェフは書斎を兼ねた寝室に座っていた。彼はまだ服を脱いでおらず、本や書類の整理に没頭していた。広々とした大きな部屋は今や出発前にありがちな惨めで無秩序な様相を呈していた。隅に毛布の投げ置かれた狭い鉄製のベッドの上には、洗濯物やカバンやノートが積みあげられていた。床には書類の切れ端、引き裂かれた手紙、古い勘定書きが散らばっていた。大きな木箱二つには本がぎっしり詰まっいて、そのかわり壁際のカバーの無い棚はまるで裸の黒い骸骨のような様相だった。部屋の真ん中には開いたトランクがあり、下着類や上に着る衣服、それに一足の長靴がはみだしていた。

ヴェーラが扉を開けたとき、家を出てからこれまでのうちで初めてと思うほど強い動揺が彼女を襲い、一瞬心臓が止まったかと思えるほどだった。彼女は一步も前に進めず、ひとことも発することができないまま、入り口のところで立ち止まってしまった。

ヴァシーリツェフは彼女に背を向けて座り、書き物机の上に身を屈めて自分の仕事に没頭していたので、扉がきしむ音にさえ気づかなかった。しかし、しばらくして何気なく振り向いたとき、突然、扉の前にヴェーラの青白く背の高い姿があるのに気づいた。彼は驚いたような顔はせず、ただたいへんな喜びがあるだけだった。まるで彼女が来るのを信じてそれを待っていたかのようだった。彼は急いで彼女に駆け寄ると、ほんのしばらくの間二人は手を取り合って黙ったまま立ちすくんでいた。それは二人とも喉が痙攣で締め付けられるように感じたからである。ヴェーラは嗚咽をこらえながらとうとう彼のほうへ突進した。

扉の外でがさがさいう軽い足音が聞こえ、部屋の中にも突然見知らぬ部外者の存在が感じられた。ヴァシーリツェフの全身にまるでからだの不快感から出たような神経質な戦慄が走った。

「ヴェーラ！友よ！お願いだから落ち着いて。ここにいるのは僕らだけじゃないんだ。僕らは盗み聞きさ

れているんだ。あの悪党どもが僕らの苦しみを楽しむのを許すわけにはいかないんだ」と彼はくぐもるように囁いた。

彼に不意に冷静さがすっかり戻ってきた。彼は彼女の手を取り、本の山を押しつけてソファに自分と並んで座らせた。彼の顔はとても青白く、口角が時折痙攣し、こめかみの青い血管がロープのようにピンと張っていた。しかし、彼は穏やかな励ますような声でさきほどのこととは直接関係無いことを話し始めた。

「この箱の中に、ヴェーラ、僕はあなたに残していく本を分けておいたんだ。あなたと一緒にスペンサーを読み始めていたよね。僕があなたのために書き入れた鉛筆の痕をそこに見つけられるはずだ...」

彼女はソファに座って、まるで一つの姿勢で固まってしまっているかのように身動き一つしなかった。彼女の手はとても強く握りしめられていたので、一方の手の指の爪がもう一方の手にほとんど食い込みそうなほどだった。彼の言葉は明確な意味を持たないはっきりしないうなりとして彼女の耳には聞こえていた。彼が彼女に問いかけると、ヴェーラは機械的に頷くことで応えるかあるいは弱々しく情けなさそうな笑みで応えるだけで、言葉を発するのをためらった。それは最初のひとことを口にしたらきっと大泣きしてしまうと感じていたからだ。

掛け時計の振り子のカチカチという音が規則正しくそしてはっきりと響いている。大きなマルハナバチが重く激しい音を立てて部屋の中をブンブン飛び回り、ちょっと止まってはまた天井や窓に狂おしくぶつかり始めた。まるでひび割れた器から出る液体のように時間が一滴また一滴と流れ出ていって貴重な液体がどんどん少なくなっていくという物理的感覚に似たものをヴェーラは感じていた。別れが刻々と近づいてくる、近づいてくる、何年もの別れ、もしかしたら永遠の別れかもしれない。それなのに心のこもった言葉もなく、愛撫に一つもない。他人どうしのように二人は向き合って座っている。それでもやはり隣の部屋ではがさがさという軽い音がしている。

蠟燭の炎が不意に黄色くなり、ブラインドを下ろした窓が、それまで大きな黒いしみのように見えていたのに、青みがかかった董色といった色合いになった。外では雄鶏が歌うような声を出し、雀がさえずり始め、雌牛も鳴き始めた。これらはみな村の春の朝のごく普通の前触れだ。

冷たくうつろな絶望がヴェーラを支配していた。今になって初めて差し迫った別れがはっきりとした絶望的な現実として余すところなく現れたのである。結局のところこれまでは彼女の中にはこの最後の逢い引きの幸福への期待がそれでもやはりあった。何かはっきりしないものへの理性では説明のできない希望があまりにも強かったので、それが別れについての考えをぼんやりとしたものにしてしまっていた。しかし、今では何も、もう何も残ってはいない。すべてが終わったのだ。

ヴァシーリツェフはソファから立ち上がるとブラインドを持ち上げて窓を開けた。うっとりするような春の朝の最初の光が束になってさっと射し込んできた。光、ざわめき、春の花々の香り、春の歌... 嬉しげな、勝ち誇ったような、無慈悲な何もかもがいっぺんにどっと入り込んできた。

ヴァシーリツェフは無意識の素早い動きで窓をぱたんと閉じ、ブラインドを下ろした。彼はソファベッドに身を投げ、激しく大声で泣き始めた。背が高く逞しい彼の全身が嗚咽で震えていた。

気がつくともヴェーラはひと跳びで彼のそばに来ていた。彼女は彼の足元に身を沈め、自分のからだ全体を彼にぴったりと押しつけ、キスを浴びせた。

「私の愛しい人！私の喜び！一人で行ってしまわないで！私の命！私も一緒に連れて行って！」

ヴァシーリツェフは彼女を抱擁した。もはや彼は彼女を安心させることなど考えず、彼女の情熱的な愛撫に応じて彼女をますますきつく抱きしめ、長く情熱的なキスによって初めて二人の唇は合わさって一つになった。

突然、ヴァシーリツェフが我に返った。彼は激しく、ほとんど乱暴とも言えるほどにヴェーラを自分から押しのけて立ち上がり、部屋の中を歩き回り始めた。ヴェーラは誰もいない長椅子の前で一人膝をつき、長いこと静かにさめざめと泣き続けていた。

ヴァシーリツェフが再び彼女に近づいたとき、不意に彼の顔はあたかも長い間重篤な病気だった後かのようによつれて見えた。

「ヴェーラ、私のいとしいひと、私を許してくれ。」彼の言葉が聞こえ始めた。「私は君に多くの悲しみをもたらした。私のかわいそうな人！どうして君を連れて行くことができようか！はつらつとした若い人を、歳とって半ば終わったような人生に縛り付けるなんて私には出来はしない！それにたとえ私が望んだとしても、はたして許されるだろうか？ご両親が力づくで連れ戻されるのではないか？」

押し殺したようなつぶれた声だった。ヴェーラはもう泣いてはいなかった。今や彼女は本当にすべての終わりなのだとわかっていた。

今ではもうすっかり夜が明けていた。まもなく扉をノックする音がした。憲兵が一時間後に出発すると告げに来たのだ。

「ヴェーラ、もう帰ったほうがいいんじゃないか」とヴァシーリツェフは静かな力の無い声で言ったが、彼女は黙って首を横に振った。彼女は最後まで彼のそばに残っていたかったのだ。

奇妙な茫然自失、そして周囲のあらゆるものがあたかも現実ではないような意識が再び彼女を支配した。ヴァシーリツェフもまたまるで夢の中にいるように歩き、話していた。

年老いた料理女、執事、百姓仲間など彼のところに住み込んでいるみんなが相次いで別れを告げに来るようになった。

彼らは部屋に入るとまずアイコンに向かって十字を切り、次に旦那様に近づいて口髭を拭いてからまるで宗教儀式を行うかのように真面目に厳かに三度彼にキスをした。腕に子どもを抱いた幾人かの百姓女がポーチに立っていて、まるで死者を弔う挽歌にも似た大きな泣き声で自分たちの悲しみを表していた。

ヴェーラには、これらの人々が入ってきて、話し、ため息をつき、泣くのを乾いた目で眺めていた。彼女には彼らが奇妙で複雑な演技をするロボットのように思われたのだ。

憲兵大佐は隣の部屋でこまめにデカンタから注ぎ足しながら軽い食事をしていた。

「ねえ、あなた、ステパン・ミハイロビッチ、旅立ちの前に腹ごしらえをなさっても何の邪魔にもなりませんよ」と、人のよい励ますような声で言った。

半開きの扉の向こうから彼はヴェーラをひそかに好奇の目で見やっただが、おそらく彼女はありふれた小間使いの女などではないことを察して彼女に直接話しかけはしなかった。

三頭の馬がつけられたバネの無い四輪馬車がポーチに到着した。大佐はその馬車のヴァシーリツェフの隣の席につき、憲兵のうちの一人在御者と一緒に御者台に席を占め、もう一人はそのまま家に残った。

「おい！さあ、やれ！」

馬は一目散に走り出し、馬車は左右に軽く揺れながら泥道を動き出した。やがてそれは白樺の木立ちの向こうの曲がり角で見えなくなった。伝わってくる馬具に付いた小鈴の音は時とともにどんどん弱くなっていった。そしてついにまったく静かになった。もう何も聞こえない。何も。聞こえてくるのは、村の春の朝のいつも通りの耳に心地よい響きだけであった。

ヴェーラはこうべを垂れ、あたりを見回すことなく来た道を静かに戻ってきた。咲き誇るチェリョームハが白い花びらを彼女に浴びせ、小枝からは香ばしい露の大粒の雫が落ちてきた。若いウサギが草地に飛び出し、谷地坊主の上に座って雌ウサギを呼ぼうと前脚を叩いて音をたて始めたが、突然人間の存在に気づくと長い耳を後ろにおろして森の中に一目散に駆け出した。空は、まるで太陽が瑠璃色の天空に花開いて天の丸天井全体を満たしたかのように、きらきらと輝いていた。高く、頭上の高い所、小さな暗い震える点から幸せと愛を歌った力強い歌が天地全体を広がっていった。

VIII

時は静かにゆっくりと進んでいく。単調で辛く、鉛色の重苦しい哀愁に満ちた日々が過ぎていく。

ヴァシーリツェフが去ってしまった最初の頃、ヴェーラの肉体全体は体験した神経の打撃によってうちのめされ、強い悲しみさえ感じられず、生きたり心配したりするあらゆる力が動かなくなってしまった。深い圧倒的な疲労感が断然まさっていた。一日中、まるで冬眠でもしているような状態で、どんな小さな思考にも専念できない。会話の途中で突然眠り込んでしまうこともあった。ただ、時おり、ヴァシーリツェフと過ごした最後の数分間の殆ど肉体的な追憶によって、この精神の茫然自失状態が一瞬だけ解消されることがあった。耳には彼のおだやかなやさしい声が響き、唇には燃えるようなキスのなごりが感じられた。情熱的な震えが彼女の全身を駆け抜けた。不思議なことに、このような瞬間の後では必ず彼女は思いがけないやすらぎを感じ、「このままでは終われない。私達はまた会える。」という揺るぎない確信を得た。

時は流れ、体力が回復するにつれて、より激しく苦悩する力も復活してしまった。普段の活動に戻ると、ヴァシーリツェフに会いたいという望み、三年の間の毎日の習慣によってはぐくまれた望みは、いよいよ差し迫ったものとして、ますます辛いものとして現れた。あらゆる些細なこと、あらゆるつまらないことが無慈悲に彼のことを思い出させ、周囲のあらゆるものに彼が自分の足跡を残していったようだった。何をするにしても、何にとりかかるにしても、過去のこと、幸せだった時のこと、あるいは小さなあまり重要でないような出来事も生き生きと思い出させるような何かが決まって出て来るのだった。その出来事が起きた当時はほとんど注意が向けられなかったのに、しかし今ではその出来事の記憶が燃えるような狂おしい絶望のほとばしりを呼び起こすのだった。

最悪だったのは、朝の目覚めの時だった。彼女は今では奇妙で鮮明な夢を見るようになった。その夢はとてもリアルで真に迫っていて、彼が近くにいることを全身で感じられるほどで、それはおそらくたくさんの小さなもっもらしいディテールが用意されていて、あたかも現実のように思われ、夢の中でいかにも喜びげに自分に向かってこう言うことさえあった。「いいえ、もう今じゃこれは夢ではないわ！今、これは本当よ」と。ところが突然幕が破れたかのようにすべてが一瞬にして変わり、影が薄くなり、ぼやけ、鋭い衝

撃が全身を駆け巡り、もはや何も無くなってしまふ。再びベッドには彼女一人だけがいる。またしても彼女は自身の孤独という最も耐え難い意識に支配される。彼女はまたベッドに横たわり、もがき苦しみ、熱狂的でしかも絶望的なむせび泣きの中で身もだえする。

そして、日に日にその愁いはひどくなり差し迫ったものになってきた。以前からヴェーラは自分の家族を避けるようにしていたが、今ではもう姉達と同席して、つまらない関心事やなかみのない会話を聞いているのが彼女には耐えられないものになってしまった。彼女にとってすべてが生彩を欠いたうんざりするものになった。誰かと一緒にいなければならない時には彼女はいかに早く出て行くかをだけ考え、いつも彼女には真剣に考えるには一人でいなければならないように思われた。そして一人だけに放っておかれると、実際に彼女はすぐに考え始めた。つまり、慌ただしく情熱的に空想することにとりかかったのだ。彼女の想像の中には最も奇想天外で、最もあり得ない絵が描かれていた。どういうことかと言うと、彼女がこの家から逃げだすとか、ヴァシーリツェフがどこにいるのであれ、たとえ海の底にいたとしても、彼を探し出すとかいったあらゆる場面を既にかかなりの回数頭の中で体験していたのである。夢想は一瞬の安らぎを彼女にもたらしはした。しかし、突然どこからともなく「私は一カペイカも持っていないし、ヴァトカまでは三千露里も離れている！」と、冷やかな酔いをさますような思いが湧いてきた。「ロシアでパスポートも持たずにどこへ行けるというの？最初の宿駅から監視付きで戻されてしまうわ。」

夢は遠ざかり、苦くうんざりするような堪らない不快感を残していった。

合理的な希望は少しもなかった。残ったのは、奇跡が起こると説明のできない信念だった。悲しみにひどく打ちひしがれていた最初の頃には「こんな苦しみはありえない！もう終わりが来るはずだ！」という即物的な憤りが常にあった。しかし、終わりは来なかった。苦悩は普通のありふれた事象になった。今では絶望の発作が起こるたびごとにその瞬間の苦しさが、昨日の記憶と明日も同じはずだという確信によってよりいっそう強まった。

ヴェーラが既にまったくの絶望に陥り始め、暗澹としたうつろな重い哀愁がもう日常の気分となったその瞬間に、一筋の幸せの光線が突然輝いた。彼女はヴァシーリツェフからの手紙を受け取ったのだ。彼女への手紙をいつものように郵便で送ることは彼にはできなかった。手紙は警察によってかあるいは彼女の両親によって遮られたであろうから。しかし、彼は機転をきかせてヴァトカと取引関係を持つある知り合いの商人に託して彼女に便りを送り届けたのだった。

その手紙は短く、非常に控えめで、優しい吐露などまったく無かった。ヴァシーリツェフがこの手紙が他人の手に渡ることを考慮に入れていたのは明らかだった。しかし、おそらくどんなに長く情熱的な親書でもこの小さな紙切れ以上の喜びをもたらすはしなかっただろう。ヴェーラは幸せのあまり気が狂いそうになった。既にさんざん苦しんだ人間がその苦痛の初めての緩和に直面した時いつでもそうであるように、彼女は急いで喜びをつかんだので、今や彼女にとってはあたかもすべてが過ぎ去ったことで、悲しみは無かったかのように感じられた。なにより大切なのは彼から知らせを受け取ったということだった。いちばん恐ろしく思われたのは、彼が突然どこかへいなくなり、跡形も無く消え失せてしまって、どうやってももう連絡もつかなくなるのではという気持ちだった。今やっと手紙のやりとりができるようになると、彼の旅立ちは普通の旅立ちとなり、彼との別れはこれまでのような重苦しい終わりの見えない不幸ではなく一時的な不快な出

来事になった。

最初の数分でヴェーラはヴァシーリツェフの手紙をそらんじてしまっただけでなく、手紙の外見さえも記憶に刻まれたが、しかしその貴重な紙を読み返さない日はなかった。手紙を受け取ってから最初の一週間、彼女はこの喜びによって生き、その後は次の手紙を待つことにすっかり没頭していた。

一つの考えや一つの関心事に格別にとらわれて生き、その上自らの意に反して消極的な待つ身の役割で我慢するしかないあらゆる人々と同じように、ヴェーラも突然ひどく迷信深くなった。彼女は今やあらゆる些細なことの中に良い前兆と悪い前兆、良い印と悪い印とを見るようになった。彼女にはものごとを絶えず占うというなんだか子どもじみた習慣が現れていた。朝早く目が覚めるとこれという根拠無しにこんなことが頭をかすめるのだ。「アニーシャが部屋に入ってきてまず私に挨拶をすれば、それは万事順調で、まもなく手紙が届くということを意味しているだろう。けれど、もし彼女がひとことも言わずに真っ先に窓際に行ってブラインドを上げれば、それは悪い兆しだろう」と、そんな馬鹿げた考えが見え隠れするや否や、ヴェーラは自らの意志にそむいて小間使いが現れるのを心臓がどきどきしながら待ち、巫女が彼女にどう答えたか次第でその日はまる一日中元気だったり悲しかったりするのだった。

手紙をやりとりすることの難しさにもかかわらず、夏からその年の秋にかけての間にヴァシーリツェフはヴェーラに三通の手紙を送る機会を見つけ出した。そして手紙が宛先に無事に届くことを確認するにつれて、彼はますます自由に、そして心置きなく書き始めた。最後の手紙は、ことに優しく、励ましに満ちたものだった。彼はたしかにどうやっても治らないしつこい咳のことでちょっと愚痴をこぼしてはいたが、概ね元気で良い気分のように、初めて将来の計画についてはっきりと触れさえしたほどであった。

「私の流刑が終わるという希望を私は与えられている」と彼は書いていた。「しかし、もしもこの希望が当たらなかったとしても、だってどんなことがあっても二年半後には君は成人し、自分の運命を自分で切り開くことができるようになるのだ。わが愛しい子よ！君を狂おしいほど愛している旧友が時折りどんな無分別な夢に身をまかしているのか、君が知ってくれてさえすればいい！」

ヴェーラは手紙を受け取って喜びで我を忘れた。もう彼女は将来を疑わなかった。二年半は永遠ではない。それはすぐに過ぎ去り、その後は何であれ、世界中の何であっても彼女を最愛の人から遠ざけておくことはできないのだ。

しかし、ああ！この喜ばしい手紙の後に次の手紙が続くことはなかった。知り合いの商人はあいにく仕事で長いこと不在だった。実は、彼は自分が不在の間彼の手代が手紙を届けると約束していた。しかし、今週、来週、....と週がどんどん過ぎていっても何の知らせも無かった。ヴェーラは幸福を確信していたので、はじめは手紙が来ないことをたいして心配せず、ありとあらゆる理由を思いついて自分に言い聞かせた。しかし、少しずつ不安は大きくなり、やがて不安でたまらないという気持ちが心を奪うようになっていった。彼女のあらゆる考えはたった一つのことに集中するようになった。そう、手紙を手に入れるということだけに。昼間は知り合いの商人から遣わされた誰かが来ないかとひっきりなしに耳をすまし、夜は懐かしい筆跡で書かれた封筒が彼女に送られてくるのを夢見た。

この実りのない、やりきれない、そして絶え間のない待ちの苦痛は、時に耐え難く、いてもたってもいられないほどであった。時にはヴァシーリツェフ自身に対してさえ悔しさや恨みを覚えた。「もしも彼に出会

わなかったら、姉たちと同じように穏やかに暮らせたのに！」と、意気地の無い弱気が吹き出して、無念にそう思ったこともあった。ある日、彼女の心の中でつらい感情とは相矛盾する激しい精神の昂揚が起こり、ある種の狂乱の中で彼の最後の手紙を取り出して細かく引きちぎった。しかし、白いくちやくちゃの、ずたずたに引き裂かれた紙が床にばらばらと落ち始めると、彼女は急に後悔の念に駆られ、何よりも大切なものに自身で手をかけてしまったという、自分自身に対する何か嫌悪感が現れた。彼女は一時間かけて大切なひと切れひと切れを拾い集め、きれいな紙の上に貼り合わせていった。

戸外ではまた春になったが、でもまだ何の知らせもない。天気の良い日にはヴェーラは隣の屋敷が見える崖に行き、半ば壊れかけた古いベンチにうつろで気の滅入るような無気力のまま何時間も座っていた。

ある日、いつものように座っていると、突然、駅通四輪馬車が街道からヴァシーリツェフの家に向かって曲がっていくのが見えた。

「どういうことなんだろう？あれはどこに行くのだろう？」と彼女が考えると、突然彼女の心臓は激しく、激しく鼓動を始めた。「もしかして、通り過ぎて隣の村に行くところだろうか？いや、ほら、あれはガタガタと音を立てて半ば腐った古い橋に乗り入れて並木道に曲がったじゃないの。ここからはもうよそへ行く道は無いわ…。神様、あれはいったい誰なのでしょう？」

ときめきがあまりに強く彼女を支配したので、彼女の足は震えはじめ、ようやくその場に立っていられたほどだった。病的な胸騒ぎによって彼女の心臓は刺されたように痛んだ。それと同時に喜びの身震いが彼女の中を駆け抜けた。「少なくともすべてを知ることができるわ！何も知らないでいるのよりずっと良いことだもの！」

スカーフをすばやく肩に羽織り、彼女は隣の屋敷に向かって走り出したが、しかし館に近づくにつれてその歩みは我知らずどんどん遅くなり、心臓はますます病的に、ますますひどく締め付けられた。

草ぼうぼうの中庭に空の四輪馬車がいる。駅通馬車の御者が帽子を脱ぎ、汗をぬぐいながら馬たちの世話に追われている。長い間釘付けにされていた正面ポーチの扉が今ではいっばいに開け放されている。ヴェーラは玄関の間に入る。ホールはすっかり空っぽだ。人が住んでいないせいで湿った匂いがする。半開きの鎧戸を通してかすかな光が差し込んでくる。

家具、椅子、テーブル、ソファ―……すべてのものが、彼が立ち去ったあの日とまったく同じに並べられている。あの恐ろしい朝に身体で感じ取った記憶が突然彼女を一挙に支配する。

彼の書斎から物音と声が聞こえてくる。ヴェーラはそこに行く。屋敷番の老人は窓のそばで鎧戸をいじっているが、門が錆びてしまったので開けられない。手に大きな鍵束を持ったかつての料理女は前掛けで涙をぬぐっている。薄暗がりの中でヴェーラは書き機のそばにいるさらに三人の人影をかるうじて見分ける。結局そのうちの一人は郡警察署長だとわかったが、残る二人の旅装の男女は彼女にはまったく見覚えがない。

ようやく鎧戸が開け放されると、郡警察署長が自分のほうからも彼女に気づき、近づいてくる。

「ご紹介させてください。ゴルビンスキーさんご夫妻です。あのお気の毒なステパン・ミハイロビッチさんのご親族です。つい数日前に従兄弟にあたるかたがピャトカで肺結核のために亡くなられたとの公式の通知を受け取られました。昨日ご夫妻は私どもの町にやって来られて、私にこのかたがたの所有権を認定するよう相談をなさいました。法律上先祖伝来の領地はこのかたがたの手に…。」

この時、自然はヴェーラに寛大であった。恐ろしい知らせを耳にしてヴェーラは意識を失ったのだ。彼女は熱病を発症した。何週間も譫言を言いながら病床に臥せていた。回復はゆっくりとしか進まなかった。

ヴェーラは少しずつ元気を取り戻し、重い病気の後で快復する人たちがみなそうであるように、今では生きていることの身体での喜びをより高次の段階で体験している。回復期の病人固有の自己防衛の本能によって彼女は自分自身からあらゆる重大で難しい考えを遠ざけ、今ではすべての考えと願いを患者の生活を豊かにする些細な喜びや悲しみに集中し、こうした些細なことは彼女の目から見ると奇妙で不釣り合いな重要性を持つように受け止められた。子どもにとってそうであるように、あらゆることについて新鮮な魅力が再び彼女の手に入ったということだ。ブイヨンが美味しく用意されていれば彼女は喜んだし、もし枕がしかるべく整えられていなければ泣いた。彼女が焼いた若鶏の手羽を食すのを初めて許されたときは家の中の大事件になった。

ようやく全快して元の生活に戻ったとき、彼女には過去のことはまるで霞を通して見るように遠い昔のことに思われた。

ある日、ヴェーラがベッドの上で既に起き上がっていたとき、父親が彼女のサインが必要だと言って何かの書類を持ってきた。ヴェーラは弱々しく震える手で自分の名前を書いたが、何か恐ろしいことを何となく本能的に予感していたのか、なぜそれが必要なのか尋ねようとしなかった。

彼女が完全に快復してから数週間経って、両親はワシーリツェフが死を前にして彼女に遺書を書いていたことを伝えた。それは彼女に自分の財産の一部を残すという内容であった。

これへの感謝の印として父は生前にワシーリツェフが彼女に書いた手紙を本人に手渡す義務を負わされたと判断したのだ。

「ヴェーラ！君は私にとって娘であると同時に私の最愛の人でした。」と彼は書いた。「そして今、私は死に向かいながら、君のことだけを考えています。できれば君が私の後を継いでくれるといいのですが。私自身はこの世で何も成し遂げられませんでした。私の全生涯を通じて私は有閑な役に立たない夢想家でした。私は死んでいきますが、歌の中で語られる野の草のように、私の足跡は残らないでしょう。それは刈り取られ、ひからび、それが生えていた場所はもう決して見られないでしょう。しかし、君、私のヴェーラ、君はまだ若くて力があります。君が何か高く素晴らしいものに呼ばれているのを私は知っているし、感じています。私が夢見たに過ぎないことを君は成し遂げるでしょう。私がぼんやりとしか予見できなかったことを君は果たすでしょう！」

ヴェーラは、もはや永遠に冷たくなってしまった手で書かれたこの数行を、自分の全存在を包み込む深い畏敬の念とともに読んだ。あの世からの声がヴェーラを相手に語りかけてくるように彼女には思われた。かつての熱狂的で恨めしい絶望はもう無かったが、黒い影が彼女の全人生の上に横たわっていてあらゆる単純で利己的な幸福の可能性は永遠に断ち切られてしまったように彼女には感じられた。

ヴェーラの病気は、あたかもバランツォーフ家の行動様式や思考のスタイルを突然破壊し、穏やかだが退屈でもあった無風状態の長い時期にけりをつけたように思えた。その後急に次々と変化が降り注いだ。

最初の変化は、まさにもう以前から誰もが待ち望んでいたとても素晴らしいものだった。レーナが許嫁になったのだ。彼らの住む県都に新しい連隊が派遣され、その連隊の将校の一人がこの幸せな変化の張本人で

あった。しかし、結婚後間もなく連隊はロシアの別の辺境に送られることになり、若いカップルはここを去らなければならなくなった。以前にも増して家にいるのが退屈になったリーザは、姉の連れ合いの仲間の中から自分の未来の夫を探し出したいという密かな望みを持って姉のところに行った。

かくしてバランツォーフ一家は突然崩壊し、散り散りになってしまった。地主の古い館の巨大な部屋部屋は、以前にも増して空っぽになってしまったように見えた。

その時不意に全然楽しくなどない新しい予期せぬできごとが起きた。卒中が伯爵を襲ったのだ。しかし今回は、死は窓をちょっとノックしただけで、でも拭いがたい足跡は残してそばを通り過ぎていった。

伯爵は足が麻痺して記憶も曖昧になった。彼は第二の子ども時代に陥った。背の高い深々とした肘掛け椅子に上半身を起こして横たわり、一日中だだをこねては泣き、小さな子どものように自分を楽しませてくれることを要求した。しかし最も周囲を困らせたのは、延々と話をし続けるといふ彼の過度の熱中だった。彼は何時間も話し続け、舌を軽く動かすのも難しく、言葉も間違えるのに、同じことを百回も繰り返し話し、もしも話を聞いてもらえないとなると苦々しう気に障ることを言うのだった。ひとりヴェーラだけがこの病気の老人の面倒を見る忍耐力を持ち、ますます支離滅裂になっていく彼の言葉を理解することができた。

レーナの結婚を機に少し元気になっていた伯爵夫人は、今やすっかり意気消沈してなりふり構わなくなっていた。彼女はすごく信心深くなり、神懸かりの乞食や修道士、それに巡礼者などに囲まれ、浮世のあらゆることを投げ捨ててしまった。

病身の父の付き添い看護師でなければならなかったヴェーラにとって、今は何か自分個人の活動について考えることはできなかった。ひたすら従順で希望の見えない無気力状態が少しずつ彼女を支配していった。彼女の今のこうした生活がいつ終わるのかはまったく見通せなかった。と言うのは、医師達が伯爵はあと十年くらい生き抜くことができると宣言していたからである。

しかし、幸か不幸か、この予測は当たらなかった。それから三年ほど経ったある日に突然死が訪れた。ある日のこと、伯爵はいつもよりぐっすりと眠り込んだが、長く続く睡眠に驚いたヴェーラが起こしに来てみると、伯爵は既に冷たくなっていたのだ。

家族は葬儀のために最後にもう一度寄り集まり、その後でもう完全に別れてそれぞれ方々へ散っていった。

伯爵夫人は娘たちに自分は修道院に入ることに決めたと告げた。父祖伝来の領地は元の管理人が買い取り、その売却によって娘たちの手元はそれぞれ二万ルーブリの資金が残った。姉二人は連隊将校の夫人としての生活に戻って行った。

ヴェーラは今や完全に自分自身の主人として世界に一人取り残されていた。しばらく考えて、彼女はペテルブルクに行きそこで何か活動を探すことに決めた。

IX

ペテルブルクに滞在したはじめの時期、ヴェーラは幻滅以外の何も味わうことがなかった。人の役に立つということは自分が思っていた以上に難しいことなのだ彼女が確信した。彼女の目には、人の役に立つというのは専制や圧政を破壊するためにみずから働くか、あるいはその方向で働く人々を支えることだと映っていた。それ以外のもっと単純なやり方で役に立つことができるとは彼女は思ってもみなかった。しかし、

彼女にふさわしい仕事について誰に相談を持ちかければ良いのか。彼女とヴァシーリツェフとの会話は彼女に何らかの活動をさせるための準備にはほとんどなっていなかった。いつも抽象的で理想的な話ばかりだった。ヴァシーリツェフのおかげでヴェーラは一連の革命的な出版物は読んでいた。ヴァシーリツェフ自身、二人の会話の中で、人類が苦しんでいるあらゆる苦難の驚くべき様相を提示し、その苦難の根源は、現代の生活が本来あるべき自由と団結の上ではなく、抑圧と競争の上で成り立っているという事実にあることを彼女に教えた。殉教者達、つまり聖なる事業の勝利のために命も幸せも犠牲にすることをかえりみない現代の自由の英雄たちについて、彼は一度ならず彼女に語りかけた。そして、彼女はこの英雄たちを熱烈に愛するようになり、彼らの運命に幾度も涙を流した。しかし、ヴェーラとヴァシーリツェフとの会話の中で、彼女自身がこれらの英雄たちと同じようになるために何をすることが必要かという話は一度も出てこなかった。そして、ヴァシーリツェフが逮捕された後の幾年か、すなわち孤独な内省の日々の間、彼女は一度もこの問いに思いを馳せることがなかった。彼女はいつもすぐ目先の課題、つまり家族とのあらゆる絆を断ち切ることに、彼女の人生の舞台であった窮屈な環境を捨て去ることに心を奪われていた。現実の生活に対する彼女の無知はあまりにも大きく、彼女の想像の中ではニヒリスト達ははっきりと表された目標に向かって突進するために特定の計画に従って働くしかるべく組織された秘密結社のようなものだった。

だから、ニヒリスト達の扇動の根源地であるペテルブルクにひとたびやって来さえすれば、すぐに大きな地下軍団に引き入れられ、たとえそれがどんなにささやかであったとしてもその中で一定のポストを占めることになると思わなかった。

そんなことがここ幾年かの間ずっと彼女の夢だった。こうして彼女はペテルブルクで自分の頭に浮かんだことは自由にできる自分自身の人生の完全な主人となっているのだ。それじゃ、それからどうする？以前と同じように彼女の目の前には目標がはっきりしない。誰に頼ればいいのか、どうすれば本物のニヒリストに出会えるのか、彼女にはわからない。私がそういうニヒリストを直接には一人も知らないこと、そもそもロシアに広範な革命組織が存在することを私が信じてさえいないことを知って彼女はものすごく落胆した。こういうことは彼女の見込みには少しも入っていなかった。彼女は私にもっと良い何かを期待していたのだ。

そうなのだが、もっと良いことを期待して待つ間に自然科学の講義に出てみてはと彼女にあえて勧めた。ペテルブルクでは女子課程がつい最近開設されたばかりだったのだ。

彼女は私の話を聞き入れて講義を受けるようになったが、心はその方向に向けられていなかった。彼女は自分の女友達と同じ水準に立つことも、友達がもつ科学的な関心事に入り込むこともできなかった。これらの女友達の大半は若い娘で、頭の中にはっきりした目的を持って熱心に勉強していた。その子たちは、少しでも早くより良い成績で試験に合格して女教師になり、自分の勤労によって生きていけるようになろうと努力していた。

彼女達のすべての関心事は今のところ学ぶことに集中し、会話のなかみも教授や講座、実習のことが唯一の内容となっていた。彼女達は世界苦⁶によって心を痛めることなど少しもなかった。自由時間には彼女達は結構喜んで集まり、必要な場合には、つまり男子学生が合流してきた時にはしばらく踊っていたいとかち

⁶ もと 19 世紀末-20 世紀初頭のヨーロッパの芸術、特に文学に見られた厭世的気分 [研究社露和辞典]

よつと科^{しな}を作ってみたいという望みに打ち克つことはできなかった。すべてこのようなことがヴェーラのような夢想家の憂鬱そうな熱狂とは少しも合致しなかったことは明らかだった。したがって、彼女が自分の財布で彼女達を助けながらも、同時に彼女達が子どもであるかのように接し、彼女達からいくらか距離を置いて振る舞っていたとしても驚くべきことではない。

学ぶこともやはり彼女を満足させなかった。「科学を勉強する時間はまだあるわ。」と彼女は考えた。「でも、その前に、まず自分の仕事の主なところをやってしまわなければならないんです。」そう考えて彼女は、自身の勉強にもっとまじめに取り組むようにという私のあらゆる説得に応えた。

「私にはわかりませんわ」と彼女は私に言った。「四方八方から大きな不幸がやってきて私達を囲む中、人類が訴えるその苦痛の感覚が強い下で、どうして顕微鏡で蠅の目を覗くことなんか喜びを見出せるのか私には理解できません。しかも実際にはこの高邁なテーマに、尊敬するV教授は私達をまるまる一時間も取り掛からせたのです。」

私はヴェーラが自然科学にあまり関心が無いことを確信し、彼女に政治経済を勉強するように勧めた。結果は同じことであった。広く読まれている政治経済学の論文を読んでも、彼女の心には何の痕跡も残らないまま、疲労感と呼び起こすだけだった。彼女はそれらの論文を読むことに取りかかる前から、論文の著者達に関心を持つ課題である人間の幸福の実現は、人々が自分たちの間ですべてを分かち合い、これ以上の抑圧も私有もなくなったときにのみ達成されると既に確信していた。

彼女はこれをいかなる疑いも許さずいかなる証明も必要としない議論の余地の無い真理とみなしていた。それならなぜ賃金だとか利息だとか信用だとか、あるいは同じように退屈で面白くない一連のことにいつまでも頭を悩ませているのだろうか！それらの唯一の使命といたら人の知性に混乱を呼び起こし、本当の目標から人々を遠ざけることだけなのに。今の時代まともな人間であれば「自分の個人的な人生のためにどんな目標を設定するか」と尋ねる権利は無い。人は共通の目標に導く最短の道を選ぶことにだけ関心を持てば良い。ロシア人にとってそのような目標は社会的・政治的革命でしかありえない。そして、これらの問いに対するいかなる答も政治経済学の教科書には載っていない。つまり、それらを読むには及ばないということだ。話し合いの中でヴェーラはこのような考えを私に伝えたのである。しかし、不思議なことだと思われるかもしれないが、それでもやはり私達は友となった。私達は頻繁に会うようになり、会話の中では個人的な共感が幾度も見え隠れした。これは、ヴェーラの全人格を際立たせている彼女の不思議な魅力によるものだと思う。

彼女の顔立ちの特徴はとても気品に溢れ、身のこなしのひとつひとつがとても優雅で調和が取れていて、そして何よりもその振る舞いが全体としてとても誠実で純心だったので、私は道徳的にも満足させられた。しかし、彼女と議論することは不可能であり、私にはただ彼女の知性がまだ十分には発達していなくて、それゆえに彼女が現代文明の偉大な恩恵に無関心であることを残念に思う気持ちだけが残っていった。

ヴェーラに関して言えば、彼女は自身の知り合いの誰よりも私を好んでくれた。しかし同時に、彼女は私が数学の仕事に全身全霊を捧げていることについてはまったく理解できなかった。

数学者は言ってみればある種の変人で、数字で表現された謎遊びを解くことに夢中になっているように彼女には思われた。そうやって夢中になるのははなはだ罪の無いものだから許せるけれど、その弱さには一種

の軽蔑を禁じ得なかったのだ。

かくして私達のそれぞれが相手を高い所から見下すように見ながら、ある種寛大な態度をとっていた。しかしそのことが私たちの友情の妨げになることは無かった。

そうこうしているうちに時は流れ、自分が決めた目標に向かってまだ一步も踏み出せていないと感じたヴェーラは次第に苛立ちと焦りを感じるようになった。「大義のために身を捧げたい」という彷徨える願望が満たされないことから、彼女の健康は損なわれ始めていた。彼女の頬からは鮮やかな薔薇色が消え始め、大きなダークブルーの瞳の表情は日を追うごとに物思いに沈んで悲しげになっていった。

ある楽しい冬の朝私達二人でネフスキー通りをしばらく散歩していたときのことを思い出す。空は晴れ渡り、太陽はあたり一面にまばゆい刺すような光線をあまねく行き渡らせていた。ロシアの民話に出てくる光り輝く王国に何かの奇跡によって連れて行かれたように思えたものだった。店々の窓は銀色にうつろい変わっていった。足元も銀色に輝き、私達のまわりでは小さなスパンコール⁷となって方々へ飛び去っていった。冬の澄んだ空気はとても爽やかで、人生を一層楽しくしてくれた。歩道の幅が広いのにもかかわらず周り中から通行人に押されて身動きするのも難しいほどだった。男性、女性、子どもたちが、頬を紅潮させ、あごを毛皮の中に深く入れて健康的で楽しそうな息づかいをしていた。

「あのう」と突然ヴェーラが私に話しかけてきた。「この人たちの中にももしかしたら私があんなに前から探している人たちがいるかもしれないじゃないですか。おそらく私がいたずらに言いたがっていたことを全部言ってくれることができるのは一人だけじゃないかもしれないです。あのね、私は感じの良い人に出会うという巡り合わせになる度に、その人を呼び止めて、まっすぐ目を見て、その人がそういった人達の中のお一人ですかと尋ねようと思っているんですけど。」と言うのだ。

「まあ、いいわ。私がいるからといって、どうか遠慮はしないでね」と私は最大限落ち着いた口調で答えた。「たとえば金ピカの肩章をつけたあの将校や単眼鏡で得意げにあなたを見ているあのハイカラな弁護士を見てごらんささい。あの人達から尋ねることを始めない？あの人達の外見だとたくさん期待が持てるでしょうに。」

ヴェーラは肩をすくめて大きくため息をついた。

その冬の終わり頃、ヴェーラの苦悩に終止符を打ち、彼女が探していたものを発見することを可能にするちょっとした出来事があった。

一月の初めにまたロシアの各地でかなりの数の逮捕者が出て、巧みに練られた社会主義者の陰謀を暴くことに政府は成功したという噂が広まった。これらの噂が正しいことはすぐに判明した。官報に公式の詳細が掲載され、七十五人に及ぶ政治犯の結社をまるごと司法当局が押さえることに成功したと忠良なる臣民に正式に伝えられたのである。

ポーランド蜂起の鎮圧、カラコーゾフによる皇帝暗殺未遂、チェルヌィシエフスキーのシベリア流刑などの後、ロシアにはある程度政治的に落ち着いた時期がやってきた。でも、実際にはこの時期にも容疑をかけ

⁷ (spangle の訛) 金属製またはプラスチック製の薄い小片で、光を受けるときらきら輝くもの。ドレスや舞台衣裳などに縫い付けて装飾とする。 [岩波書店 広辞苑第六版]

られた者は多くいた。ひっきりなしの逮捕や追放はしかるべく続いていた。しかし、この時期には集団的な運動を一つとして明示することはできない。組織的な暗殺の時代はまだ到来していなかったのである。革命的なプロパガンダの傾向そのものは、外国からのはたらきかけの影響と無関係ではないにせよ、著しく変化していた。以前は政治改革と専制政治の打倒という理念にとらわれていたが、今や社会主義的課題が当面の問題となっていた。革命的知識人たちは、一般大衆が無学で貧窮のままにいる限り、いわゆる本質的な成果も期待することは難しいという確信にだんだんと貫かれるようになった。

何かを成し遂げるためには、民衆の中で働き、民衆と親しくなって「簡素な生活をする」ことが必要だ。この世代の人々をトゥルゲーネフは長編小説『処女地』でこれ以上望めないほどに描いた。世間知らずではあったが、まったく犯罪的ではない扇動者で、そこには私がたった今言及した七十五人もまた属している。彼らは爆弾もダイナマイトも使わなかったし、大多数が良家の出で、唯一の罪は「民衆の中へ」行ったことだけだった。そのために彼らは農民服に身を包み、働いて生活している人々の間で扇動を行うという秘密の意図を持って工場に出勤した。しかし、多くの場合、彼らの仕事は居酒屋や市場を訪れて革命的な演説を行い、パンフレットを農民に配ることに限られていた。民衆の気質や話し方についてよくわかっていない扇動者たちはあまりに世事に疎く下手くそに役割を遂行したために、労働者の間に「発酵を引き起こそう」と最初に試みたすぐ後で工場主やら居酒屋の親父、そしてしばしば農民達自身も彼らを警察に売り渡したのだった。

革命家たちによって達成された実質的な成果がいかに小さいものであったとしても、政府は今後のあらゆるプロパガンダを直ちに終わらせることを望んでいて彼らに非常に厳しい態度で臨む必要があると判断した。当局の手に落ちた者はすべて拘留するという命令が出されていた。容疑者とされ逮捕されるためには農民の服装をしさえすればよかったのだ。逮捕された者は、捜査と裁判のためにペテルブルクに連行された。彼らの大多数は互いに面識が無かったにもかかわらず、彼らは共通の事件の関係者とされた。今回もそうであった。同時に当局の首脳部は復讐の力と司法の厳格さによって強い印象を与えたかったのだ。実際、事件は陪審員裁判ではなく政府が指名した特別司法委員会の審理に回された。しかし、被告達はそれぞれ弁護士を立てる権利を持ち、事件の過程は公開で究明されなければならなかった。

ロシアのように距離がむやみにあってしかも報道の印刷出版の自由がない国では、政治裁判がプロパガンダの最良の手段であることを、政府はおそらく認識できていないようであった。ヴェーラと同じ信念を持つ多くの若者たちは、もし政治裁判が「本物の」ニヒリストをどこで探し出せばいいのかを時折教えてくれなかったら、幾年かかっても「大義に奉仕」する機会を見いだすことはできなかつただろう。一般論として、被告は自分のまわりのさまざまな仲間達の中に強い共感呼び起こす。大半の場合彼らは錠のかかった獄につながれているから直接彼らと接触することはできなくても、彼らの友人や親族と連絡を取ることはまったく自由にでき、彼らへの共感が急いで示される。支持者達とその同調の意見を述べられる側の者達との間の信頼関係は確固としたものになっていて、一方が他方を支え、駆り立てる。それゆえ、政治裁判が終わるたびにロシアの英雄叙事詩ブィリーナと同じことが繰り返されるのは驚くにあたらない。一人の英雄にかわって十人の英雄が生まれるのだ。

そしてヴェーラもこの政治裁判の影響を痛感した。目の前に迫った裁判についての第一報に接してから彼

女は他のあらゆることを考えるのをやめた。「官報」の各号が彼女の周到な調査の対象となった。彼女は被告人達の名前だけでなくその弁護士達の名も暗記し、被告人の家族達と知り合う最初のチャンスを逃さないように躍起になった。

こうして夢にまで見た広い活動の場が彼女の前に開かれたのである。近しい人が逮捕されて極貧と絶望に陥った七十五家族が彼女の助けを必要としていた。彼女は積極的な援助を彼らに与えることができ、「大義に奉仕」することができた。そしてそれは彼女にも感情や信念において自分に近い人々の環境にすぐに飛び込む機会を与えてくれたのである。言うまでもなく、新しい友人たちのことで頭がいっぱいになり、彼女は連続講座への出席や私と会うことをぱったりと中断した。もし時たま彼女が私のところにちょっとだけ駆け込んできたとしても、それは私の助けを借りて彼女の大切な人達のために力添えを与えるためだけであった。私もあるときは苦境に立たされたあちこちの家族のための寄付を手配し、あるときはほったらかしにされた子どもを職につけ、あるときは優秀な弁護士を説得して彼らのうちの誰かを弁護させる必要があった。要するにヴェーラは自分のことにも他人のことにも努力を惜しまなかったのである。

四月末には取り調べが終わり、開廷期間が始まった。

六時過ぎから裁判所の入口には大勢の群衆がひしめいていた。傍聴券を持っている人だけが法廷に入ることができ、残った人達は一刻も早く結果を知りたいという希望を持って入口におさまっていた。八時半になると傍聴人を中に入れ始めた。すると突然私たちは広々としたホールの中において、傍聴券を持つ権利があるのかを確認するかのように私たちの顔を注意深く覗き込む垣根のように並んだ二列の憲兵達に挟まれていることに気がついた。

この傍聴人達がじつは二種類のグループの人間で構成されていることがわかるには一瞬眺めやるだけで十分だ。一方はめったに見られぬ見世物を見ようとするのと同じ物好き故にやって来た人達だ。そのほとんどは傍聴券の入手に苦勞しなくていい上流社会の人々であった。その中には年頃をはるかに過ぎた婦人達も見ることができて、彼女達は上品な作法が要求するからとでも言うように黒い服を着ていた。その多くは双眼鏡を手にしていて、どうやら彼女達は目の前で繰り広げられるはずのドラマのディテールを見逃すことを恐れているようだ。彼女達の好奇心はいたく昂じていて、夜更かしの習慣も、大衆と接触することへの自然なありとあらゆる恐怖心もこのために犠牲にすることを厭わなかった。このグループに属する男性たちはほとんど全員が威厳に満ちた様子で、ある者は制服を着ていたが、ある者は星型の徽章をつけていただけだった。

最初の数分間は誰もがシーンと静まりかえって待っているようだったが、しかしすぐにおごそかな静寂は破られた。顔見知りが見つかり、会釈を交わし始めた。男性たちの厚意はご婦人たちにより良い席を譲りたいという望みの形で語られた。少しずつ会話が始まった。最初はささやき声で、やがてどんどん大きな声になって。これがみな早朝に飾り気のない壁と窓の間の簡素な木製のベンチの上で起きたのでなければ、上流社会の集まりの場にいるような気がしたかもしれない。

この参観者のグループと並んでもう一つ別のグループがいた。それは被告人の親族や親しい友人達で構成されていた。悲しげな痩せた顔、極めて古い衣服、陰鬱で重苦しい沈黙、被告人達がそこから姿を見せるに違いない扉を恐る恐る見つめるまなざしなど、それらのすべてが悲しみに満ちた現実、厳しい結末が近づい

ていることを物語っている。

十時ちょうどになると「開廷！」といういつもの叫び声が響く。十二人の議員が入ってくる。どの人もみな高齢で、頭に残っている髪の毛よりも胸につけた勲章のほうが多い。しかし、この人達を見ていると、ロシアの高官のあらゆるカテゴリーを見て取れることに気づく。まだ自分の立身出世は終わっていないと思っているもったいぶった自信満々の政治家の隣には、唇が垂れ下がりが半ば消えかかったようなまなざしの老いぼれた人の姿が目飛び込んでくる。彼らはゆっくりと、ある種の荘重さをもって肘掛け椅子に身を沈める。

脇にある二つめの扉が開き、今度は憲兵に伴われた七十五人の被告人が法廷に入ってくる。これらの罪人たちは異様な姿をしている。やつれた顔は彼らの若さとはひどく不調和である。最も年長の者でもまだ三十歳にもなっておらず、最も若いのはようやく十八歳になったばかりである。彼らはみな着飾っていて、誰もがそれなりに晴れがましいような様子だ。一種のお祭り騒ぎをしているような顔をしている。彼らの中には綺麗な若い娘もいる。彼女達は興奮のあまり目を熱っぽく輝かせ、頬を病的に赤らめている。これらの若者たちは何ヶ月も世界から完全に隔離された状態で過ごしてきたのだ。そしてここへ来て突然近しい人達に会えるとわかり、その場にいる雑多な群衆の中にその人たちが出席しているのを認めた。彼らの顔には、抑えきれないほとんど子どものような喜びが表れている。彼らは、あきらかに、今この瞬間の恐るべき重大性、何年も何年にもわたって人生のあらゆる喜びを奪うことになる判決、その判決が間近に迫っていることを忘れていた。この瞬間、彼らはそんなことはすっかり忘れていた。ただ喜びと優しさで彼らは互いに見つめ合っている。憲兵たちの制止にもかかわらず、多くの人が差しのばされた手を握り、二言三言を交わした。その姿を見て親族や友人たちは自制が効かなくなり、喜びに満ちた挨拶の言葉を発しながら仕切り壁に駆け寄った。

きっと法廷にいた誰もがあの時のことを忘れることはないとは私は信じている。

強い感覚を失って久しいはずの高い社会層に属すると思われる紳士達もこの全体の雰囲気屈してしまう。彼らの同情は一瞬被告に移る。その後家に帰って時間が経ち神経が落ち着くと、無意識のうちに夢中になっていたことを思い出して赤面することも一度ならずだが、あの瞬間彼らは自制することができず、多くの立派な女性たちもこれらの恐ろしいニヒリストどもの姿を見てハンカチを振った。しかし、それもほんの一分ほどのことで、憲兵たちはすぐに秩序を回復し、被告人たちを席に戻した。

審理が本格化する。検事が論告をする。その中で提起されている事実の重大さにもかかわらず、被告人たちは彼の雄弁を聞き流している。彼らは互いに顔を見合わせ、それぞれ自分が受けた印象を、仮に言葉でなくとも目配せや手の合図で伝えようとする。そして、どんなに大きな悲しみを体験することになろうとも、どんなに恐ろしい運命が待ち受けていようとも、まるで勝利が彼らのところに留まるかのように、この瞬間彼らはまったく幸せである。

検事は早く出世しようと躍起になっている若い人だった。そのため彼の雄弁は耳をつんざくほどである。二時間以上にわたって裁判官たちの前でロシアにおける革命運動の暗澹たる姿を描き出すのである。そして被告たちをいくつかのグループに分け、それぞれのグループごとにさらに細分化する可能性を見ている。ちょうど植物学者が草本を属とか種といったレベルで自分の標本集に分類していくように、このことのすべて

を彼はかくも大胆に、かつ素早く行う。それぞれのカテゴリに対して彼は一種独特な非難をするが、彼の雄弁のうち最も毒を持った矢はほとんど五人の被告に格別に向けられたものである。この五人のうち二人は女性であった。一人はとても若い少女で血色の良くない縦長の顔をしており、夢見がちな灰色がかかった水色の目をしている。この子は高級官僚の娘である。同志たちは彼女を「聖女」と呼んでいる。もう一人は年配で、がっしりした体格をしていて、見たところ粗野な家柄の出身である。彼女の広く平べったい顔はまったく美しくなく、そこには狂信と強情の痕跡が残っている。

男性のほうはというと、一人は教養のある顔立ちの労働者、もう一人は奔馬性肺結核⁸の兆候のある学校の教師、三人目がユダヤ系の医学生パヴレンコフである。彼はとりわけ検事の憎悪と憤激を呼び起こしている。

ひとたびパヴレンコフについての論告が始まると、検事は自身の憤激を抑えきれず、彼を本物のメフィストフェレスとして描いた。他の被告達も間違いなく全員非常に有害な人間だと彼は主張した。社会は自らの安全のために彼らを排除する義務があるが、しかしそれでも彼らには酌量できる事情があることも認めなければならない。どんなに筋の通らぬ理論を説いたとしても彼ら自身はそれをみな信じている。しかし、パヴレンコフについてはそうは言えない。彼にとって革命的プロパガンダは自分が高い評価を受ける一方で他人を泥沼に沈めるための手段でしかない。造物主は彼に凡人よりはるかに高い知性を彼に与えたが、彼はこの貴重な恵みを自己と他者を奈落の底に突き落とすためだけに利用した。

フランス人の仕事仲間の例に見習って、検事はパヴレンコフの幼少期から始めて彼の人生を叙述する。パヴレンコフは自尊心の強い少年で、貧しい環境の中、尊敬に値しない両親のもとで育ったと検事は描写した。その両親は道徳的な原理を一切持たない異質な存在だったと彼は主張する。そして、自分たちがそれを持たなかったから、不道徳な本能と闘うにはそれ無しには思いもよらない大切なことを子どもたちに教え込むことができなかった。若いサムイール⁹の知力にひどく驚いた裕福なユダヤ人貿易商が彼を学校に上げた。サムイールは勤勉かつ上首尾に勉強して成功したが、その学びが彼の中に道徳的な感性を発達させることはなかった。中等普通教育修了証を得た後、彼は医学アカデミーに入学する。兄弟姉妹がまだボロ着で身を包んで裸足で往来を走り回っている貧しいユダヤ人少年にとって、これは明らかに予想外の成功であった。しかし、パヴレンコフは神や恩人に感謝する代わりに、幼い頃の貧しさや屈辱が彼の中に引き起こした悪意に満ちた感情を維持し発展させていく。彼は次第に自分より上層にいる人間やすべてのものに対する抑えがたい憎しみを身につけ、自分より良い家の出の同志たちに影響力を行使するために自分の知力と能力を向けるようになる。彼らを自身の邪悪なもくろみにどうやって引き入れるかという考えを自分の心の中に抱くようになった。

そしてこの流儀のまま検事は休みなく話した。彼は法廷がパヴレンコフを法に照らしてできる限り厳しく処罰するよう要請して自分の論告を終えた。このような罪人に憐憫の情を示す余地はないのだ。

検事がパヴレンコフを激しく非難している間、私は被告の顔をじっと見つめていた。ある意味、彼の容貌

⁸ 結核は一般に慢性の経過をとる疾患であるが、一部には急速に進行し広範な乾酪性、空洞性病変を呈する症例があり、奔馬性結核と呼ばれた。最近では急速進展例と呼ばれる。[日本結核病学会 用語委員会 編『新しい結核用語事典』南江堂、2008年、106頁。]

⁹ パヴレンコフのこと。

は他の誰よりも興味深かった。彼は年令の点でも経験の上でも歳上に見えた。他の被告達の顔に息づいていた子どもっぽい純朴さの痕跡を彼の中に見出すことは不可能だった。彼は黒髪で、輪郭のはっきりしたいかにもユダヤ人らしい顔立ちをしていた。彼の目は驚くほど知的で美しかったが、苦々しい皮肉たっぷりの、と同時に官能的な微笑みが彼の口元を歪めていた。彼の厚くて赤い唇は繊細な印象を与える顔の上部との対照によって不快なほどひどく驚かせた。顔の筋肉の震えや両手の激しい動きは彼が神経質であることを表していた。被告達の中で一人彼だけは同志の姿を見ても少しも喜びを示さず、入廷してきた彼に涙に濡れたようなまなざしを見出すこともなかった。パヴレンコフは検事の一言一句に注意を払い、時折紙にメモをしていたが、どんなに憤怒をもってあしらわれようとも彼がかつとなることはなかった。彼の顔に神経質な震えがなければ、審理の結末に個人的な関心を持たない、注意深いとはいえ無関心な傍聴人だと彼のことを勘違いするのは簡単だっただろう。

検事の論告の後に1時間半の休廷があった。傍聴人も被告人も退廷した。議員や弁護士は急いで軽い昼食にとりかかり、傍聴人達は近隣のレストランに散った。

しかし法廷が再開されると今度は弁護士たちが登場する番だ。政治裁判で弁護人を務めるのは容易なことではない。確かにそのような裁判は、出世し、名を上げるには絶好の手段である。しかし、そのかわり弁護士が自分の弁論の中でなにがしかの情熱と信念を表に出すやいなや、たちまち怪しい者のカテゴリーに入ってしまう。雄弁な弁護の後に行政的な追放処分を受けたケースがあったことを今でも覚えている人は多い。しかし、弁護士職に携わる人々の名誉のためにひとこと添える必要があるのは、彼の仲間の中には報酬をまったく期待することなく、被告人のために身を捧げる度量の大きい人が常にいたことである。今回もそうであった。今回も、弁護人という骨折り甲斐のない、しかし極めて重要な役割を自ら喜んで引き受ける人たちが見つかった。彼らは革命運動への自分の依頼人の関与を否定して依頼人を弁護しようとは考えなかった。彼らは依頼人の行動の動機を最も有利となる姿に描き出し、大胆な理論を展開して政治裁判以外ではまったく考えられないような表明もしばしば行った。

裁判長は何度も彼らを遮ろうとした。しかしその骨折りもむなしく、一分後には前の状態に戻り、さらに大胆で決然とした考えが述べられた。

傍聴人たちははほとんど被告人達への共感に満たされていった。物好きからここに来合わせた上流社会の人々はそれまで一度だって考えもしなかったことに強く驚きながら事情に聞き入った。彼らの知的な力はこの向きにはほとんど発達していなかったからだ。それはヴェーラの能力が反対向きには発達していなかったのと同様である。ヴェーラが社会主義をあらゆる問題を解決する唯一の手段であると考えたように、まさにこれらの人々はニヒリスト達のすべての思想が一種の狂気であることを信条として受け入れていたのである。

したがって、雄弁に語られたこれらの考えを彼らが知り、この恐ろしいニヒリストたちは彼らが想像していたような極悪非道な人からほど遠く、不幸せでまったく自己犠牲的な若者たちであるとわかったとき、彼らの目の前に新しい世界が現れ、もはやどんな感じで被告人達と関わればいいのか分からなくなったとしても驚くにはあたらない。かつての蔑むような皮肉たっぷりの態度はもう全然無かった。彼らの中に次第に蓄積されてきた同情が今にも熱狂に移行しかねなかった。裁判官たちだけがいつもどおりの平静を保っていた。

弁護人達の雄弁は彼らの心を動かすことはなかった。彼らは予め指示を受けていてその判決の内容は予見できたからだ。時折り目立ったのは彼らの疲労と無関心の兆しだけだった。

「いつになったらすべてが終わるんだ？」と彼らの口がつぶやいているように思えた。

夕刻が訪れる。裁判長が法廷を閉じる。翌朝審理が再開され、また夜まで続く。

かくして、まる一週間にわたってこれが毎日毎日続く。人々の関心は弱まらないどころか、逆に目に見えて高まる。

最もすばらしい弁護の一つとしてパヴレンコフの弁論を挙げる必要がある。確かに彼も弁護士に断られたわけではなかったが、その助けには甘んじず、パヴレンコフは自己弁護の権利を行使することを決めたのである。彼の弁論は技術的な見地からするとそれまでになされた弁論とは比較にならないほど劣っていた。しかし、その弁論に特別な強さと意味を与えたもの、それは簡潔なこととわざとらしきの無いことだった。彼はその演説を次のような言葉で締めくくった。

「検事閣下はあなた方に私があわれな極貧にあえぐユダヤ人だと言われましたが、それは真実です。しかし、まさに私は貧窮をよく知っているからこそ、また私は蔑まれた民族の出身だからこそ、苦しみ闘うすべての人々に共感するのです。私は普通的手段では何もできないとわかったとき、合法か違法かを気にすることなく並外れた手段に頼ることを決意しました。しかし検事閣下はあなた方に、私の極貧ゆえに私は他の人よりも厳しく罰せられるべきだとおっしゃるのです。それならそれで、私をあの方が望むようにすればいい。私はあなた方の憐れみを求めるつもりはありません。なぜなら私は苦しむことと耐えることに慣れた大衆の一人ですから。」

弁論が終わると判事達は判決を下すために退席したが、しかし傍聴人達はホールに残っていた。二時間ぐらい経った後に彼らは自分たちの席に戻り、裁判長は静かにそして厳かに判決の読み上げにとりかかった。それは一時間ほど続いた。被告の大半はシベリアかあるいは遠方の県への流刑を言い渡された。

さきに触れた五人の罪人だけは五年から二十年の懲役刑を言い渡された。パヴレンコフには案の定、最高刑に処された。

政府側に立つ人達は一人残らず誰もがこの判決は寛大なものだと思なした。みんなもっと厳しい判決を予想していたのだ。

しかし法廷に集まっていた傍聴人達はそうは思わなかった。この人達にとってそれは許し難い驚くべき一撃だった。傍聴人達はこの一週間、被告達と一体になって生き、彼ら一人一人を個人的に知り、彼らの過去の最も奥深い部分まで理解していたのである。だから彼らの運命に無関心でいることは困難だった。よくある見知らぬ人に何か避けがたい不幸が襲いかかったことを知ったときの新聞読者のような視点に立つことは傍聴人達にとって困難だった。

判決の朗読が終わるとすぐに法廷には死んだような静寂が訪れ、その中で時折嗚咽が漏れた。

私の視線は無意識のうちにヴェーラに向けられた。彼女は手すりにつかまって立っていて、顔はカンバスのように青白く、目を大きく見開いて、殉教者の顔に見られるような訝しげなほとんど恍惚とした表情をしていました。

人々は黙ったままゆっくりと散り始めた。

外は春爛漫、水が屋根に流れ落ち、歩道に沿って急流となっている。法廷の毒気に代わって清らかで新鮮な空気が胸に潜り込んできた。これまでの幾日かの間に経験したすべてのことは悪夢に過ぎないようにも思われた。実際に起きたすべての現実を信じるのが困難だった。まるで霧の中で見るように、あの頼りなげな十二人の老人の輪郭が描かれていた。彼らはずいぶん昔から人生のあらゆる喜びを身をもって体験してきたのに、今では心の平静と満足とを持って七十五人の若者の幸せと喜びを根こそぎ刈り取る判決を宣告したのだ。これは誰が見ても苦々しい皮肉としか思えない。

X

数週間が過ぎた。ヴェーラは姿を見せず、彼女からの連絡もなかった。私としては彼女を訪ねようと思っていたのだが、なぜか時間が取れなかった。

五月末のある日のことだった。その日、午餐に招いたお客達がいて、私達がテーブルから立ったちょうどその時に突然客間の扉が開いてヴェーラが入ってきた。おや、まあ、なんということ！彼女はなんと変わってしまったのか！私はその場であっと叫んだほどだ。冬の間中彼女はなんだか黒い形のはっきりしない農民用のゆったりした上衣、私が冗談で彼女のその衣裳を修道女が祭服の下に着るやつと呼んでいたのを着て歩きまわっていたのに、今日彼女は突然明るい水色の夏用のワンピース、それも今流行りのスタイルに仕立てられたのに身を包み、銀製でコーカサス風の幅広い長帯を腰に締めていたのである。そのワンピースは彼女に驚くほどよく似合っていて、それを着ると彼女は六歳ほども若く見えた。しかしワンピースがすべてではなかった。ヴェーラの顔つきは輝くばかりで勝ち誇ったようでもあり、頬には紅潮がさして、濃紺の瞳は火影を放ったかのようにきらきらと光っていた。私は以前からヴェーラが素晴らしい娘であることを知っていたし、しかし彼女が美しい娘であることもこれまで疑ったことがなかった。

私のお客のほとんどが初めて彼女を目にした。ヴェーラの客間への登場は正真正銘のセンセーションを巻き起こした。男性達ばかりでなく女性達も彼女の美しさにひどく驚き、彼女がちょっと腰掛ける間もなくまわりをすっかり囲まれてしまった。

以前はヴェーラが私の家に寄ってそこで不意に見知らぬ人に出会うと、すぐに隅に隠れてしまい、そうなるともう彼女からひとことも言葉を引き出すことができなかった。元々はいかみ屋の彼女はあらゆる初対面の人を本能的に避け、ことに自分の考えに共感してもらえないと薄々気づけばなおさらだった。しかし今日はそんなことは全くなかった。ヴェーラはなんだか寛大な思いやりのある気分で、誰に対しても愛想良く好意的に接していた。おそらくヴェーラの中では大きな喜びが湧き立っていてそれが彼女の全身を満たし、それが周囲に溢れ出ているようだった。

以前のヴェーラにとってはお世辞ほど不快なものはなかったが、しかし今日の彼女は落ち着いていていささか尊大な優雅さも添えながら、ほがらかに元気よくとても的確な冗談ではぐらかしながら終わりまで聞いていたので、私はただただ感嘆するばかりであった。彼女はどこでそんなことを手に入れたのだろうか？立ち居振る舞いも当意即妙も嬌態も！これが血筋というものか！あなたは彼女がニヒリストだと思うでしょう、ニヒリストだと。でも彼女を見てごらんささい。彼女は上流社会の令嬢なんですよ！

しかしこの驚くべき光景は長くは続かなかった。ヴェーラの活気がどうも突然途切れたようだった。彼女の饒舌さは消え去り、目には退屈そうな蔑むような表情が現れた。

「お客様達はもうすぐお帰りになります？じつは、あなたにまじめにお話ししたいことがあるんです。」と彼女は私に耳うちした。

幸いなことに客達は散り始めた。

「どうしたの、ヴェーラ？」二人きりになってすぐ私は彼女に尋ねた。「あなたがわからないわ。」

ヴェーラは答えの代わりに自分の左手¹⁰の薬指をさし示した。たった今私はひどく驚いたのだけど、その指には滑らかな金の指輪があるのに気づいた。

「ヴェーラ、結婚するの？」と私は驚愕して叫んだ。

「もう結婚しています！今日の午後一時から私の結婚式でした。」

「ヴェーラ、それってどういうこと？あなたのご主人はどこにいらっしゃるの？」と私は茫然としながら尋ねた。

ヴェーラの顔が突然晴れやかになった。最高に幸せな歓喜に満ちた微笑みが唇に弾けた。

「私の夫は要塞監獄にいます。私はパヴレンコフと結婚しました。」

「えっ、何？だってあなたは以前には彼のことを知らなかったじゃないの！？あなた達はいったいどこで知り合ったの？」

「私たちは全く知り合いではありませんでした。私は裁判の時に遠くから彼を見てただけで、今日結婚式の十五分前に初めていくつか言葉を交わしたんです。」

「ヴェーラ、いったいどういうこと？それってどういう意味なの？」と私はわけがわからないまま尋ねた。

「ジュリエットがロミオにしたみたいにあなたも彼に一目惚れしたと言うの？それも検事が法廷で彼のことをこっぴどくやっつけている時じゃないの！」

「つまらないことをおっしゃらないでください」と、ヴェーラは私を厳しく遮った。「私の側からも彼の側からも恋に落ちたという話にはありません。私は単に彼と結婚したというのに過ぎないのです。どうしてかと言うとそれが彼を救う唯一の手段だったからです。」

私は黙って訝しげにヴェーラを見やった。

彼女はソファの隅にゆったりと腰を据え、急ぎもせず興奮もせず、まるで単純でありふれた事柄を話すかのように話を始めた。

「あのう、裁判が終わった後で私は弁護士さんたちと長いこと話をしたんです。弁護士さんたちは皆パヴレンコフを除く他の被告についての結果は全然悪くはないという意見でした。学校の先生をしていたあの人はもちろん二、三ヶ月で死ぬでしょうけれど、でもあの人はひどい肺結核なのでどんなことしても長くは生き延びないでしょうって。他の人たちは、みんなシベリアに送られます。そうすると、それぞれ流刑の期間が終わるとロシアに戻ってきて再び事業にとりかかることが期待できるわけです。しかし、パヴレンコフを待ち受けているのはそれではありません。彼はほんとうに悪い巡り合わせになったのです。ほんとうに悪い。」

¹⁰ 英語版ではここに訳者注が付いていて、「奇妙なディテールだ。というのは、ロシア人は通常右手の第四指に結婚指輪をはめるからだ。」とある。

それはもし彼に銃殺刑か絞首台の判決がくだされていたら、ほとんどそのほうが良かったじゃないかと思えるほどです。それなら少なくともすべてが一度で終わるのですから。そうでなければまるまる二十年間も重労働で苦しむことになるんですもの。」

「まあ、ヴェーラ、重労働の刑に処される人なんてそうそうはいないでしょ？」と私は自信なさげに言った。

「ええ、でもね、重労働と言ってもいろいろなんですよ。もし彼が政治犯でなく単なる刑事犯で、検事が彼を念入りに書類を書こうと思わなかったなら、まあ、それは別の問題になっていたでしょう。シベリア送りになっていたらたいした問題ではなかったでしょう。だってシベリアにも人々は住んでいます。それに今では“政治犯”がとてまたくさんいて、ある見方からすれば彼らは力も持っていますから、当局の首脳部も彼らのことを考慮しないわけにはいかないのです。今もしシベリアに送られた人がいたとしても、彼はほとんど嘆くことはないのです。シベリアで辛くても、それでもいつか自分と同じ考えを持つ同志に会えると知っていますし。まだ完全に孤立させられてはいないし、希望は消えないのです。シベリアは退屈で故郷がとて恋しいと思う人は運が良ければ逃げ出すこともできます。なにしろシベリアから逃亡した人はたくさんいるのですから。で、政府は流刑よりももっと酷い脅しの手段を持っています。最高レベルの政治犯、最も危険な政治犯には、ペトロパブロフスク要塞のアレクセーエフ半月堡というのがあって。政府が完全にけりをつけたい人たちは、シベリアに送って強制労働に服させるのではなく、この悪魔のような穴に放り込むのです。それはまさにペテルブルクの、言ってみれば当局最上層部が直接見ることができるところにあります。そこでは黙認するとか大目に見るなどということはてんで問題にもなりません。厳然たる独房監禁制度です。とにかく一度でもそこに入った者は生きてまま葬られます。他の受刑者に会うことも、友人から手紙を受け取ることも、自分についての便りを出すことも許されません。その人は生者のリストから抹消されます。それだけです。我が国の政府はもちろんあちこちにたいそう気兼ねしているとは言えませんが、それでも頻繁に死刑宣告に署名するのは大変なことで政府にとって不面目でもあるのです。だって、海外では何と云われるでしょうか？それで、このアレクセーエフ半月堡というのを思いつきました。絞首台より聞こえはいいですが結果は同じことです。既に幾人の政治犯がそこに閉じ込められたことでしょう。一方、これまでに一人としてそこから出てきたという話を耳にしたことはありません。たいていは数カ月、長くても一、二年経つと、家族に宛てて安らかに息を引き取ったとか気が狂ったとか自殺したとかという知らせが届くのです。アレクセーエフ半月堡では三年を超えての拘禁に耐えた者はいまだに一人もいないと云われています。そしてパヴレンコフにはこの呪わしい穴に入ることが差し迫っていたのです。」

ヴェーラは動揺のあまり顔面蒼白になって立ちつくした。彼女の声は震え長い睫毛には涙が浮かんでいた。

「でも、いったいどうやって彼を助けることができたの？」と、私はもどかしげに尋ねた。

「待って、今すぐおわかりになるから。」とヴェーラはちょっと落ち着いて続けた。「パヴレンコフにどんな運命が差し迫っているか聞いたとき、私は彼のことをどんなに気の毒だと思ったか、口では言い表せないくらいです。昼も夜も彼のことが頭から離れないんです。私は彼の弁護士のところに行って『ほんとうに何も思いつかないんですか』と尋ねました。『打つ手は何もありません』と弁護士は言うのです。『もし彼が既に結婚していたら、その時には話はまた別で、まだ希望が持てたかもしれません。我が国の法律では妻が欲

したら夫について行って重労働に従事する権利があるからです。ですから、もしパヴレンコフに妻がいたら、彼女が皇帝陛下に請願書を出して彼の後を追ってシベリアに行きたいという自分の希望を述べることができ、また皇帝陛下のほうも彼女の法律上の権利を奪ってしまおうとお思いにならなければ、おそらくお慈悲をおかけくださいます。しかし、困ったことにパヴレンコフは独身なんですよ....』って。もうおわかりですよね。」とヴェーラは再び事務的な落ち着いた口調になって続けた。「これらの言葉を聞いたとき、私はすぐに何をすべきかがはっきりとわかりました。皇帝陛下に私がパヴレンコフと教会で結婚することを許していただく必要があると。」

「でも、ヴェーラ！」と私は叫んだ。「その一歩があなたにとってどんな意味を持つのかまさか考えなかったとでも言うの！だってあなたは、パヴレンコフがどんな人で、自己犠牲に値する人なのかどうかだって知らないんでしょう。」

ヴェーラは驚いた様子をして厳しい目つきで私を見た。

「それをあなたは本気でおっしゃっているんですか？」と彼女は尋ねた。「もし私が自分の力の及ぶ限りあらゆることを、あらゆることを断固としてしなければ、私もまた彼の破滅に加担したことになるのをわかっておいでではないのですか？もしあなたがまだ結婚していらっしゃらなかったらあなたもはたして同じことをなさらなかったか、良心に従って私におっしゃってくださいませんか？」

「いいえ。ヴェーラ、嘘じゃないわ。私にはそんな決断はできないと思うわ」と私は率直に答えた。

ヴェーラはしばらく私をじっと見ていた。

「残念だわ！」と彼女は応えるように言ってから話を続けた。「どんなことがあっても彼と結婚することが私の義務だというのは私にははっきりしていました。でも、問題がありました。どうやってその許可を得たらいいのか？弁護士に私の決心を伝えると、彼ははじめのうち、そんなこと考えることすらできん、許可されるわけがないと叫んだものです。私自身どう取りかかったらいいのかわかりませんでした。しかし、ふと、助けてくれそうな人が一人だけいることを思い出したのです。ラロフ伯爵についてお聞きになったことがあります？」

「前の大臣ですよ。彼のことを聞いたことがない人はいないでしょう。職務を離れた今でも相変わらず皇帝陛下に近い人物と言われているそうです。でもいったいどうやってあなたが彼と連絡を取り合えるというのです？」

「あのね、あの人は私たちと遠縁に当たるんだけど、でもそれはたいしたことじゃなくて、肝心なのはあの人がいつだったか私の母に恋をしていたということなの。本気だったんだと思うわ。ちっちゃい女の子だった私を両手で抱っこしてくれて、お菓子を持って来てくれたりしたんですもの。もちろんこれまではあの人の存在を思い出させようなんて頭をかすめもしなかったわ。なぜあんな人を探し求めなければなりません？でも今ならあの人は私にとって利用価値があるかもしれないとすぐに分かったのです。そこで私はあの人に手紙を書いて面会を求めました。するとあの人は即座に返事をくれて私が行く時間を指定してきたのです。」

「それで、ヴェーラ、早く話して。あなた達の間でことはどう収まったの？」私は好奇心に駆られながら尋ねた。「私はあなたが老人を唾然とさせた様子を思い浮かべてしまうわ。そのかたはかつての自分のお気

に入り会えて喜んだのでしょね。」

私は老伯爵について聞いていたことをすべて思い出した。今では彼はすっかり敬虔になり、精進と祈りに明け暮れる日々を過ごしていると。

彼とヴェーラとの面会はきっと手の込んだものだったのだろう。そう思うと、私は思わず笑ってしまった。

「笑うような話じゃありません。可笑しいことは何一つありませんもの。」ヴェーラはむっとしたような口調で言った。「ほら、お聞きになってください。時には私がどんなに利口な人になれるか、また時にはどんなに素晴らしいアイデアを思いつくかを。」と彼女は楽しげに続けた。「おそらくあなたは私があの人のところへニヒリストの姿恰好で行ったと想像していらっしゃるでしょう！そんなことは少しもしていません。だって私はこういった歳をとった罪深い人たちが、たとえ晩年には精進を守っているにしても、それでもきれいな顔を好きなのを知っています。可愛い顔を見るとすぐに心がなごみ、感動して、もうそれを拒むことができないのです。だから私はあの人のところに行くのに着飾ったんです。ことにこのチャンスのためにワンピースをあつらえたの。」ヴェーラは得意そうに自分の服装を指差した。「私はとてもつつましい態度でしたから、なんとまあ虫も殺さないように思われたでしょう。」

「伯爵は私に朝の九時に会うと指定してきました。私はあの人のところへ行きました。まったくもう、あいう高官達がどんなふうにも暮らしているあなたにお話ししますね。スキマ修道士のように祈りを捧げて自分の罪への許しを得ようと望む温和しくて従順な者だったらあんな大邸宅に住むのは許されるわけがないでしょう！入口で私を迎えたのは先端に球の付いた長杖を持った扉番で、その姿はまるで高官のようでとても怖かったです。はじめは私を通してくれようとしませんでした。私が伯爵からの手紙を見せると彼は壁に掛けられた銅板を叩きました。するとすぐに背が高く全身モールで覆われたなんだか従者のような人がまるで地面の下から出てきたように現れて、花で飾られた大理石の階段を通過して私を上階に連れていってくれました。上階では同じように背の高い別の従者が私を迎え、いくつかの広間を通り抜けて私を連れて行き、お仕着せを着た新しい下僕に私を引き渡しました。私は広間から広間へ、客間から客間へと連れ歩かれました。いたる所で様々な木から作られた寄木細工がガラスのようにきらきら輝き、つるつる滑るのでよく気をつけないとぼったり転んでしまいそうなほどでした。天井には絵が描かれ、壁にはたっぷり金メッキされた額に入った鏡があり、家具はダマスク¹¹張りで金箔に覆われていました。しかしどこもかしこも空っぽで、人影も見当たりません。そしてその尊大な下僕は言葉を発せず黙って歩いていき、とうとう私は伯爵の書斎に通され、そこで伯爵付きの近侍が私たちを迎えました。これまで私の案内をしてくれた他の下僕たちはみな背が高く金で刺繍されたお仕着せを着ていましたが、この小さな老人はまるで着古したように見える質素なフロックコートを着たみじめな姿なのに、顔立ちは利口そうでしかも賢く、まったく外交官のように見えました。彼は私の頭から足までまるで私の魂に入り込もうとするかのように注意深く見回し、その後で急がずにこう話したのです。

『ここでお待ちください、奥様。伯爵閣下はたった今起床されて、神様に祈りを捧げておいでです。』

¹¹ 緞子に似た紋織物で、斜文または経縹子の地合いに緯縹子で模様を表した絹織物。古くは金銀糸その他の美しい糸をも加えた。5～6世紀頃、シリアのダマスカスからヨーロッパ諸国へ輸出。ダマスク織。〔広辞苑第六版〕

私は書齋に一人取り残されました。部屋は巨大で、その一方の端からではもう一方の端で何が為されているのかよく見分けられませんでした。ただ、そこには鏡も金箔飾りもなく、家具は質素なオーク材のもので、いたる所に暗い厚手のカーテンや窓掛けカーテンがかかっている、窓も半ば塞がれていましたから部屋の中は薄暗がり支配していました。部屋の隅にはアイコンを入れた巨大な両開きのケースがあり、その前で幾本かの灯明がかすかに燃えていました。

私はそこに座っています。なおも座っています。時間はひどく長引いています。それでも伯爵はおいでになりません！とうとう焦りが出てきました。私は耳をすますようになりました。ある厚手のカーテンの向こうから何やらとりとめの無いまるで低い声でもぐもぐ言っているようなのが聞こえてきます。そこでその隅をこっそりと持ち上げてみると隣の部屋が見えます。カトリックの礼拝堂に似て全体に黒い羅紗が張られ、いたるところにアイコンやキリストのたくぞう磔像のついた十字架や灯明があります。その隅にミイラに似た小さな弱々しい老人がいて、何かをつぶやき、絶え間なく十字を切り、拝跪しています。そして二人のばかに大きな下僕が両側から彼を支えていて、まるでぜんまい仕掛けの人形のように、彼を跪かせ、再び立ち上がらせるというのを繰り返しています。そして、そのうちの一人は今日閣下が何回深いお辞儀をされたかわからなくならないように大声で数えているのです。

私は彼らを見ていると可笑しくなって、私の気後れは消えてしまいました。下僕が四十回まで数えたところで今日はそれで十分ということになり、伯爵はイコノスタシスから連れ出されました。閣下が私の前においでになる迄に私が厚手のカーテンを下ろしてつつまじやかな態度を取り戻すのはかろうじて間に合いました。

あのかたは私を見つけられるなりすぐに『おや！アリーナ（母はそう呼ばれていました）¹²じゃないか！アリーナに瓜二つだ！』と叫び、涙ぐんでさえいらっしやいました。彼は私を祝福して十字を切り始めました。私は彼の手に口づけをし、私の目からも涙を絞り出そうと努めました。

ご老人は昔のことを思い出し始め、心から感動しています。私も馬鹿ではないので、全部彼の調子に合わせて。大義のことはひとことも話さず、母がいつもあなたのことを思い出し、祈り、またあなたについてさまざまな夢を見ているなどと、絶えずいろいろなことを語りました。その時どうして私がそんなことをみんな思いついたのか、今となっては自分でもわからないのです。嘘じゃありません。

閣下はまるで老猫が耳の後ろをくすぐられるようにすっかり柔らかくなりました。彼は私にあらゆる好意を約束してくださり、私に関していろいろな計画も立て始められました。私を宮廷に上げることさえ思い立たれたのです。おわかりでしょう、そう、ご自身のほんとうの娘さんのかわりに私を迎え入れてもいいとお考えになった瞬間だったのです。ご夫人もお子さん達もみんな亡くなられてしまって、彼にはご自分のご家族がいないのでなおさらだったのです。

『今だ！』と私は直感しました。私は突然涙を流し『私は一人の男性を愛しています。もし彼と結婚でき

¹² 英語版ではここに訳者注が付いていて、「コヴァレフスカヤは第Ⅱ章でヴェーラの母親にマリヤと名づけたことを忘れてる。」とある。たしかにヴェーラの母親はマリヤ・ドミトリエヴナだが、ここではわざわざ括弧書きで「母はそう呼ばれていました」とあるから、著者の過誤ではなく、当時ラロフ伯爵がヴェーラの母をそう呼んでいたということではないのか。ちなみに「*мать мою так звали*」という括弧内の記述が英語版では“that was my mother's name”と訳されている。

ないのならほかの何も私はこの世で要りません。』と言いました。」

「え、それで、伯爵はその告白をどう受け止めたの？」と、私は笑いながら尋ねた。

「どうということもありません。はじめは好意的な態度で接してくれました。私を泣かせないように元気づけ、私のために努力すると約束もしてくれました。でも、私が誰と結婚したいと思っているのを知った途端に話は別になりました。老人は陰悪になり、何も聞こうとしません。口調をまったく変え、親しげな「君」から急に よそよそしい「あなた」になりました。私のことをもはや可愛い子とも天使とも呼ばず、もうまったく上流社会の女性に使う敬称で呼ぶのです。こんなふうには、『奥様、もし立派な乙女が不相応な男を愛してしまったら、その親族に残されている為すべきことはただ一つ、神が彼女の理性の目を開かせてくださるようお祈りすることです。』まあ事態がうまくいってないのは私にも目に見えているし、既に完全に絶望に陥っていました。」

ヴェーラは自分の話を急にやめ、言葉に詰まりました。

「え、何？ヴェーラ、どうしたの？どうか終わりまで話して」と、私はしつこくせがんだ。

ヴェーラは顔を赤らめた。

「あのう、私は、ほんとうのことを言うと、今となってはどうしてすべてがああなったのか、ことに私が彼に何を話したのかを覚えていません。ただ...、ただ私がパヴレンコフと結婚して罪を贖い、名誉を守らなければならないと彼は突然理解したのです。」

「ああ、ヴェーラ、あなたは哀れな年寄りをそんなふうには騙して恥ずかしくなかったの！」と、私は咎めるように叫んだ。ヴェーラは驚いて私を見た。

「“哀れな年寄りを騙す”ですって？」彼女は嘲るように私の真似をしてからかった。「恥ずかしく思うことはあります、やはり。でもはたして彼には恥ずべきことは無いのでしょうか！彼ほどの地位と皇帝陛下に対する影響力があれば、どれだけ良いことができたでしょうか、どれほど役に立つことができたでしょうか。なのに彼は何をしました？ひょっとしたら彼は地面に頭をぶつけて天上でもここ地上と同じような暖かい場所に連れて行かれることを望んでいます。でも、彼には他の人達への心配りはまるで無いのです。」

彼は私に対しては思いやりのある態度を取りました。どうして？それは、私の顔が彼の好みに合っていたからです。彼の古い過ちを思い出させ、彼の古い血をかき立てたからです。その点では彼は感謝に値します。でも彼はシベリアに閉じ込められてそこで死に瀕している他の若者達に対しても良い扱いをしたのでしょうか？言えることは何もありません！おそらく彼自身は一生の間にどんなにたくさんの宣告にサインしてきたことでしょうか！もしも彼との間で人間らしく話すことができたとしたら、私は彼を騙すことになるのでしょうか。でも、それはできないことです。もし私が彼のところへ行ってごく普通にパヴレンコフをお救いくださいと言ってみたと考えてください。彼はきっとこう答えたでしょう。「お嬢さん、仕事の邪魔をなさらないでください」と。ねっ、これがお話のすべてです。あそこで騙さずにどうしろとおっしゃるのですか。」

ヴェーラの思いは頂点に達し、興奮のあまり真っ赤になった。

「ねえ、続けて、続けて、お願いだから」と私は彼女をせかした。「その後、どうなったの？」

「そうです。はじめ彼はひどく怒っていました。部屋の中を歩き回り、年寄りが興奮すると皆そうするよ

うに、小さい声でぶつぶつとひとり言を言い始めましたが、そう、だんだんと大きな声になり、私もはっきりと聞きとることができました。『不幸せな娘だ！あんなにまで血迷うなんて！あんな良家の出なのに！彼女のために奔走する値打ちなんか無いけど、母親のためにあの役立たずの娘を救い出さなければならん。一家全体に汚点を招き入れないために、どうにかして罪を償うことが必要だ。』

なおもそう呟きながら部屋の中を歩き回ります。それを聞いている私は笑いそうになるのに、悲嘆に暮れた様子をしていなければなりません。両手を下げて座り、思い切って目を上げることもできません。ひとことと言えばグレートヒェン¹³でした。それだけです。

とうとう彼は私の前に立ち止まり、とても厳しく、でも心にしみるように言いました。『座りなさい、ヴェーラ。そして、皇帝陛下の足元にひれ伏してお前の役立たずの誘惑者と結婚することをお前にお許しくださいよう皇帝陛下にお手紙を書くのだ。私はお前の請願書を陛下にお渡しし、あわせてそのことが公にならないようにすべて取り計らうことを請け合いますよ。』

私は老人に感謝しようとしたのですが、彼は私を払いのけました。『お前のためではなく、お前の母上のためにしていると言っている』。

私は彼に指示されて筆記をするために座ったのですが、その時もう一つの障害があることに気づきました。彼は口述で私に請願書を書き取らせているのですが、その中でシベリアのことについてはひとことも言及されていなかったのです。『シベリアはどうなるんですか？』と私は尋ねました。『だって、私は夫を追ってシベリアに行くのですから。』老人は笑いさえました。『いや、言ってみればそれはお前から求めることじゃない。罪が償われたら、その後でお前は立派な未亡人としてどうにかして自分の好きな場所で生きていったらいい。』と言って。

この言葉を耳にしたとき、私はあなたにはお話ししますが、ほんとうにもう驚いてたじろいだものです。ここで何をしたらいいのだ？あんまりシベリアのことを主張すると、ひょっとして彼にこれが疑しく見え、彼が何に問題があるのか気づき始めてしまうかもしれません。どうしたらいいのか本当にわかりません。その時ふと思いついたのです。私は悔恨の念から、つまりこの自己献身を自ら受け入れることを望んで自身のこれらの罪を贖うために夫の後を追ってシベリアに行きたいのだと彼に言いました。すると、老人はわかってくれました。きっとそういうのが彼の好みだったのだと思います。

彼は胸を打たれて私の邪魔をするつもりはないと言ってくれました。『これは神様の御手の中にあることだ』とおっしゃって、十字を切って私を祝福さえてくださり、帰り際には壁から小さな聖像を取り外して私の首にかけてくださいました。」

「で、その後、その後、いったいどうなったの？」と私は尋ねた。

「その後はもう、よく言われるように、ひとりでうまくいきました。私はどこに行っていたのか誰にもひとことも言わずに家に帰りました。それから一週間も経たないある日のこと大家のお内儀さんさんが全身真っ赤になって息を切らして私のところに駆けつけて、私に名刺を手渡すのです。そして興奮していて自身は次のことを言うのがやっとでした。『あなたのところへとても高位の将官がおいでになっています。お嬢

¹³ ゲーテ作『ファウスト』で重要な役割を演じる娘。ファウストによって身を持ちくずす。

さんに会うのがどうしても必要だとおっしゃって、在宅かどうか尋ねるためにお仕着せを着た従僕を上階に差し向け、ご自身は下の四輪幌馬車の中でお待ちになっていらっしゃいます。』

私が見ると、名刺にはフランス語で『Son excellence le prince Gelobitzky (ジロビツキイ公爵閣下)』とあり、その下には鉛筆で書かれたやはりフランス語の『de la part du Comte Ralof (ラロフ伯爵から)』という添え書きがあって、まあ、これで今になって彼がどんな用事でやって来たのかわかりました。『お呼びしてください』と私は言いました。お内儀はまったく途方に暮れていて『あら、こりゃ驚いた！どうしたらいいでしょう？将官はとても上品でいらっしゃるのに、私たちの部屋ときたら整理整頓されていませんし。さらに悪いことに今日午餐のためにシチーを煮ていますから、家中キャベツの匂いだらけなんて、そんなことはありませんように！』などと言っています。私は『でも、大丈夫ですよ！将官は私たちがシチーを食べていることをお知りにはなるでしょうが。とにかくお呼びして』と言いました。

将官が階段を上る音が私に聞こえてきます。その階段は暗くて狭くてとても古いので彼の足下で軋みます。彼のサーベルがしきりに階段の手すりにひっかかっています。家の中にいた子どもたちは皆飛び出してきたものの、思い切って近づく勇気もなく、ある子は口に、ある子は鼻に指を突っ込んで立ち、野獣を見るように彼を見ています。

そうやって将官が私のところに入ってきました。まだ年寄りとは言えない中年で、お洒落で、白髪のみじった口髭は長くまっすぐ立っていて、ポマードで固めたのは明らかでした。その匂いが鼻をつきます。彼は上流社会の人ですから生まれてこのかたこのような環境にいたことは一度もないと私は思いますけど、彼はそれが習慣になっていない様子をおくびにも見せません。お内儀はそわそわし始め、すり減った肘掛けのついた木製の肘掛け椅子を彼に差し出しました。彼はどうやら何も気づかず、どこか社交界の客間にでもいるように遠慮せずにそれに座り、ヘルメットを膝に乗せて足を前に出すと、愛想のよい笑顔を私の方へ向けて言いました。『C'est bien a la princesse Vera Barantzof, que j'ai l'honneur de parler? (ヴェーラ・バランツォーヴァ公女でいらっしゃいますか?)』私は『はい、私がそうです』と答えました。彼はお内儀に手を振って私たちだけを部屋に残させると、私のほうに身を屈めて内密の話をする顔になり、私が政治犯パヴレンコフと結婚してシベリアまで彼を追ってついていくことを望んでいるのは真実かと尋ねるために皇帝陛下御自身によって彼が私のところに派遣されて来たと言いました。私は『本当です』と答えました。

そうすると彼は私を説き伏せることを始めました。こんなに若くて素晴らしい乙女、こんなにも美しい女性がどうして自ら身を滅ぼすことをできるのか！いったい私は自分が何をしているのか考えたことがあるのか？ロシア貴族の女性である私が、ユダヤ人改宗者、国事犯と結婚する！私の子どもたちには名前も爵位も無いはずだ！子ども達が大人になったらきっと私を非難するだろうと！

『このことのあらゆる問題について私は考えたり、思い直したりを幾度もしてきました。しかし、それでもやはり自分の決心を変えることは致しません』と私は言いました。

将官は、私が自説を固持して譲らないのを見てとります。彼は優しい父親のような顔をし、片目を細めることまでして、私のほうに身を屈め、私の腕を取り、小声で話し始めました。『私はもう若くはない人間だと言われています。自身には子どもがいます。私は自分の実の娘と話すようにあなたとも話しましょう。若い女の子には何が起こるかわからない！あなたが最初ではないし、最後でもありません！考えの足りない一

歩を踏み出して人生を台無しにすべきではありません。皇帝陛下は慈悲深く、伯爵はあなたに好意を持っておいでで、あなたのために多くのことをする用意があります。もしも罪があったとしてもそれは別のやり方で償うことができます。私達はあなたに別のお嬢さんを見つけて差し上げるつもりです。』

一方、私は相変わらず何も理解できていないふりをし続けます。そして、パヴレンコフと結婚したい、彼を追ってシベリアまでついて行きたいとただそれだけを繰り返し言っています。

将官はもうしかたがないと認めました。立ち上がるとお辞儀をして出て行きました。私はと言うと、パヴレンコフの弁護士のところに行き、この一部始終を話して、『あなたの依頼人のところに行って、私たちが彼を救い出すために考えた計画を話してください』と言いました。

数日後書類が届き、そこには私バランツォーヴァ伯爵令嬢に、国事犯であるユダヤ人パヴレンコフがユダヤ教を放棄して正教に改宗したため、合法的な結婚を許されて監獄内の教会で私達を結婚させると書かれていました。」

ヴェーラは黙りこんで物思いに沈んでいた。私たちはしばらくの間ひとことも話さずに座っていた。

「ヴェーラ、」私はとうとう悲しげに言った。「今ではことはもう為されてしまったのだから今さら嘆くのは遅いんだけど。あなたは向こう見ずにも奈落に身を投じてしまったのね。でも、いやはやほんとうにあきれた。だって結婚式の前に一度だって私のところに立ち寄りせず、自分のもくろみについてひとことも言わなかったんですもの！私とあなたは友達だと思っているのに。」

ヴェーラは私を抱きしめて笑った。

「とんでもない、それって私が望んだことなんです！」と彼女は陽気に言った。「でもはたして他の人が無分別にも奈落に身を投げるというのを聞かれたことあります？その時あなただったらどうなさいます？人が首つり自殺を考えているとき、実際に首を吊る前にすべての友人たちのところをくまなく歩いて彼らの同意を求めるべきなのではないでしょうか？」

「それじゃ、つまり、奈落に身を投げたと白状しているわけね？」と私は静かに問いかけた。

「あのね、」ヴェーラはしばらく考えてからこう言った。「私は何かの役回りを演じてあなたの前で自分を気取って見せるつもりは無いの。あなたには何も隠さずに言うけど、あの書類が届いたあの瞬間、すべての障害が取り除かれ、私は本望を遂げたということがわかったんです。つまり、喜ぶのにふさわしかったのです。そうじゃありません？ところが突然私の心は落ち着かなくなりました。結婚式までの一週間はずっとそんな感じでした。私は他の何も考えずにただひたすら動いていられるために、あらゆる種類の仕事ややるべきことだけを考えました。それでも日中人前に出ている間は何ごともなく元気に歩きまわっていたのですが、夜になって一人きりになると.....もう最悪で、心臓が疼き始め、私は怖じ気づき始めるのです。」

そうやって今日私は監獄にやって来ました。私は中に入れてもらえました。表面に鉄を張った重い扉が音を立てて私の背後でぱたんと閉まりました。外は暖かく太陽も照っていたのに、そこでは突然暗闇が私を包み、湿っぽい臭いがしました。心の中では怖くなりました。私はふと幸せも自由も青春も...何もかも扉の向こうに置いてきてしまったようなそんな気がしたのです。耳鳴りさえして、黒い底なしの牢獄に押し込まれるように思えました。

私はついてきた吏員にその書類を見せました。そして、延々と続く長い廊下を連れて行かれました。二人の憲兵が私と一緒に歩きました。一人は私の前に、もう一人は私の後ろです。側面の扉からは制服を着た誰かが絶えず顔を出し、恥知らずな好奇心を隠そうともせず私の足から頭までじろじろと見ていました。監獄の吏員は皆この後行われる結婚式のことを聞き知っていたのでしょう。誰もが許嫁を見たがっていました。彼らはきまり悪がる様子もなく私に関して言いたいことを言っていました。ある将校が他の将校に次のように大声で言ったのが聞こえました。『Ces sacrés nihilistes ne sont pas dégoûtés, ma foi! C'est vraiment dommage d'accoupler un beau brin de fillette comme ça a un brigand de forçat. Passe encore, si Ton avait le droit du seigneur! (あの忌々しいニヒリストどもだって好みがないわけじゃないんだ！畜生！あんな美味しそうな娘を悪党、懲役囚と結婚させるのはまったく残念なことだ。儂がまだ貴族でいて最初に口説くことができたなら！)』

相棒どもは何か私のわからないことを受け答えしていましたが、おそらくは何か卑猥なことを話していたに違いありません。というのは、二人は突然大声で無遠慮に笑い、拍車で金属音を鳴り響かせ、私のそばを通り過ぎる時には屈んで私の顔をあつかましくまっすぐのぞき込み、その時とても近かったので自分の口髭が私に触れそうだったほどでしたから。

一歩一歩進むごとに私の心はどんどん締め付けられていきました。あなたには何も隠さずに白状しますけれど、もしもこの瞬間に結婚式を辞退するようにと勧める誰かが現れたら、私は喜んで一目散に逃げ去ったと思います。

とうとう私は、ペンキを塗った壁がむき出しの、あらゆる家具の代わりに木の椅子が二つあるだけの空っぽの部屋に連れて行かれ、そこに私一人だけ残されて、待っているようにと命じられました。どんなに長い時間一人でそこに座っていたか、私にはわかりません。時間は果てしなく長く感じられました。頭の中では疑いがどんどん増えてきます。自分にはたして正しく振る舞っているのだろうか？私は恐ろしく不屈きな馬鹿げたことをしてはいないだろうか？そして、最も恐ろしかったのは、パヴレンコフとの面会が目の前に迫っていることでした。私は、もしかしたら彼が誰だかわからないかもしれないというのを恐れしました。そして、彼は私に何を話すのだろうか？彼は私を理解してくれるだろうか？私は、これまでに私に思い浮かんだ彼の姿を自分の中に呼び戻そうとしてみましたが、どう試みてもすべて無駄に終わりました。

ついに足音がして扉が開き、二人の憲兵がパヴレンコフを部屋に入れました。彼がどんな様子だったか、どんな顔をしていたか、私はお話することができません。覚えているのは、ただ彼が灰色の囚人服を着ていたことと髪を短く刈られていたことだけです。

数分間私達二人だけにしてくれて、憲兵たちは少し離れて脇に寄り、そこで見て見ぬふりをしていました。

私たちの間に起こったことは、まるで夢のように覚えています。パヴレンコフが私の両手を取って『ありがとう、ヴェーラ、ありがとう』と言ったと思います。彼の声は途切れ途切れで、私も何と云っていいのかわかりませんでした。ただ、信じてほしいのですが、彼が部屋に入ってきたまさにその瞬間に突然私の苦悩がすべて消えてしまって、私はとても晴れ晴れとしてとても明晰になりました。迷いがまるで今までも無かったかのようでした。今や私は自分が正しく振る舞っていること、他の振る舞いかたは決してすべきではなかったことがわかったのです。私達は教会に連れて行かれ、隣り合わせに立たされ、司祭が私たちの手を取って神の御前で正式に結婚させてくださいました。でも今となっては、そのすべてもあたかも霧の中での

ようにぼんやりとしか覚えていないのです。突然手提げ香炉の香りを強く感じ、聖歌隊が『イザヤ、喜べ！』と歌い始めたとき、私は自分が忘我の状態にさえあるのに気づきました。と言うのは、私のそばにいるのはパヴレンコフではなくヴァシーリツェフであるような気がして、彼の優しい声を私ははっきりと耳にしたのです。私はわかっています。よくわかっています。ヴァシーリツェフは私のことを肯定し、私を見て喜んでくれたに違いないと。そして突然私にはすべてがとても明らかになったように思えました。私のこれからの人生全体がまるで地図のように目の前に広がりました。私はシベリアに行き、そこにいる流刑囚たちのそばで働いて、彼らを慰め、彼らに仕え、彼らの手紙を故郷に送ります。」

ヴェーラの声は途切れ、彼女は大声で泣き始めた。

「そして考えてみると、この冬の間ずっと自分が為すべき事業を探して苦しみ続けたことを考えてみると…」と、はつらつとした喜ばしげな声で彼女は話し始めた。「でも、その為すべき事業は今こうして手中にあるのです。しかもなんという事業！これ以上の事業を考えつくことは私にはできないと思うほどです。あなたに率直に白状しますが、私は他の事業では、たとえ革命的なプロパガンダであろうと、非合法の地下活動であろうと、おそらく私はまったく役に立たないのです。そこでは優れた知性と弁舌の才、それに人々の中に入って行って活動して自分についてきてもらえる手腕が必要ですけど、そういった力を私はまったく持っていません。それに自分が他の人を危険にさらしてしまうという無念さに絶えず自分がとられることもあり得ます。でも、こうしてシベリアに行くなんて……私にとってはまさに真の事業なんです！とてもシンプルで、それが思いがけなく現れたのに、まるで自分でうまくやったかのようなのです。神様、私はなんて幸せなんでしょう！」

彼女は私の首に身を投げ、私たちは長い間キスをして泣いた。

六週間ほど後、私はニコラエフスカヤ鉄道の駅で、長旅に出るヴェーラを見送った。教会結婚式の直後、パヴレンコフは他の囚人仲間と一緒にシベリア送りにされた。その道程の大半は徒歩で移動しなければならなかった。そしていよいよヴェーラも既に現地にいる夫に会うために旅立つときが来た。彼女は一人で行くわけではなく、彼女と一緒にもう二人の女性が発った。一人には娘がいて、もう一人には流刑にされた夫がいた。彼らは当然三等車に乗って行ったが、その先に彼らを待ち受けているものに比べればそれははなはだ恵まれた快適な旅のしかたであった。当時、鉄道はヨーロッパ・ロシアの境にまでしか達していなくて、その後は四輪荷馬車かあるいは橇で移動しなければならなかった。もっとも順調なケース、つまりもし道中でどんな特別な障害にも遭遇しなければ、旅は二～三ヶ月続くはずだ。到着したら何が彼らを待っているのか？しかし三人ともそんなことを考えている様子はなく、三人の誰もが落ち着いていて、どこか晴れがましく明るい喜びを感じていた。

ヴェーラが勇敢な一歩を踏み出した後のはじめの時期にあった異様な興奮は収まり、彼女はまた自分の殻に閉じこもるようになり、また私がはじめの頃に知っていたようなあの静かで夢見がちな、やや秘密めいた少女に戻ったのである。彼女は少しだけ痩せて、以前より老けたように見えたが、彼女のダークブルーの瞳は滲刺としてきっぱりと前方を見続けていた。彼女が自分の二人の旅仲間、ことに年配の女性にどんなに優しい配慮をしているかを見るのはとても感動的であった。見たところ三人とも緊密な友情で結びついて、そ

の友情は共通の不幸だけが固めることのできるものであった。

駅には多くの人が集まっていた。単に好奇心とか同情から来た人もいたけれど、シベリアに親戚や友人がいて、旅に出る人達に託して挨拶と知らせを送りたい人たちもいた。もちろん警察もおおぜいいた。

私はやっとのことでヴェーラと二言、三言の言葉を交わすことができた。というのは、みんながヴェーラのまわりに群がっていたからだ。

しかし、最終ベルが鳴って列車が動き出そうとしたとき、彼女は窓から私に手を差し伸べて別れを告げた。この瞬間、私はこの素敵な若い人を待ち受けている運命をありありと想像し、胸が重くなり、目からは涙が流れ出た。

「あなたは私のためにそんなに泣いてくださっているのですか？」とヴェーラは明るい笑顔で言った。「ああ、もしあなたが、逆にここに残られるあなたがた皆さんに私がどれだけ申し訳ないと思っているかをわかってくださったら！」

それが彼女の最後の言葉だった。